

内容と異なるようだ。

P198(第45図)

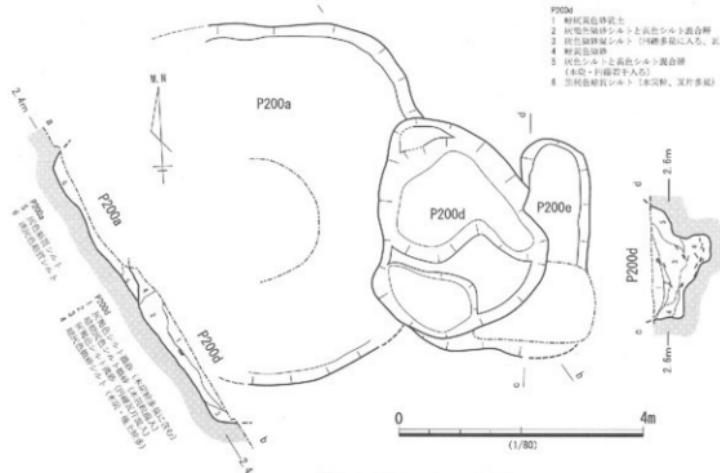
調査区の東端に近い、座標(-7.8, 49.5 ~ 56.5)にあるこの土坑は、今まで見てきた土坑とは様子が異なる。深い方形土坑を中心とし、浅い土坑が連続して築成されたような形状をしている。埋土も木炭、炭、焼土が多い。特に5は灰と木炭層が交互に堆積しており、6は灰と炭で黒色を呈している。連続して灰を処分したか火を使用していた土坑の可能性が強い。順次掘き上げながら使用し、最終的に埋めて放棄した様子が窺える。台所周辺の火所か竈の下部構造と想定している。

出土物はコンテナ半箱ほど。土師質土器類は中袋1、陶磁器類も同等、備前焼は半分、瓦は若干の割合である。土師質土器皿は10個体ほど確認できる。1・3に灯芯痕あり、2は全面に油煤が付着している。成形も底部周辺にナデが施され屈曲し、つくりが重厚である。そのほかP21aのミガキが丁寧なタイプ(第28図1・2)と同様のものもある。備前焼の量は少ないが、大甕の口縁部・脚部片がみられる。瓦には、P90と同類の瓦当文様(第33図24)の瓦片が出土している。陶器に関西系急須の注口片が見られる。備前焼鉢(5)は小形品。肥前陶器碗は白化粧土刷毛目。白磁筒型碗(7)はP164(第41図7)の白磁碗と同種の製品である。当土坑の年代の決め手は乏しいが、十九世紀代の遺物も見られないでの、P164と同時期の遺構と考える。

P199(第46・47図)

座標(-4.6, 53.1)、北端の一部が調査区外になるが、幅1.5m、長さ2.8mほどの不定形で深い土坑。出土物はコンテナ半箱ほど。出土量比率としては、肥前焼器が圧倒している。土師質土器は若干数が出土しており、小皿であろうが器形の判別できない破片が主である。また、窓を表現した屋敷の一部と思われる箱庭道具1点や5mm角ほどの鉄釘が若干出土している。

銅製品(1)は家具装飾品か留め具の一種であろう。砥石(2)には表裏ともに金属で生じたような擦痕が多数見られる。土師質土器は羽釜(3)以外にも炮烙の口縁部片が1点出土している。口縁部がくるり



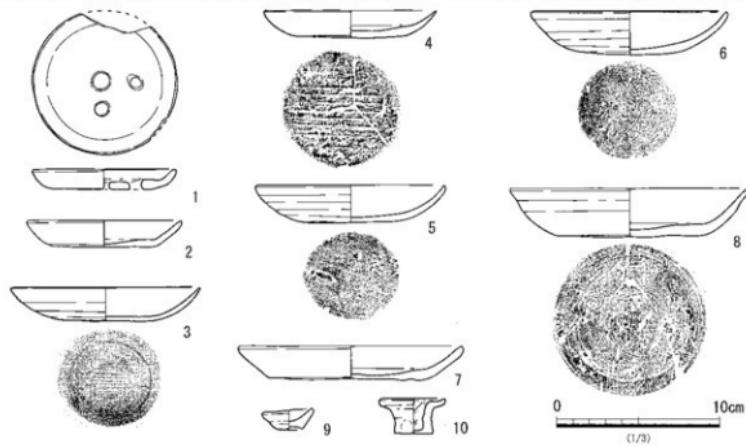
第48図 P200a・d・e (1/80)

と反りかえる胸の浅いタイプで、十八世紀後半から十九世紀のものと見られる。備前焼徳利(6)は人形徳利と同形であるが、人形の貼付はない。底面に陶印「上」が刻印されている。この陶印と同一印が、伊部南大窯跡周辺の西1号窯南トレンチの採集片認められる。5の匣鉢も同窯出土品と同類である。小鉢(8)は塗土が塗られた、火度の低い備前焼。この土坑から出土している備前焼は、塗土が施され赤っぽい印象の製品が多い。連房式登り窓で焼成されることの多い器種と特徴である。筒型碗(9)は陶胎磁器、器形文様とも磁器と変わらないが重厚感がある。見込みに五弁花文を描いている。丸碗(10)には他製品の破片が融着している。このようなものでも製品として流通していたことを窺わせる製品である。12は○内に「漆」を書き文様単位とし、外面に配置している。

P199の埋没は、備前焼(6・8)などから、連房式登り窓で焼成された製品が流通した後、すなわち天保11年(1840)以降の年代となる。

P200a(第49～53図)

P21などと近接する土坑。隣接土坑との切り合い関係は、分割された調査範囲や激しく損壊した基礎部のため、充分把握されてはいない。また、当初大きな一つの土坑と思っていたものが、掘下げの進



No.	種類	器種・剖面	重量(g)	形態・技法等の特徴	出土年の特徴	色調	備考
1	土師質土器	小皿	0.7 6.7 底径 縦径	盤底成形、底部四隅系り? 褐釉、口沿にコナデ。底部に小孔3あり。 縦径: 1.3	新土: 水差、褐色灰分側面粘合 横成形: 灰	内: 10788/2(灰白) 外: 10788/2(灰黄褐色)	口縁1/4欠
2	土師質土器	小皿	11.6 6.2 底径 縦径	口沿: 4.1 底径: 6.2 表面凹凸あり。立ち上げ脚無いコロナデ。内面ナデ。	(新土) 黄赤、褐色灰分側面粘合 横成形: 灰	内: 10788/2(灰白)	口縁1/4欠
3	土師質土器	皿	11.5 2.1 底径 縦径	口沿: 11.5 底径: 2.1 底部成形無し、底面凹凸あり。口縁にむけ付けみにミカキ。内面芦軸子 縦成形: 1.6 口縁凹凸有る時: 1.6、火入付。	(新土) 黄赤、褐色灰分側面粘合、縫 隙成形: 灰	内: 7.3/17/31(黄-赤) 外: 7.3/17/21(明褐色)	元品
4	土師質土器	小皿	0.7 2.0 底径 縦径	口沿: 2.0 底径: 2.1 表面に火入跡ス付着、底面凹凸付り、灰瓦底。	(新土) 灰野絵、 (成形) 灰	内: 10788/2(灰白)	白縁 1/4欠
5	土師質土器	皿	11.4 2.1 底径 縦径	口沿成形無し、凹凸付り。内面にむけ付けみにミカキ。内面凹 凸付り、火入付。	(新土) 黄白、褐色灰分側面粘合、縫 隙成形: 灰	内: 7.3/17/4(灰-白) 外: 7.3/17/21(灰黄褐色)	完品
6	土師質土器	皿	11.5 2.1 底径 縦径	口沿成形無し、中央部口沿に凹凸付り、口縁にアリ。内面凹 凸付りに火入付。内面凹凸付りに火入付: 10、スッ付。	(新土) 黄赤、褐色灰分側面粘合、縫 隙成形: 灰	内: 10788/3(淡黄褐色)	元品
7	土師質土器	皿	13.6 2.1 底径 縦径	口沿: 13.6 底径: 2.1 底部成形無し、中央部口沿に凹凸付り、口縁にアリ。内面凹 凸付りに火入付。	(新土) 黄赤、褐色灰分側面粘合 (成形) 灰	内: 10788/1(灰白)	1/3切
8	土師質土器	皿	14.33 2.1 底径 縦径	口沿成形無し、凹凸付り。内面凹凸付り無し。口縁にコ ロナデ、内面ナデ。底面ナデの付、ナデ。	(新土) 2mm大的沙粒若干 縫隙成形: 灰	内: 10788/5(灰黃褐色)	口縁1/2欠
9	ミニチュア 土器	碗	2.9 1.3 底径 縦径	口沿成形、無地、灰釉。	(新土) 灰野、青灰粘合、縫 隙成形: 灰	内: 10788/3(灰黃褐色)	元品
10	ミニチュア 土器	鉢	4.0 2.4 底径 縦径	口沿成形、表面ヘラ切り、無釉。	(新土) 灰野、青灰粘合、縫 隙成形: 灰	内: 2.3/18/3(灰黃)	口縁2/3欠

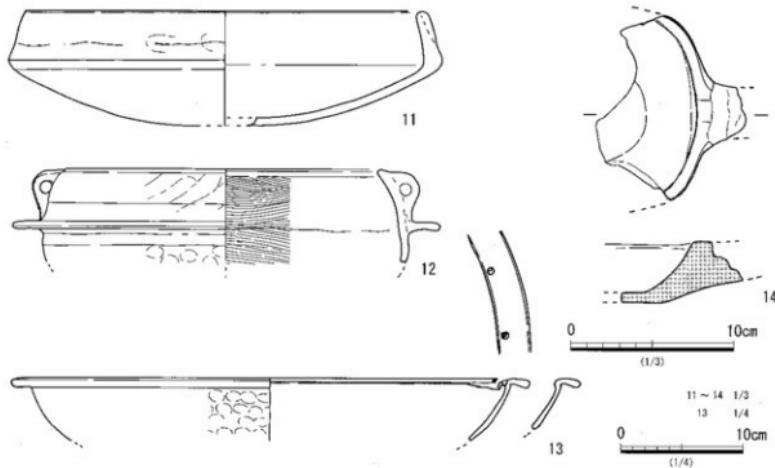
第49図 P200a出土遺物1(1/3)

行につれ別土坑との認識が深まり、a・b・c・dと新に設定されていくことになった。その状況は第48図に示されているとおりである。その結果、上層として採取していた出土物は、P200番をつけられている複数の土坑の遺物を混入している可能性がある。恐らくは、P21とP200の土坑は、緊急で大量な処理を実行するために設定された連続する廻棄坑群なのであろう。P200aは座標(-7, 43)を中心として5m程の範囲になる土坑である。

遺物出土量は、P200aがコンテナ4箱、P200bが1箱、P200cが2箱、P200dが2箱である。ここではP200a出土物を紹介する。200b～200dの出土物も概略同様の傾向を示す。

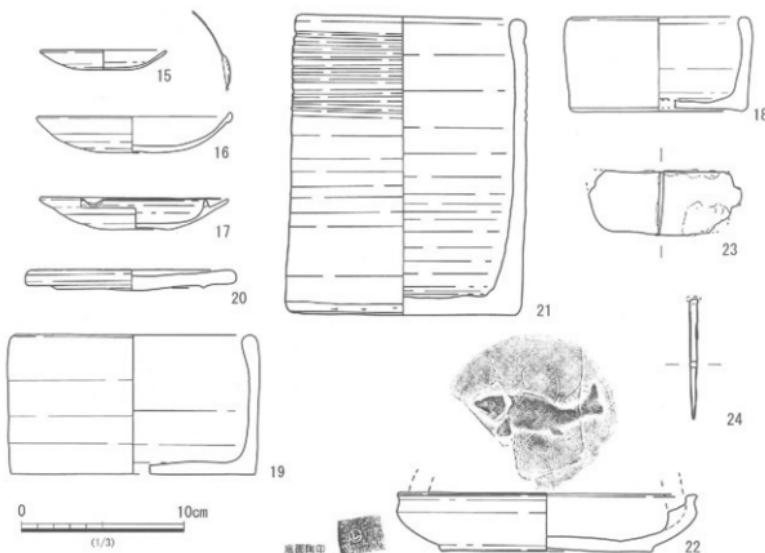
土師質土器皿は、P200a出土品で考えると、法量では大別①径8～9cm、②10～11cm、③13cm、④14cm以上と分類できる。①が小皿、⑤以上が大皿相當になる。また、底部の成形手法ではAへラ切り、B静止糸切り、C回転糸切り、D同心円文があり、それぞれ板压痕を残すタイプが追加される。ABは当調査区ではほとんど出土していない。圧倒的にCタイプとC+板压痕が残るタイプである。そしてDタイプがそれについて観察される。DはP21aでのヘラミガキの顯著な一群と同一である。

1-2は小皿であるが、1は底部に孔が3つ配置されている。焼成後に穿たれているから臨時の用途に供したものであろうか。3・5・6は、底部成形手法のDタイプである。土師質土器小皿や皿は、同一成形であっても、小さいが故に工人の癖が影響して形態に微妙な差が生じる。このDタイプの皿は、法量が異なっても同一の形態を実現しており、きわめて規格性の高い製品である。底部に見られる同心円文は、ろくろ台の中軸部分の痕跡であり、ケズリ・ミガキはこのロクロ上で施工されていた。だから規格性を維持できたのである。このタイプの皿は、胎上や焼成も他の土師質土器皿とは異なり、生産者の由来が伝統的土師質土器生産者とは全く異なっていた可能性が指摘できる。概観すると、Dタイプ手法は備前灯明皿の一部にも見られる。ロクロを用いて皿を生産していた、その共通性によるもので



第50図 P200a出土遺物2(1/3・1/4)

No.	種別	基準・部位	施肥・防除の特徴		土壌等の特徴	色調	固有名
			施肥	防除			
11	十勝實生	鹿の角葡萄	山形 葉裏に白筋や小穴で虫食い。葉面無虫害。葉緑被合度、西斜外側。	葉面に虫食い。葉面無虫害。内面ヨコナズ。葉緑被合度、西斜外側。	(植上) 砂石、苔類、落葉等の枯葉下生長。	内赤 内青(後赤) 内青(後青)	ノルカヒ
12	上川實生	花茶	円錐 葉裏に白筋。 葉面無虫害。	葉緑被合度、葉裏ヨコナズ。 葉緑被合度、葉裏ヨコナズ。	(植上) 梅心が発達せず (葉上) 梅心が発達せず	内赤 内青(後赤) 内青(後青)	ノルカヒ
13	東川實生	白茶	円錐 葉裏に白筋。 葉面無虫害。	葉緑被合度、内面ヨコナズ。 葉緑被合度、内面ヨコナズ。	(植上) 梅心が発達せず (葉上) 梅心が発達せず	内赤 内青(後赤) 内青(後青)	ノルカヒ
14	五宣十勝	十粒	短柱形 葉裏に白筋。 葉面無虫害。	葉緑被合度、内面ヨコナズ。	(植上) 梅心が発達せず (葉上) 梅心が発達せず	内赤 内青(後赤) 内青(後青)	ノルカヒ



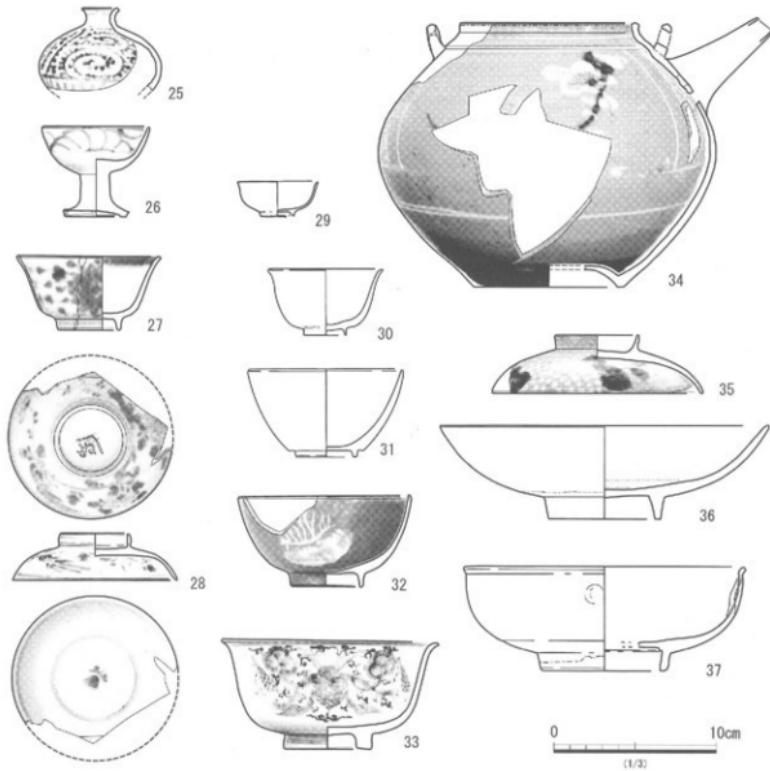
編	時期	器種・部位	法量 (g)	形態・特徴	出土品の特徴	色相	備考
15	備前焼	口縁部 内側 底面	7.7 1.2	内面赤褐色斑駁、ヘタケヅリ、内面ナグ、口縁部芯結スル村井 内面内系	(動1) 無鉢合、無孔 (底) 良好	内: 2, 000(1件) 底: 2, 000(1件)	良品
16	備前焼	口縁部 内側 底面	18.6 1.2	内面ケヅリ、上縁、内面同様ナグ。一箇所剥離あり。内面赤色土色 内面内系	(動2) 無鉢合、無孔 (底) 良好	内: 2, 000(1件) 底: 2, 000(1件)	良品
17	備前焼	口縁部 内側 底面	11.6 6.0 1.2	内面赤褐色斑駁、内面赤褐色、ヘタケヅリ、内縁部ナグ。内面内系	(動3) 無鉢合、無孔 (底) 良好	内: 2, 000(1件) 底: 2, 000(1件)	良品
18	備前焼	口縁部 内側 底面	10.2 6.0 6.7	内面ケヅリ、口クロ成形、内面内系。	(動4) 無鉢合、無孔 (底) 中やわらか	内: 2, 000(1件) 底: 2, 000(1件)	良品
19	備前焼	口縁部 内側 底面	14.4 13.0 6.7	内面内系、口クロ成形、内面内系。	(動5) 無鉢合、無孔 (底) 良好	内: 2, 000(1件) 底: 2, 000(1件)	良品
20	備前焼	蓋 内側 底面	1.9 13.0 6.7	内面内系、口クロ調節、上縁ケヅリ、下縁ナグ、内面ナグ。一部剥離あり。	(動6) 1~2cm 大きな砂利若干、底も薄青 (底) 良好	内: 1, 000(1件) 底: 1, 000(1件)	良品
21	備前焼	口縁部 内側 底面	13.7 18.2 6.7	内面内系、内面内系、口縁部ケヅリ、内面内系。	(動7) 2~3cm 大きな砂利若干、底も薄青 (底) 良好	内: 1, 000(1件) 底: 1, 000(1件)	良品
22	備前焼	把手付口縁部 内側 底面	18.2 13.0 6.5	内面内系、内面内系、口縁部ケヅリ、内面内系。	(動8) 無鉢合、無孔 (底) 良好	内: 1, 000(1件) 底: 1, 000(1件)	良品
23	漆器皿	漆器 内側 底面	9.4 1.1 2.5	内面内系、内面内系、内面内系。			
24	既燃品	羽釜 内側 底面	7.4 2.5	内面内系、内面内系、内面内系。			

第51図 P20a出土遺物3(1/3)

であろうか。また3~6には、法量の差に関係なく、口縁部に灯芯痕が残り、灯明皿として用いられている。9~10はミニニチュア碗と器台。ままごと道具か。

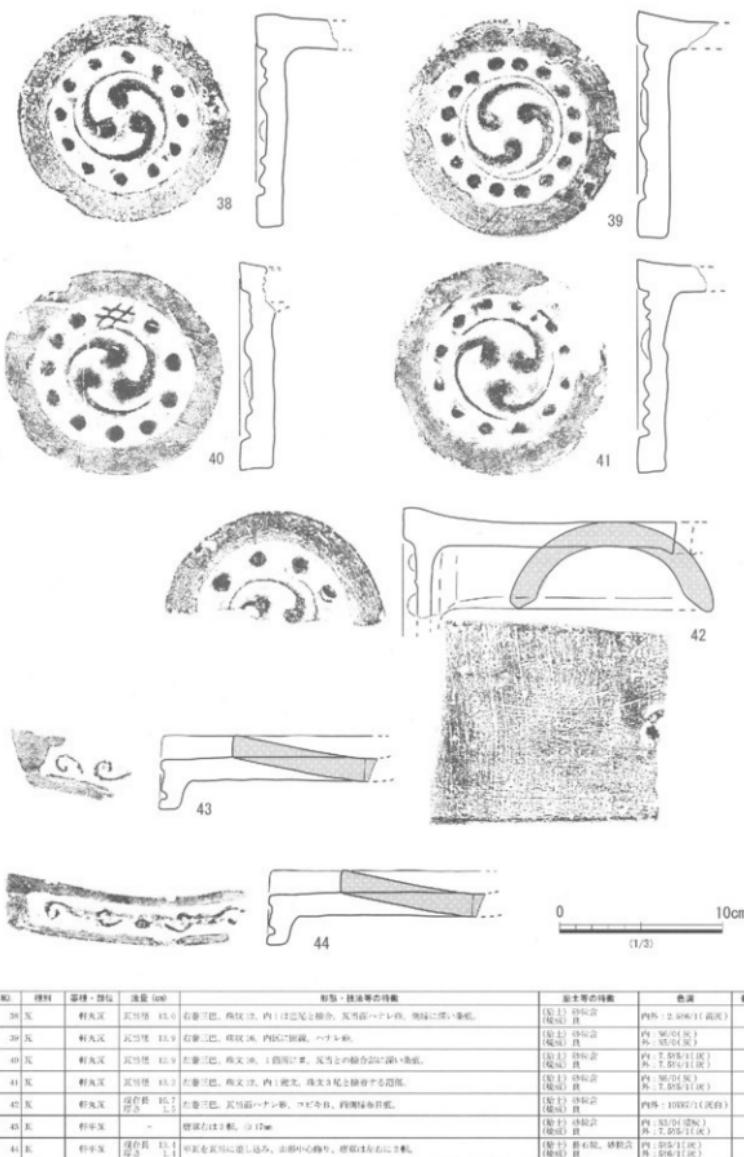
泡烙は畿内系(11)と瀬戸内系(13)がある。11は直立する幅広口縁部と緩やかに湾曲する底部を持つ。底部は型枠に粘土を押しつけ、口縁に粘土帯を巻き付け底部と接合する。底部外面が未調整のままにもかかわらず内面が平滑なこと、口縁接合部に型枠の段が生じていることから判明する。13は内耳と孔が痕跡的な存在であり、浅めのタイプとなる。瀬戸内系の泡烙は、畿内系と異なり外面に押圧痕が残る。しかし内面は平滑である。型を包み込むように粘土を押しつけ成型したものである。12は釣り手用の耳のある羽釜。下半は煤が付着している。14は片手鍋か灰等を処理する十能であろう。

15~17は備前焼灯明皿で、口縁部に煤が付着している。しかし、それぞれ器形が異なる。15~16は土師質土器皿にも同形があり、やはり灯明皿としての使用例がある。17は抉りの入った灯明皿である。



品目	種類	書類・新規	法規 (cm)	沿岸・陸地等の特徴		地土等の特徴	色調	季節
				海岸	陸地			
25	堅密な砂質海岸	海浜	日没後 0.7~	クロロ成形、緩平な地形。海岸上半部平面、下半部斜面。		（陸上） 黒青 （海上） 淡青/黒(沈没)	（陸上） 黒青 （海上） 淡青/黒(沈没)	晴天 1/2、下り天
26	堅密な砂質海岸	松原地帯	日没後 0.8~	クロロ成形、低やかな斜面。海岸は北側が西側へ対称、外洋半面斜面。		（陸上） 黒青 （海上） 淡青/黒(沈没)	（陸上） 黑青 （海上） 淡青/黒(沈没)	日暮 1/2 月
27	堅密な砂質海岸	塩	日没後 0.6~	クロロ成形、傾斜堤防。海岸が北側で緩やか、南側より緩やかで斜面。		（陸上） 黑青 （海上） 淡青/黒(沈没)	（陸上） 黑青 （海上） 淡青/黒(沈没)	1/2 月
28	堅密な砂質海岸	高	日没後 10.1~	クロロ成形、傾斜堤防。海岸が北側で緩やか、南側より緩やかで斜面。		（陸上） 黑青 （海上） 淡青/黒(沈没)	（陸上） 黑青 （海上） 淡青/黒(沈没)	日暮 3/5 月
29	堅密な砂質海岸	低	日没後 0.9~	クロロ成形、傾斜堤防。海岸が北側で緩やか、南側より緩やかで斜面。		（陸上） 黑青 （海上） 淡青/黒(沈没)	（陸上） 黑青 （海上） 淡青/黒(沈没)	1/2 月
30	堅密な砂質海岸	港口	日没後 0.9~	クロロ成形、傾斜堤防。		（陸上） 黑青 （海上） 淡青/黒(沈没)	（陸上） 黑青 （海上） 淡青/黒(沈没)	1/2 月
31	堅密な砂質海岸	港山	日没後 0.9~	クロロ成形、傾斜堤防。高い露頭。		（海上） 坚密な砂質海岸 （陸上） 白	（海上） 坚密な砂質海岸 （陸上） 白	2/3 月
32	堅密な砂質海岸	塩	日没後 0.9~	クロロ成形、傾斜堤防。		（海上） 坚密な砂質海岸 （陸上） 良好	（海上） 坚密な砂質海岸 （陸上） 良好	1/4 月
33	堅密な砂質海岸	塩	日没後 10.4~	クロロ成形、傾斜堤防。内側は陸域、外側は北側斜面。		（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	日暮 1/2 月
34	堅密な砂質海岸	高	日没後 11.2~	クロロ成形、傾斜堤防。内側は陸域、外側は北側斜面。		（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	完滿
35	堅密な砂質海岸	土岸	日没後 10.6~	クロロ成形、傾斜堤防。内側は陸域、外側は北側斜面。		（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	1/2 月
36	堅密な砂質海岸	高	日没後 10.4~	クロロ成形、傾斜堤防。内側は陸域、外側は北側斜面。		（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	日暮 1/2 月
37	堅密な砂質海岸	高	日没後 10.4~	クロロ成形、傾斜堤防。内側は陸域、外側は北側斜面。		（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	日暮 1/2 月
38	堅密な砂質海岸	松原地帯	日没後 10.4~	クロロ成形、傾斜堤防。内側は陸域、外側は北側斜面。		（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	1/2 月
39	堅密な砂質海岸	松原地帯	日没後 10.4~	クロロ成形、傾斜堤防。内側は陸域、外側は北側斜面。		（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	（海上） 黑青 （陸上） 黑青/白(沈没)	1/2 月

第52図 P200a出土遺物4(1/3)



第53図 P200a出土遺物 5(1/3)

器形的には特化した形態のようであるが、出土比率は皿形と比べても多くない。22は取手付き浅鉢。塗上が施されている。裏に陶印が刻印されている。この陶印は、P21a出土品(第30図22)と同一印である。この1点で、P200aは十九世紀後半以降に埋められた土坑とわかる。

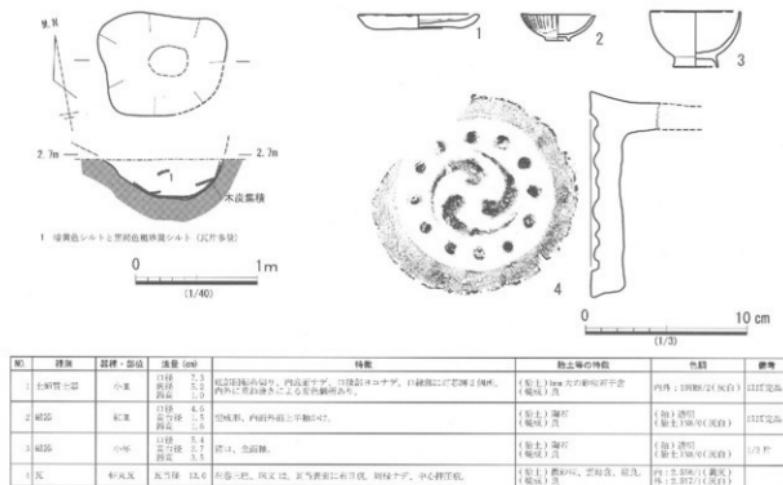
23は鉄製品。器形は不明だが、片側が薄くなり茎があるので刃物であることは確か。24は4mm角の鉄釘である。

陶磁器類は肥前系が優先する。油壺(25)、仏飯器(26)、端反り碗(27)、蓋(28)など種々の器種が見られる。特に27・28には焼継痕がある。28には高台部内に「へぬ」と焼継印が入れられている。岡山城下においても焼継痕跡のある磁器は多く見受けられる。そこには様々な記号が書き入れられているが、其の記号の意味するところは不明である。顧客の記号とも焼継ぎ師の印とも言われる。その中でも、焼継ぎ師は修理品を回収して、終了後客に返還する。そのとき注文台帳と預かる品物とを一致させるために転写した記号との解釈¹⁷⁾が説得力があるようだ。33は磁器碗であるが、今までの文様パターンと異なり、南国風の植物文様を彷彿とさせる。30・31は関西系陶器、34・37は信楽産であろう。

軒丸瓦は珠文の一つが斜行「井」の40と「縫形文」の41とが見られる。42は丸瓦部がコビキBで釘孔がある。43・44は軒平瓦、両者とも均整唐草文だろう。

P201(第54図)

P200とP216と交差する座標(-10.7, 44.3)位置にある長さ1m、幅80cm、深さ30cmほどの方形土坑。埋土は単純であるが、底に木炭灰が堆積し、瓦片の出土が顕著であった。瓦を除外すると、出土物は多くない。土壇皿は4個体分、陶磁器類は中袋1、その内陶器は数点、京焼系が1、肥前陶器碗は白化粧土刷毛目塗がある。備前擂鉢は塗土で赤色発色、擗り目は放射状で密でない。炮烙2個体。畿内系1と胴部がやや深めタイプの瀬戸内系1である。小皿(1)は灯芯痕があり、灯明皿。ほとんど立ち上がりがない。2・3は白磁の小物である。その他、丸碗や口唇部に銹び釉が巡る皿などもある。年代の確定は難しいが、炮烙の形態などから、十八世紀後半以降であろう。

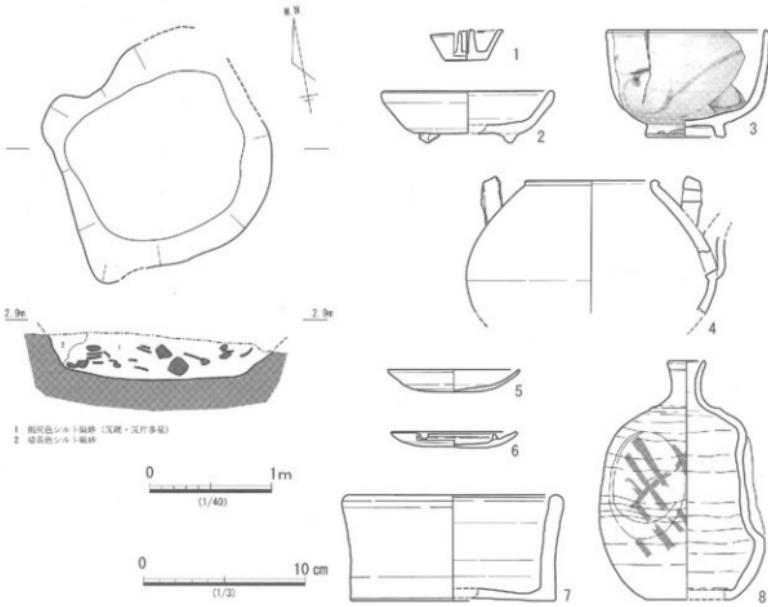


第54図 P201(1/40)と出土遺物(1/3)

P203(第55図)

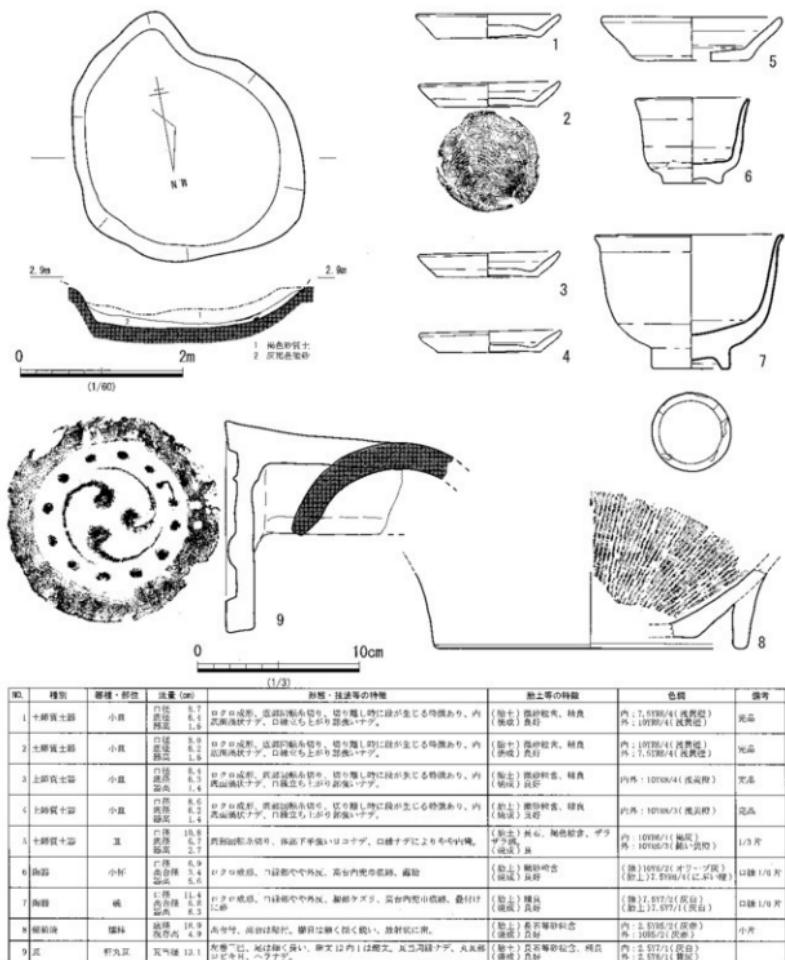
座標(-4.5、55.9)にある一辺1.6m四方の方形土坑。P201と同様埋土の状況は単純で基本的に1層。礫や瓦を多く含む。出土物はコンテナ半箱。備前磁器、備前焼、土師質土器、陶器、瓦を含む。備前焼は大甕片や方形容器を含むので個体としては少ない。

土師質土器は、皿4、瀬戸内系炮烙1、土師質火鉢1、平仄1、足つき皿2である。小皿には煤付着もある。平仄(1)と足つき皿(2)を図示した。平仄は柱頭部に油煤が付着している。磁器は倒壊的に碗類であるが、型押し成形の皿が1点、青磁片も若干みられた。備前焼は大甕片や擂鉢、灯明皿(5・6)がある。京焼系碗も数点、植木鉢が1点ある。楕円陶の土瓶(4)や鍋も1個体分出土している。備前徳利(8)は、胴部に凹みをつけた人形徳利であるが、人形の貼付はP199(第46図6)と同様無い。塗土が施されている。その他、3mm角の鉄釘も2本出土している。P203は人形徳利などから十九世紀後半以降に埋められたものと思われる。



No.	種別	基盤・埋位	深度(cm)	断面・技法等の特徴	出土物等の特徴	色調	備考
1	上部質土器	平仄	0.4 高台根 2.5 2.9	小底部の中心に打ち立てる壁土柱を採用する。油煤付着	(追加) 磁器多発。 (追加) 青磁片	内: 1.357/14(薄い墨縞) 外: 2.357/14(濃い墨縞)	北急
2	上部質土器	皿	1.0 高台 2.6 2.9	合掌型にナラ削ぎ、高台に引取丸の足。	(追加) 青磁片等の焼粧多発。 (追加) 瓦	内: 1.009/3(淡い墨縞) 外: 1.310/6(中墨縞)	1/3月
3	逆造削器	碗	0.7 高台根 2.5	ロクロ成形。高台内に兜型底部、灰碌、表面削り落とし、外側に切欠。	(追加) 磁器多発。 (追加) 瓦	(追加) 油墨縞 0.677/1(明るい) (追加) 油墨縞 1.310/6(中)	田舎 1/4月
4	削器	土瓶	1.0 高台 2.6 2.9	削り落とし、その下に抹石面が付く。壁土。往きの跡の孔3	(追加) 磁器多発、成形。 (追加) 瓦	(追加) 1.310/6(淡い墨縞) (追加) 1.310/6(41.4cm厚)	上半期 1/2月
5	削器	切削器	0.1 高台根 2.5	外表面削り落とし、ケズリ、ヨコナギ。蓋上。	(追加) 磁器多発、成形。 (追加) 瓦	内: 1.310/6(中墨縞) 外: 1.310/6(中墨縞)	1/3月
6	削器	火鉢	0.1 高台 2.5	外表面削り落とし、ケズリ、西面削り落とし、反り落ち傾斜、三面切り口、口	(追加) 磁器多発、成形。 (追加) 瓦	内: 2.357/14(薄い墨縞) 外: 2.357/14(濃い墨縞)	1/3月
7	削器	皿	1.2 高台 2.6 2.9	油墨縞削り落とし、回転コネグ、底部舟を面取り燃焼。表面に凹凸。	(追加) 磁器多発、成形。 (追加) 瓦	内: 2.357/14(薄い墨縞) 外: 2.357/14(濃い墨縞)	1/4月
8	削器	透利	0.1 高台 2.5	ロクロ成形。腹部背面三方に押工。外側に大擦れあり。外全周、内周底玉	(追加) 磁器多発、成形。 (追加) 瓦	内: 2.357/14(薄い墨縞) 外: 2.357/14(濃い墨縞)	1/4月

第55図 P203(1/40)と出土物(1/3)

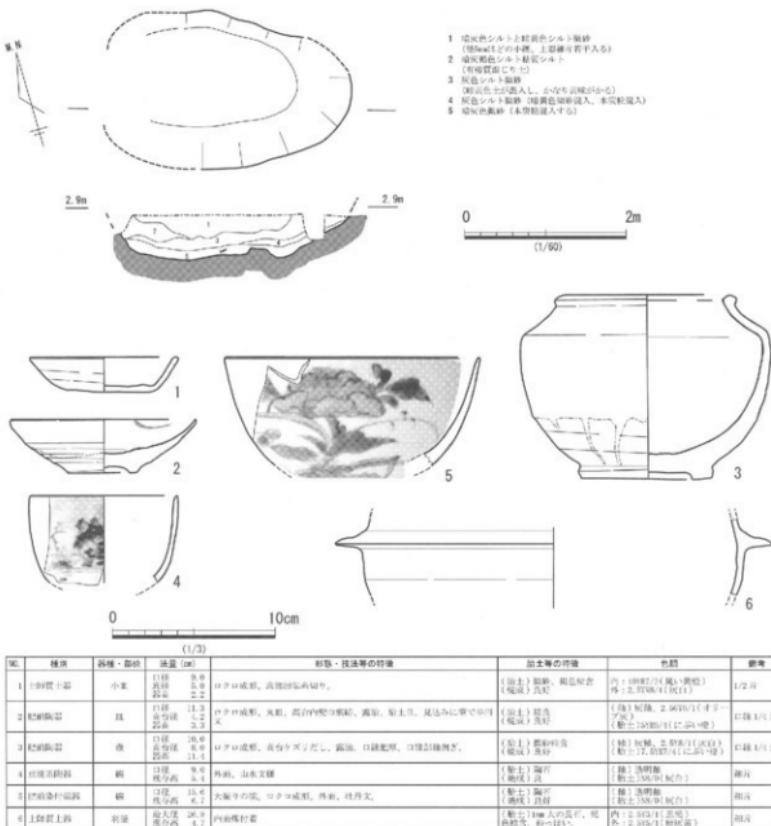


第56図 P210(1/60)と出土遺物(1/3)

P210(第56図)

P199の西隣、座標(-5, 51.5)にある一辺2.8m、深さ40cm程の不定形土坑。

出土物はコンテナ半箱分。土師質土器、肥前陶磁器、備前焼、瓦などがあるが、陶磁器は図示以外では細片が多い。備前焼も大甕片が主で、蓋1と擂鉢1が見られるだけである。この土坑では、土師質土器特に小皿が多く出土している。完形ないし近い形状のものが多く、22個体を識別することができる。その内、径9cm以下が10点、径9cm台が3点、11cm台が2点であった。残りは計測不能である。底部は全て回転糸切り、板の圧痕は付かない。焼成は皆良好。口縁部に煤が付着する個体は3点。うち、11cm台が2点、9cm以下のものが1点である。1~4はその代表例である。これら小皿は、成形の特徴も胎土も



第57図 P216(1/60)と出土遺物(1/3)

共通する。しかも磨耗しているものが少ない。備前捕鉢(8)は底面を丁寧に平らに調整しており、高い貼り付け高台を付けている。近世5期に相当する。軒丸瓦(9)は、珠文の一つが蝶形文になっている。

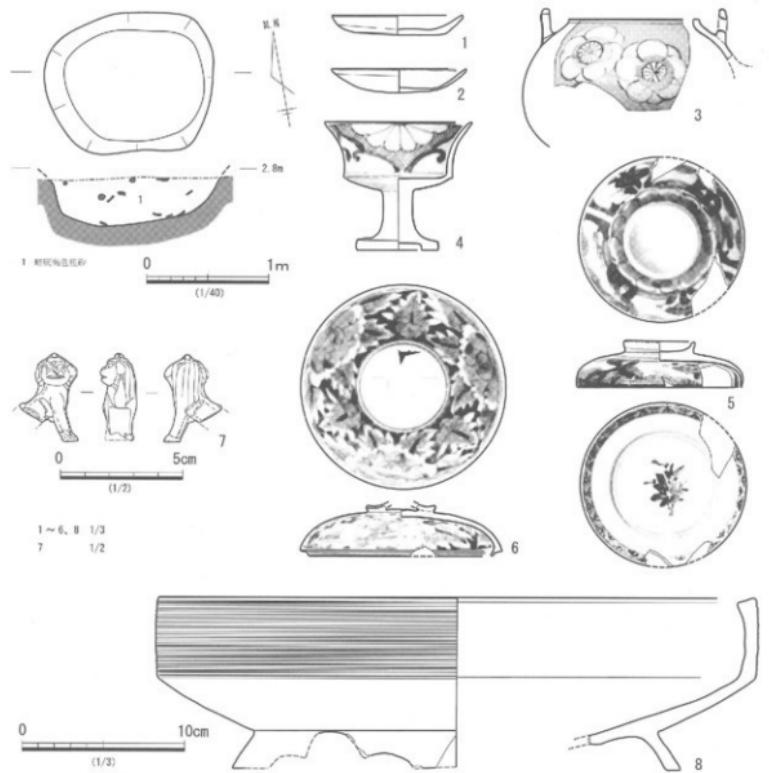
P210の埋没時期は、備前焼擂鉢の年代、すなわち十九世紀後半以降であろう。

P216(第57図)

P201の南に隣接し、井戸4の北側、座標(-11.6, 45.2)にある幅1m、長さ3m以上、深さ50cmの土坑。埋土を5層に分層。2層に有機質が混じり、以下木炭粒が混じる。

出土物はコンテナ1/3程。また、土師質土器と陶磁器の割合も1対3ほどである。磁器は5の碗と破片数点だけ。残りは陶器である。陶器には肥前陶器碗、皿があり、碗には白化粧土刷毛目文がある。土師質土器は小皿4点、煤付着の破片もある。炮烙は胴部破片からの推定だが、瀬戸内系1点、畿内系1点とみられる。

1は土師質土器小皿の深身タイプ。2は肥前陶器皿で胎土目。3は陶器の小壺である。肥前産と見られる。

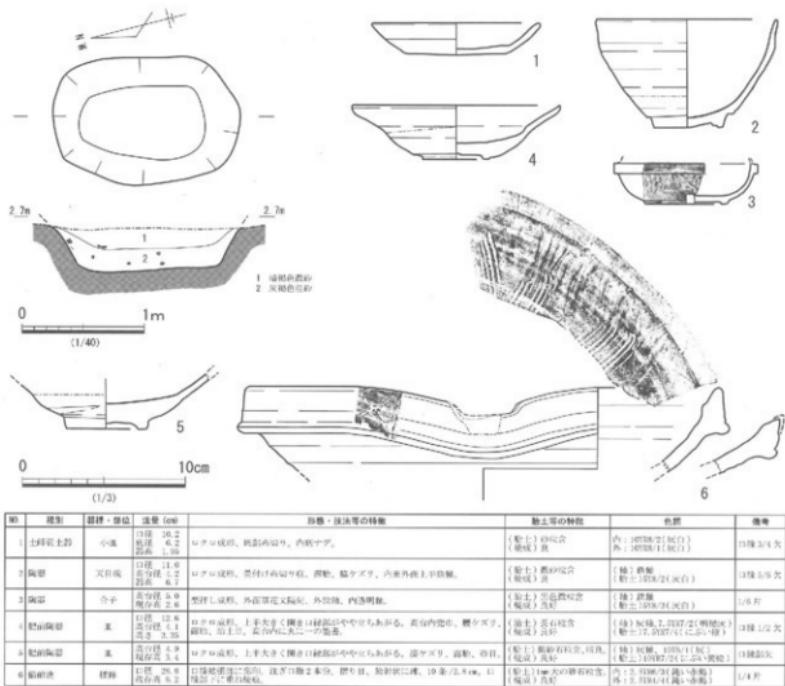


名前	器種・部位	出量 (kg)	形態・復古等の特徴	出土時の状態	色調	埋考
1 土師質土器	小瓶	8.3 粗底 高さ 3.5	ロクア成型、底部斜面直切り、板正板。内底無ナダ。	(粘土) 拾拾被含 (焼成) 青軽	内側: 10.08kg (灰黄橙)	法王元活
2 肥前燒	灯籠	8.2 粗底 高さ 4.2	ロクア成型、み輪ヘラケズリ。内底ナダ、浅盤。口縁は波板状。	(粘土) 拾拾被含 (焼成) 青軽	内側: 2.00kg (灰青褐色)	元活
3 熊唐人頭器	土瓶	8.0 粗底 高さ 7.9	ロクア成型、肩部平甲、見二孔式、鉢底突出十筋。	(粘土) 拾拾被含、頂部 (焼成) 青軽	(粘土) 捕獲頭 (焼成) 青軽	山林 1/2
4 肥前燒付締罐	化粧漆	8.0 粗底 高さ 2.9	ロクア成型、漆付付締罐、蓋剥ぎ。口縁大きく反り返る。外底半平微張丸。	(粘土) 内身 (焼成) 青軽	(粘土) 漆手頭 (焼成) 青軽	法王元活
5 肥前燒付締罐	蓋	10.1 粗底 高さ 2.9	ロクア成型、蓋付付締罐。外底膨丸。見込み肩分厚丸。中心朱文。	(粘土) 被含 (焼成) 青軽	(粘土) 漆手頭 (焼成) 青軽	法王元活
6 肥前燒付締罐	蓋	11.2 粗底 高さ 3.6	ロクア成型、外底未落丸。内裏打ちかに反りあり。	(粘土) 被含 (焼成) 青軽	(粘土) 漆手頭 (焼成) 青軽	鶯み丸、法王
7 土製瓦	瓦大	3.6 粗底 高さ 2.4	堅押し成形、瓦合せせあり。	(粘土) 瓦被含、屋瓦 (焼成) 青軽	10.08kg (瓦白)	硬一燒欠
8 銅鏡胎	也行火瓶	36.5 粗底 高さ 12.4	目録銘ナダ。口縁板ナダ。高台後りあり。無ナ。	(粘土) 銅鏡被含、頸員 (焼成) 青軽	内: 2.50kg (薄い小瓶) 外: 2.50kg (薄い小瓶)	1/8月

第 58 図 P217(1/40) と出土遺物 (1/3)

4は京焼系で、器表に山と松など山水風景が描かれている。5は肥前焼器の人振りの碗である。羽釜(6)は内面および胴下半にススがこびりついている。器壁荒れが著しい。その他に銅鋤片も出土している。

P216の埋没年代は、肥前陶器碗などの特徴から、十七世紀末あるいは十八世紀前半と想定できる。



第59図 P219(1/40)と出土遺物(1/3)

P217(第58図)

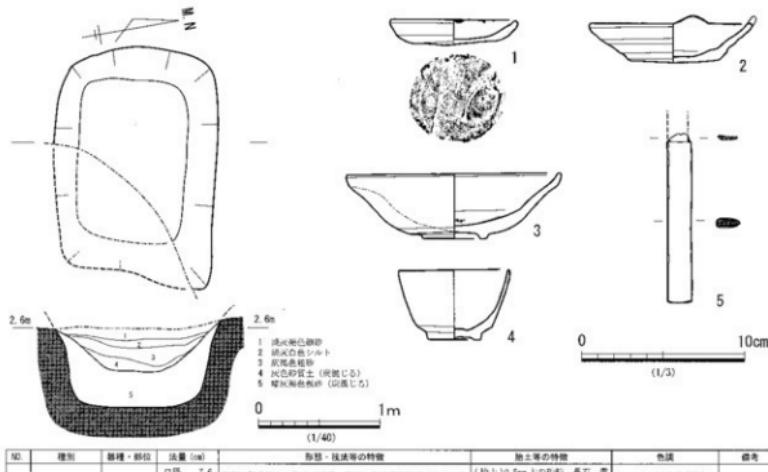
P230の東方にあり、幅1.1m、長さ1.3m、深さ40cmを測り、座標(-8.5, 49.3)に方形土坑である。埋土は1層。出土物は、コンテナ1/4ほど。土師質土器は、小皿が1の他に3点、大皿が1点ある。小皿には成形Cタイプの破片がある。また瀬戸内系焼片もある。陶器は、信楽系が多く、肥前陶器片は数点混じる程度である。褐釉鍋も出土している。一方、肥前磁器は残りがよく、蓋(5・6)や仏飯器(4)は形も文様もよくわかる。このほか破片があるが十数個体分はあつただろう。土瓶(3)は京焼系で錆び絵染付土瓶である。7は猿犬の土人形。備前焼は擂鉢、匣鉢もみられるが小片である。灯明皿(2)は油煤が口縁部ぐるりと付着している。この他にも2点あり、その内1点は抉りの付くタイプ。このタイプには煤が付着していない。また備前焼台付大皿(8)は非常に精美に造られていて、塗土が一面に塗られている。連房式登り窓で焼成されたものか。その他、粘板岩製砥石、3mm角の鉄釘が1点出土している。

P217の埋没年代は、備前焼台付大皿の存在から、十九世紀前半以降と想定できる。

P219(第59図)

P200aの北東隅に隣接して、座標(-3.8, 44.9)にある、幅1m、長さ1.5m、深さ35cmを測る土坑。埋土は2層に分層。出土物は下層2からが主で、量は中袋3ほど。土師質土器1袋、肥前陶器碗皿1袋、備前焼擂鉢2、褐釉陶器1、4mm角の鉄釘2などが見られる。鉄釘には板材の痕跡が錆びて付着している。

土師質土器小皿(1)の他に深皿タイプが2点、皿が1点出土。深皿は内外面に油煤が付着している。天



第 60 図 P230(1/40) と出土遺物(1/3)

目録(2)や肥前陶器皿(4・5)、合子(3)、備前壺鉢(6)などがある。

P219の埋没年代は、肥前陶器皿などの特徴から、十七世紀末以降と想定できる。

P230(第 60 図)

P200adに先行し、しかもP200eより後に形成された土坑で、座標(-8.3、47.1)に位置する。切り合いで激しいが、長さ1.9m、幅1.3m、深さ80cmほどの土坑。埋土は1～4層と5層とで様相は異なる。5層が本来の埋土で、1～4層は落ち込みに堆積した土層であろう。

出土物は、中袋3。土師質土器が1袋、陶磁器が2袋の比率。土師質土器は小皿10個体は確認。畿内系炮烙片1片、肥前陶器皿は2個体以上、肥前陶器碗2個体、磁器片は若干である。

土師質土器小皿(1)と同類が大半で、深身タイプ(2)も他に1点見られる。ただし2のように口縁が擴み状になることはない。2個体ある肥前陶器皿は、3は胎土目であるが、もう1点は砂目である。さらに肥前陶器碗P210(第56図7)と同様の製品が出土している。4は京焼風の小杯。小柄(5)の柄も出土している。

この土坑も、廃棄土坑とは様相が異なる。遺構年代は肥前陶器皿を参考にすると、十七世紀後半以降となろう。

d) 近世遺構面のまとめ

近世遺構面は、検出面の高さから遺構面ⅠとⅡとに分離し、把握してきたが、遺構面の残存する高

さが細かく異なり遺構が統一的に把握できなかったこともあり、大局的には有効でなかった。結局遺構の同時性は、出土物の年代観に依拠することになる。しかし土坑一括遺物には、様々な時期の遺物が混在しており、細かな比較はできなかった。そのような状況において、今回の調査で得られた成果が3点ほどある。

1. 道と溝を検出できたこと。このことにより絵図類との対応が可能となり、具体的に屋敷の住人の特定までが可能となったこと。また、屋敷地の一画を調査したが、勝手口側にあたる空間を調査したと推測できたこと。すなわち勝手側の遺構、ここでは井戸や小規模な上坑、そして台所や火所関連の配置が予想できたこと。

2. 1と関わることとして廃棄土坑は無秩序に形成されているのではなく、その集中性から勝手側にそれも塀や構にそって形成されていたらしいことが明らかになった。また道の石列の偏在性は、屋敷側の性格により異なることを予見させた。

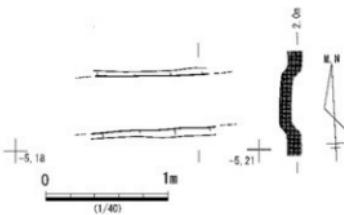
3. 検出された遺構の大半は十九世紀前半にまでは遡り得ず、幕末ころの遺構群であると判明したこと。その契機は、やはり明治維新であろう。具体的には、外堀が埋め立てられ、城下としての町割りに変更が加えられたことなどが影響している。幕末の整理で、人の移動や屋敷割りの変更などが進行し、大量に廃棄すべきゴミが多くなったことを示している。廃棄土坑の形成は、通常屋敷の建替えや災害の後処理に伴い掘られることが予想されるが、政治的な変動にても契機となることが認識できた。

4. 中世以前

近世の遺構面を掘り下げると灰色粘質土が検出された。それは明確なグライ化した部分と黄灰色砂質土とからなり50cm程の堆積を示していた。中世の基盤土と水田層と判断したが、この層からいわゆる早島土器碗(吉備型土師器碗のこと)の破片が出土するので、中世の範疇に形成された土層と判断した。その下層では暗褐色土が検出され、ここからは土師器・弥生土器と思われる土器が出土するのでその頃の年代の遺構面と判断した。

a) 中世(第61図)

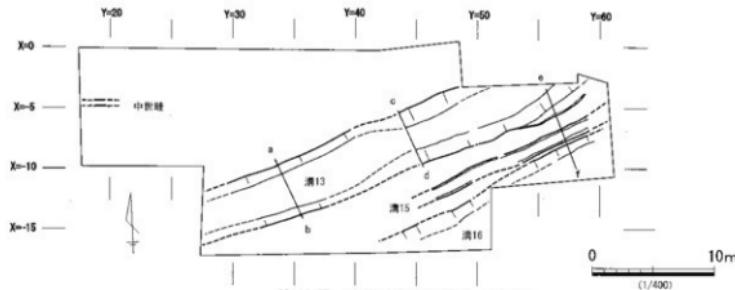
明瞭な中世の遺構は検出されていない。しかし、検出土層の比定から、中世と判断できる水田畦畔が確認されている。畦畔は、長さ1m、上端幅45cm、下端幅55cm、段差は6~7cm程。部分的な検出に留まっており、全体像の把握には至らない。基本土層でも触れているように、調査区内には、中世水田層が確認されている。畦畔の検出は、遺構面からも当地が水田域であったことを示している。この水田層には中世土器細片が混入しており、土層形成を十四世紀代を含む年代との想定が可能である。



第61図 中世畦畔 (1/40)

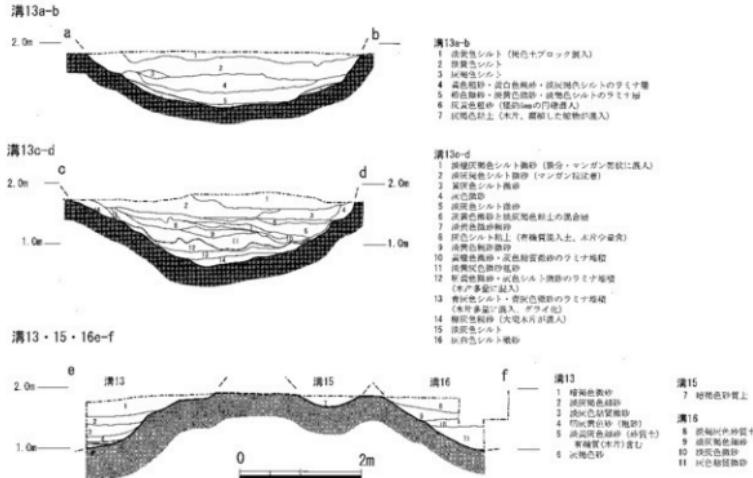
b) 古代(第62図~第64図)

調査区のはば中央部分を東北方向から南西方向へと幅5m程の溝(溝13)が流れている。深さは検出面から最深部で80cmほど。断面形は緩やかなU字を描き、中央部にはえぐれた部分も観察される。また、平行して同規模で同様の溝(溝16)も掘削されている。溝は埋土の大半が細砂・粗砂で埋もれているが、下層部は木片が多くシルト質である。通常は流れがにぶくよどみ状態で、有機質や汚泥が堆積する環境にあったが、一時期上流から大量の砂が流入し一気に埋まった溝と判断できる。



溝13・16とも土器類が出土しているが、出土遺物(第64図)はそれほど多くない。上層下層とも、丹塗り土師器・須恵器・弥生土器類が、何れも細片ではあるが、出土している。溝13の土師器は口縁内側に凹線が巡るタイプ(1)、甕口縁(3)は端部が肥厚するが上方には摘まれていないタイプである。2は丹塗りではなく、胎土から弥生土器鉢であろう。溝16からは須恵器杯の口縁部(5)と細かい刷毛目の施された壺腹片が出土している。どれも磨耗が著しく上流からの流入を示している。しかし、溝の年代を想定する根拠とはなる。土師器片から判断して、古代後半の溝、およそ九・十世紀代には開削されていた溝と想定した。溝15は幅深さとも溝13・16とは異なるが、同じ方向性を示すところから同時期と判断した。当該時期の遺構は、この溝以外には検出されていない。

この溝が自然河道か人工的掘削によるものかの判断は難しい。しかし、自然河道を利用したにしろ、平行する同規模の溝が流走する様相は、人為的に整備した姿に違いない。全て人為的な開削による水路であったならば、岡山平野の条里施行に伴う土木工事がその契機としてあげられる。ただ、この溝の走行方位は岡山平野の条里方向とは一致しない。しかも、中世前半には埋没しており、掘り直され





第64図 古代溝出土遺物 (1/3)

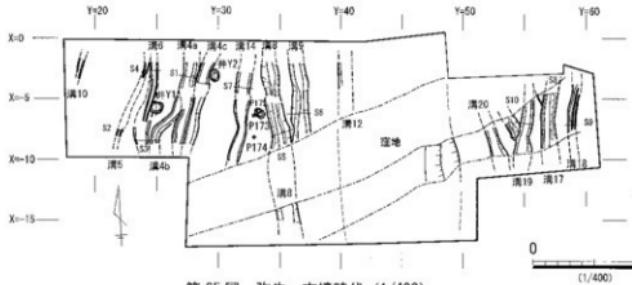
た様相も認められない。この溝の、岡山平野の水利に関わる位置づけは、けっして高くはなかったのであろう。

c) 弥生～古墳（第65図～第68図）

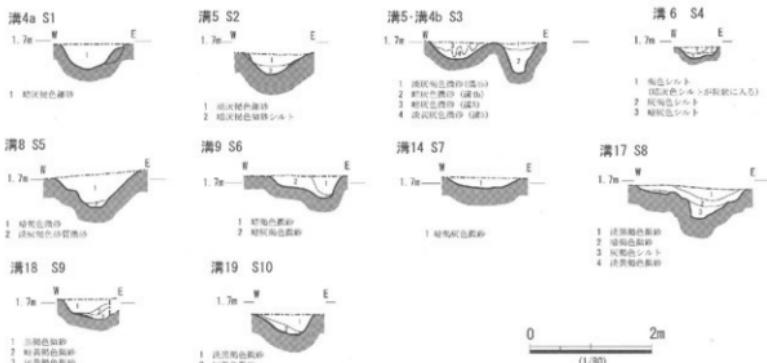
調査区全域に、基盤土層と判断した淡褐色層を切り込んで、南北方向に走行する溝が数条検出された。古代溝13・16や校舎基礎で寸断されてその全貌は捉えにくいが、一部交差しながらもほぼ南北方向に掘削されている。溝の形状は広狭、浅深と種々あるが、概略幅1～1.5m、深さ50cm程度で断面U形を呈した素掘り溝群である。埋土は灰色を帯びる。また、各溝は底の比高差を参考として、北から南方向へ流下していたと想定できる。座標軸Y40～Y50では、溝が検出されていないが、土層(第7図土層3)観察から、皿状にゆるやかに落ちる低位部の存在が確認されている。低位部を挟んで、微高地の縁辺部に溝が掘削されている状況が見てとれる。

溝以外にも、溝に隣接して土坑等が検出(第65図)されている。径約1m、深さ約0.6～1m程の円形土坑を井戸Y1・井戸Y2としたが、両者とも湧水層には達していない。また埋土が単純で廃絶後一気に埋められたようでもあり、第2次調査で多数検出されている粘土探査坑かもしれない。P172は不定型な小土坑であるが、性格等は不明。

溝4abc、溝5上層、溝8、溝9それと井戸Y1・Y2から若干の遺物が出土している。多くは磨耗著しく細片であったが、第68図はその中でも図化できた個体である。弥生後期の土器片(1)と古墳時代前半の土器(2～7)が混在しているようであるが、概略、古墳時代前半の年代に位置づけられる。包含層出土の



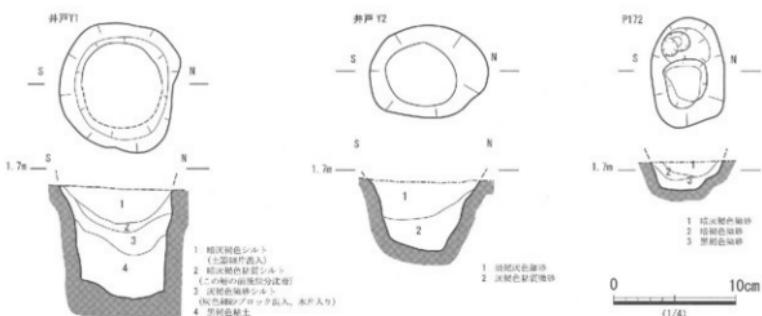
第65図 弥生～古墳時代 (1/400)



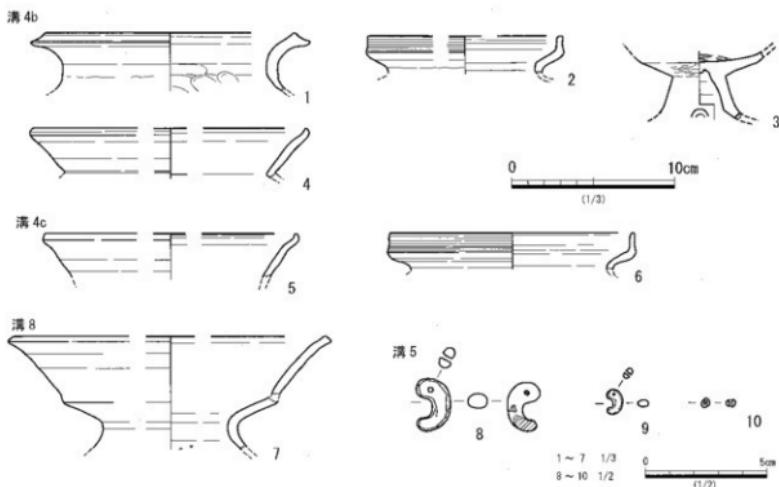
第66図 弥生～古墳時代溝群土層断面(1/80)

土器(第9図)は、古墳時代前期に属する土器であり、比較的保存状態もよい。その時期には埋没していた遺構と想定できる。井戸出土遺物は、胎土などの特徴では溝から出土する土器類との区別は難しく、ほぼ同じ時期の遺構として良いだろう。また特異な遺物として、溝5から出土した瑪瑙製の勾玉(8・9)2点と上玉(10)1点がある。まとまって出土しており、埋葬等の可能性を想定して調査してみたが、確証は得られなかった。

古代以前の遺構を当該地で検出したことは予想外のことであったが、北東に位置する岡山中央小学校地や岡山地方裁判所での発掘調査¹⁰⁾により、市街地においても該期の遺跡の実態が判明しつつある。また、当地域が古代広世郷あるいは出石郷に属すると想定されることからも、当時の遺構を検出できる期待があった。溝の検出のみであったが、確実に遺跡の存在が確認できたことは、周辺地を含めて今後の調査に向けて資料提供ができた点で大きな成果である。



第67図 弥生～古墳時代 井戸・土坑 (1/40)



No.	種別	基準・部位	遺量 (cm)	形態・技法等の特徴	地質学的特徴	色 調	備考
1	手土器	黄	二辻 15.5	内側表面までケメリ。二辻部ヨコナギ。二面削底構に拡張ナギ。底邊外側ススキ付。	(粒子) 粒状粘土、稍良。 (塊状) 塩化物粘土、良。	内: 深褐色(深色) 外: 深褐色(深色)-灰褐色(浅色)	厚4cm 1/3分
2	土器鉢	黄	口辻 11.9	コロナガ調整。口縁部軽削丸溝6条。口部切削厚。	(約±10.0mm) 大のなみ、無石等級 段落多く	内: 黄褐色(中) (に赤い帶) 外: 黄褐色(中)	厚4cm 1/3分
3	土器鉢	高野		レギア削除、脚部に赤いしでん。	(粒子) 粒状、褐色粘土、稍良。 (塊状) 精良。	内: 深褐色(深色)-灰褐色(浅色) 外: 深褐色(深色)	薄4cm 1/3分
4	土器鉢	黄	口辻 16.6	口縁部ヨコナギ。口部やや込み上げ。	(粒子) 黄は、カクサン等多孔 (塊状) 精良。	内: 深褐色(深色)-灰褐色(浅色) 外: 深褐色(深色)	厚4cm 1/3分
5	土器鉢	黄	口辻 15.5	口縁部ヨコナギ。口縁部削除なし。口部やや込み上げ。	(粒子) 黄は、カクサン等多孔 (塊状) 精良。	内: 深褐色(深色)-灰褐色(浅色) 外: 深褐色(深色)	厚4cm 1/3分
6	土器鉢	黄		ヨコナガ調整。口縁部軽削丸溝6条。二面削底。	(粒子) 粒状 (塊状) 精良。	内: 深褐色(深色) 外: 深褐色(深色)	厚4cm 1/3分
7	土器鉢	赤	口辻 19.2	内側削除までケメリ。口縁部ヨコナギ。二辻部ヨコナギ。縫隙平底部。	(約±1.0mm) 大のなみ、無石等級 段落多く	内: 深褐色(深色)-灰褐色(浅色) 外: 深褐色(深色)	厚4cm 1/3分
8	土器鉢	赤玉	2.2	Y字2斜削り。	無	無	无品
9	土器鉢	赤玉	1.1	丸は所削りから	無	無	无品
10	土器鉢	小玉	0.4		無	無	无品

第68図 弥生～古墳時代出土遺物 (1/2-1/3)

5.まとめ

最後に第1次調査区での時間の流れを概観しまとめとする。

弥生後期頃、上流から水路が延長されてきて、周辺の開田が可能となった。それまではこの辺りは、微高地に挟まれた湿地であったが、以後開発が促進されていくことになる。しかし古墳前半期以降でも土地の安定化は図られず、水田の可能性は予想されるものの明確ではない。古代にも河が流れる環境にあり、土地条件は安定していない。しかもその河は古代後半頃に粗砂の大量流入によって埋没してしまう。土地環境が落ち着いて再び水田が確認されるのは、中世になってからである。中世は継続して水田地帯であったようだ。

近世、小早川秀秋治世のもと、近くに外堀が掘られることとなり、一帯は整地・造成され城下町に編入整備される。そして街路が完成し武士が住み始める。途中区画割りの変更など、多少の変遷はありながらも、基本的にはこの状況は幕末まで続く。

江戸幕府が崩壊し明治政府が成立すると、外堀が埋められていき、旧城下は近代都市に変貌を遂げていく。しかし街路が大幅に変更されるのは、第二次世界大戦で市街地が焼滅して、そこから復興を遂げたことによる。以後市立旭中学校、さらに岡山中央中学校校地となり現在に至る。

註

- (1)岡山大学図書館池田家文庫に収蔵されている絵図類。
 a「岡山古圖」寛永9年作製
 b「備前岡山城下之図」慶安年間カ作製
 c「岡山絵図家中屋敷割之図」元禄年間作製
 d「岡山内曲輪絵図」宝永5年カ作製
 e「備前岡山地理家宅一枚図」文久3年作製
- (2)神谷正義・柴田英樹 2004 「岡山城二之外曲輪(旧弘西小跡)」『岡山市埋蔵文化財センター年報3 2002年度』岡山市教育委員会
 神谷正義・河田健司 2005 「岡山城三之外曲輪(旧弘西小跡)」『岡山市埋蔵文化財センター年報4 2003年度』岡山市教育委員会
- (3)岡山大学図書館池田家文庫蔵
- (4)慶應三丁卯年八月上旬改『御侍帳』(1937岡山市『旧版岡山市史第三巻』参照)
- (5)註2文献
- (6)2003『伊部南大廈跡周辺空群確認調査報告書1(備前市埋蔵文化財調査報告5)』備前市教育委員会
- (7)コンテナは36×26×15(cm)内容量を基準
 中袋は15号 26×38(cm)を基準
 大袋は15号 30×45(cm)を基準
- (8)柳瀬町原ほか 2001 「天瀬遺跡・岡山城外堀跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告154』国土交通省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会・遺物番号W107
- (9)石井 啓 2006 「北大窓跡・西大廈跡調査概報」『備前市埋蔵文化財調査報告6』備前市教育委員会
- (10)九州近世陶磁学会編 2000 「九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念」
- (11)江戸造跡研究会編 2001 「江戸戸考古学研究事典』柏書房株式会社
- (12)乗岡尚 2002 「近世備前焼振鉢の編年案」『出土遺物について』『岡山城二之曲輪跡』岡山市教育委員会(13)註11文献
- (14)註10文献
- (15)倉地克直教授(岡山大学文学部)に解説いただいた。
- (16)註文文献
- (17)原広美 1999 「払方町遺跡にみる「焼鉢」の技法』『東京新宿区払方町遺跡』大藏省関東財務局・警察庁・新宿区払方町遺跡調査團
- (18)岡田 博・下津公明・小松原基弘・水田貴士 2006 「南方遺跡—広島高畠岡山支部・岡山地家簡裁庁舎建替えに伴う調査ー』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告200』岡山県教育委員会

表1 岡山城三之外曲輪跡(第1次調査)検出遺構一覧

遺構番号	検出遺構番	位置		遺構の性状等	時期	特徴	出土遺物	備考
		X	Y					
P1	I	-2.0	19.0	土坑	近現代	近現代施設上部	土師質セメント、陶器瓦、瓦片、瓦片通路	小心軽道積を切り込む
P2	I	-4.0	28.5	小土坑	近代以降	面積約1m ²	面積約1m ² 、複数個タイル、ガラス片、軒丸瓦	ガラス片、タイル混入
P2	I	-0.7	5.5	土坑	近現代	面積約1m ²	馬蹄形、ガラス片、人形(木彫像)、瓦片	ガラス瓶底
P3	I	6.0	18.4	土坑	近現代	面積約1m ²	面積約1m ² 、土師質セメント	
P4	I	-2.0	22.5	土坑	近現代	面積約1m ²	瓦片	
P5	I	-4.0	16.7	土坑	近現代	面積約1m ²	土師質セメント	
P6	I	-12.0	28.2	不定形土坑	近現代	面積約1m ²	土師質セメント	
P7	I	-12.0	28.2	不定形土坑	近現代	面積約1m ²	土師質セメント	
P8								矢
P9								矢
P10	I	-12.0	28.2				土師質土器・陶器器・便器類・シジモ	シジモ土器
P11	I	-1.5	24.0	井戸			井戸、漆付漆器小皿、鉢	
P12	I	4.0	28.0	井戸				
P13	I	-2.0	17.0	井戸				
P14	I	-1.0	22.0	井戸			土師質土器・陶器器・瓦	遺物群
P15	I	-1.0	20.5					P14上口付近付
P16	I	-1.0	26.0	おちこみ	近現代	瓦だまり上部	土師質土器・陶器器・陶器器・瓦	P12上付近
P17	I	-5.0	29.0	土坑			土師質土器・陶器器・便器類・漆付漆器・漆付漆器・漆付漆器・漆付漆器・漆付漆器・漆付漆器	
P18	I	-3.0	20.0	井戸			漆付漆器・瓦	
P19	I	-3.2	20.0	井戸			漆付漆器・瓦	
P20	II 上	-10.5	28.6	井戸			漆付漆器・瓦	
P21a	II F	-10.6	10.1	塗壁土坑	HRC 混合	上部斜土壁・小窓・軒丸瓦・漆付漆器・漆付漆器・瓦片・瓦片・瓦片・瓦片・瓦片・瓦片・瓦片・瓦片・瓦片・瓦片・瓦片	傾斜壁付あり・土壁の厚さは各所で異なる・壁面に漆付漆器が付いている・瓦片に割印跡あり	
P21b	II F	6.2	10.0	塗壁土坑	HRC 混合	土師質土器・瓦		
P21c	II F	-11.0	10.0	塗壁土坑	HRC 混合	土師質土器・瓦		
P22	II F	-0.8	36.5	井戸		土師質瓦		
P23	II F	-0.7	38.1	井戸		瓦片		
P24	II F	-3.2	38.1	井戸		瓦片		
P25	II F	7.0	40.0	小土坑		土師質土器・陶器器		
P26	II 上	9.0	38.2	井戸		土師質土器・瓦		

檢出遺傳遺構一覽

調査番号	地盤構造面	位置		遺構の性質等	時期	特徴	出土遺物	備考
		X	Y					
P176	Ⅲ下	-	-					乏
P177	Ⅲ下	-8.2	58.0	廃棄土坑				
P178	近代	-18.2	59.0	土坑	近代			
P181	Ⅲ下	-1.8	61.0	土坑				
P182	Ⅲ下	-3.6	62.1	柱穴				
P183	Ⅲ下	-1.7	63.3	柱穴				
P184	Ⅲ下	0	64.6	土坑	18C後半			
P185	Ⅲ下	-0.9	65.3	柱穴				
P186	Ⅲ下	-2.2	67.7	柱子坑				
P187	Ⅲ上	-18.3	55.5	土坑				
P188	Ⅲ下	8.0	57.6	柱穴				
P189	Ⅲ下	-1.2	63.1	柱穴				
P190	Ⅲ下	-13.6	66.0	串洞	19C	井戸④		
P191	Ⅲ下	18.0	57.7	柱穴				
P192	Ⅲ下	-2.1	64.2	小土坑	18C			
P193	Ⅲ下	15.9	65.0	柱穴	井戸⑤周辺柱穴			
P195	Ⅲ下	-10.1	51.7	柱穴				
P196	Ⅲ下	0	26.5	小土坑				
P197	Ⅲ下	-2.0	59.7	廃棄土坑				
P198	Ⅲ下	7.1	63.9	柱穴				
P199	Ⅲ下	-1.6	55.5	廃棄土坑	18C後半			
P200a	Ⅲ下	-6.2	63.5	柱子坑	18C後半			
P200b	Ⅲ下	-10.6	42.7	廃棄土坑				
P200c	Ⅲ下	-11.0	58.0	廃棄土坑				
P200d	Ⅲ下	7.0	55.0	廃棄土坑	18C後半			
P200e	Ⅲ下	-7.0	37.2	廃棄土坑				
P201	Ⅲ下	-10.7	41.3	土坑				
P202	Ⅲ下	12.6	60.0	廃棄土坑	井戸④周辺柱穴			
P203	Ⅲ下	-1.5	58.5	小土坑	18C後半			
P204	Ⅲ下	-15.0	48.1	柱穴	井戸④周辺柱穴			
P205	Ⅲ下	-13.3	63.0	柱穴	井戸④周辺柱穴			
P206	Ⅲ下	-12.9	57.7	柱穴	井戸④周辺柱穴			
P207	Ⅲ下	-8.7	58.0	小土坑	井戸④周辺柱穴			
P208	Ⅲ下	-5.0	57.5	小土坑	18C			
P209	Ⅲ下	12.0	67.7	柱穴	井戸④周辺柱穴			
P210	Ⅲ下	2.0	51.5	廃棄土坑	18C後半			
P211	Ⅲ下	-14.5	49.1	柱穴	井戸④周辺柱穴			
P212	Ⅲ下	-11.6	61.1	柱穴	井戸④周辺柱穴			
P213	Ⅲ下	-12.0	67.1	柱穴	井戸④周辺柱穴			
P214	Ⅲ下	7.0	59.0	柱穴				
P215	Ⅲ下	-7.2	58.1	柱穴				
P216	Ⅲ下	-11.6	45.2	柱子坑	18C前半			
P217	Ⅲ下	8.5	49.3	小土坑	18C後半			
P218	Ⅲ下	-8.5	52.2	小土坑				
P219	Ⅲ下	-8.8	49.9	小土坑	18C水			
P220	Ⅲ下	8.9	63.3	柱穴				
P221	Ⅲ下	-6.9	58.1	廃棄土坑				
P222	Ⅲ下	-7.1	59.6	小土坑				
P223	Ⅲ下	-13.6	63.9	柱穴				
P224	Ⅲ下	-13.1	58.5	柱穴				
P225	Ⅲ下	-13.1	58.5	柱穴				
P226	Ⅲ下	-13.5	58.5	柱穴				
P226	Ⅲ下	-4.1	65.2	小土坑	井戸④周辺柱穴			
P227	Ⅲ下	-13.9	58.1	柱穴	井戸④周辺柱穴			
P228	Ⅲ下	-12.9	58.0	柱穴	井戸④周辺柱穴			
P229	Ⅲ下	-7.5	67.8	柱穴				
P230	Ⅲ下	-8.3	61.1	土坑	17C後半			
P231	Ⅲ下	-6.0	56.6	小土坑				
P232	Ⅲ下	-6.2	56.6	柱穴				
P233	Ⅲ下	-3.7	60.6	柱穴				
P234	Ⅲ下	-7.6	58.4	柱穴				
P235	Ⅲ下	-7.8	58.4	廃棄土坑				
P236	Ⅲ下	-4.6	65.6	柱穴				

検出遺物遺構一覧

遺構番号	検出遺構番	位置		遺構の性格等	時期	特徴	出土遺物	備考
		X	Y					
P201	II F	-9.0	47.0	柱穴			土師質土器、陶器片	
P202	II 下	-6.9	54.1	柱穴			土師質土器、土器片	
P203	II 下	-6.0	51.1	柱穴				
P204	II F	0.5	42.1	柱穴				
P205～P249 横								
P209	II 上	-10.0	50.0	小土坑			土師質土器、陶器片、麻布系	
P211	II F	-7.1	58.9	小土坑				
P202	II 下	-6.4	59.2	土坑			土師質土器小口、肥前燒付面、高砂燒、軒丸瓦、瓦片	施墨斑造あり
井戸 3								
井戸 4	近便	-5.8	19	井戸 3			井戸開削跡、深約1.5m	
井戸 5	II 下	-13.2	56.2		DK 前半			井戸 2 位
井戸 6	II 上	-13.2	51.3		DK 前半			井戸 3 位
井戸 7	II 上	-1.3	23.2	井戸			土師質土器小口、陶瓶器物、高砂燒、ガラス片、上縁	
溝 02	II 上	-2.9	18.8	溝	DKC		土師質土器片、陶瓶器物、高砂燒、ガラス片、上縁	
溝 03	II 下	-1.7	27.1	溝	DKC 前半		丸瓦（船形瓦）・ガラス片	軒丸瓦室内に船形
溝 04	IV	-2.0	27.8	溝			赤生土器、土器片	
溝 05	IV	-6.7	26.7	溝			赤生土器、土器片	
溝 06	IV	-6.7	27.8	溝			赤生土器、土器片	
溝 07	IV	-2.0	29.2	溝			赤生土器、土器片	
溝 08	IV	-6.7	27.5	溝			赤生土器	
溝 09	IV	-6.1	21.3	溝			赤生土器	
溝 10	IV	-2.0	21.8	溝			赤生土器	
溝 11	IV	-6.7	23.8	溝			赤生土器	
溝 12	IV	-2.0	34.2	溝			赤生土器	
溝 13	IV	-18.0	35.5	溝			赤生土器	
溝 14	IV	-2.0	36.5	溝			赤生土器	
溝 15	IV	-3.0	18.7	溝			赤生土器	
溝 16	IV	-2.0	19.0	溝			赤生土器	
溝 17	IV	-1.7	19.7	溝			赤生土器	
溝 18	IV	-1.7	20.3	溝			赤生土器	
溝 19	IV	-1.9	50.2	溝			赤生土器	
溝 20	IV	-1.1	49.5	溝			赤生土器	
溝 21	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 22	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 23	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 24	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 25	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 26	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 27	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 28	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 29	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 30	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 31	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 32	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 33	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 34	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 35	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 36	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 37	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 38	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 39	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 40	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 41	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 42	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 43	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 44	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 45	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 46	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 47	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 48	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 49	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 50	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 51	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 52	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 53	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 54	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 55	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 56	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 57	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 58	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 59	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 60	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 61	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 62	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 63	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 64	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 65	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 66	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 67	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 68	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 69	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 70	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 71	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 72	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 73	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 74	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 75	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 76	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 77	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 78	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 79	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 80	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 81	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 82	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 83	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 84	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 85	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 86	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 87	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 88	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 89	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 90	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 91	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 92	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 93	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 94	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 95	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 96	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 97	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 98	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 99	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 100	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 101	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 102	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 103	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 104	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 105	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 106	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 107	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 108	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 109	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 110	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 111	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 112	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 113	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 114	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 115	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 116	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 117	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 118	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 119	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 120	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 121	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 122	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 123	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 124	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 125	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 126	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 127	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 128	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 129	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 130	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 131	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 132	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 133	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 134	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 135	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 136	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 137	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 138	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 139	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 140	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 141	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 142	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 143	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 144	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 145	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 146	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 147	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 148	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 149	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 150	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 151	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 152	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 153	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 154	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 155	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 156	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 157	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 158	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 159	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 160	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 161	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 162	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 163	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 164	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 165	IV	-1.7	49.5	溝			赤生土器	
溝 166	IV	-1.						

第4章 第2次調査（体育館・特別教室棟調査区）

1 調査区の概要と土層堆積状況

a) 調査区の概要と土層断面の状況

第2次調査区は体育館・特別教室棟計画地の内、基礎が深い円筒校舎部分を除くおよそ800m²を対象としている。調査区には、GPS測量により国土座標に基づく4級多角点2点を設置、水準点については付近の街区三角点、街区多角点より直接水準を行い仮ベンチマークを設置し、発掘調査の基準としている。調査区付近は、校舎解体後の整地面ではあるが、標高4m前後である。調査区の北半部は旧円筒校舎と旧西校舎の間にあたっており、土層や遺構面が比較的よく残るのに対し、調査区南半部は旧西校舎の基礎掘方及びその解体に伴う搅乱により標高2.3～3.4m付近まで掘削されており、旧岡山藩藩学開校時以降の土層及び遺構面はほぼ失われている状況であった。発掘調査は最終的に、標高1.2～1.6m付近の弥生時代以前に形成されたとみられる微高地基盤上面まで掘削しており、近代、近世3面、古代、弥生～古墳時代の各遺構面を調査対象とした。

調査区の土層断面は東壁、南壁、西壁の3面を記録した。北壁はその大半が旧円筒校舎基礎掘方となつていて記録をとっていない。各土層断面は、掘削が現地表から3m程度に及ぶため、標高3m付近で約3m手前に退いている。なお、各土層断面とも、国土座標軸からわずかに振っているが、断面図は国土座標軸に投影した形で表現している。

b) 土層堆積状況

近代以降

第I層は旧西校舎の基礎掘方及びその解体に伴う搅乱土層である。解体時の掘方はおおむね旧基礎の形状に合わせ、調査区南半部の標高2.3～3.4m付近まで掘削されている。一部に円礫と割石を敷き詰める西校舎基礎の下部構造を残している。

第II層は主に昭和20年6月の岡山大空襲で岡山師範学校女子部、第二岡山高等女学校が焼失して以降の戦災復興の整地土層とみられる。特にII-③層は焼土や瓦片、女子師範寄宿舎の床材であった磚、花崗岩石材、煉瓦、モルタル塊などを多量に含んでおり、女子師範基礎の上部構造を壊し、泉池や桥



第69図 土層断面の位置(1/400)

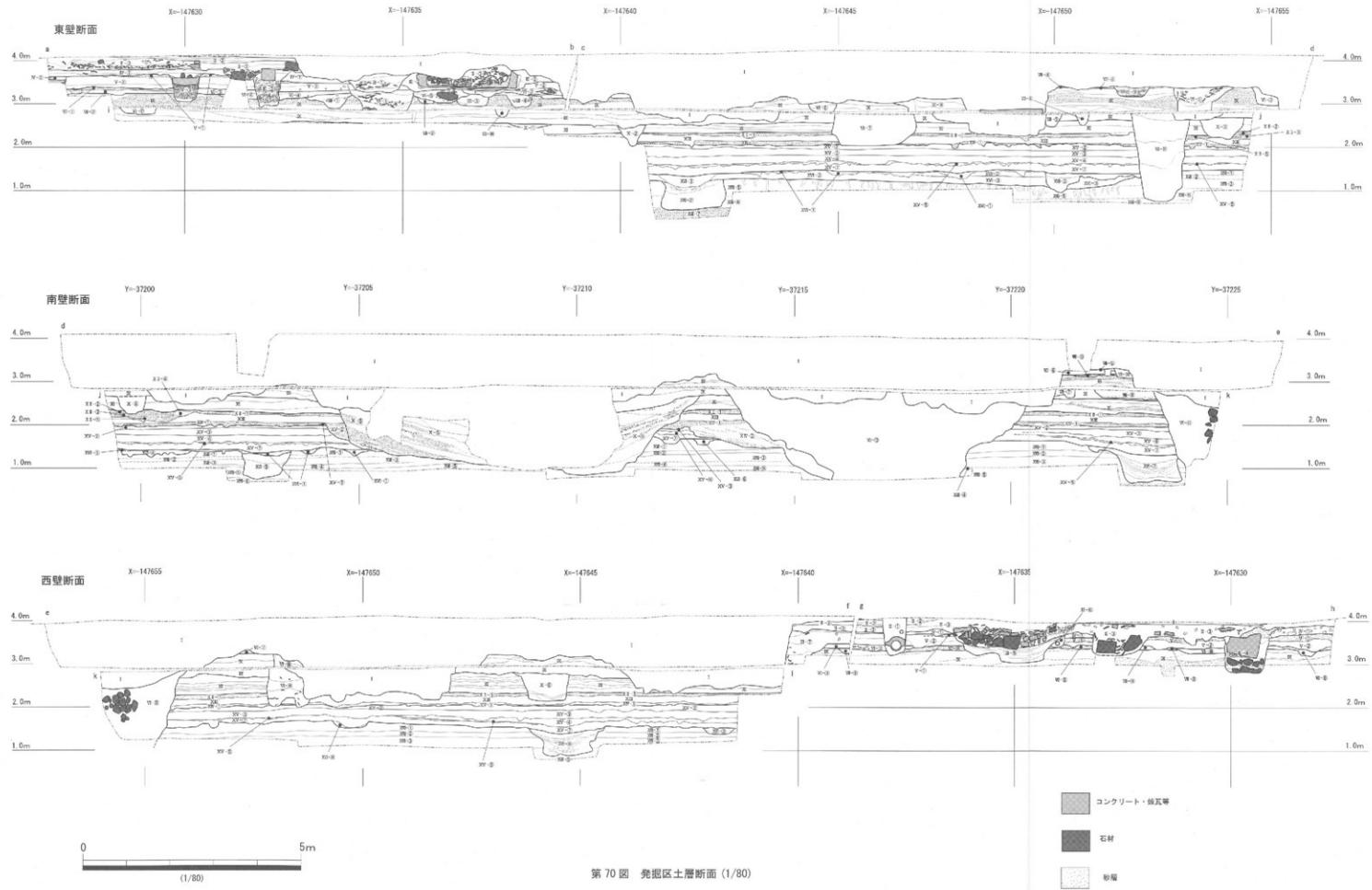
などに瓦礫をかき寄せている様子が観察できる。

第Ⅲ層はⅡ層上面より掘り込まれている。女子師範学校に伴う遺構群である。

第IV層は明治44年開設された女子師範学校に伴う造成土(IV-①)及び、女子師範学校に先行するコンクリート基礎などの遺構群(IV-②、③)である。女子師範学校開校以前は明治9年(1876)から岡山県師範学校が置かれており、これらは師範学校に伴う建物基礎とみられる。IV-①層には、東壁断面の北端付近に下部に焼土粒を含む黒色炭化物層が認められ、師範学校段階の整地層や生活面を含む可能性がある。

第V層は下層に瓦片を多く含む部分や下面に瓦だまりを伴っており、周辺に武家屋敷地の解体や旧岡山藩藩学閉鎖以降の近代の上層とみられる。V-①層は部分的にしか認められないが、洪水に伴う砂層であり、女子師範学校、師範学校の基礎に切られることから明治25年、26年の水害に伴うものである可能性が高い。この両洪水では、調査地点の東400m程の岡山市出石町、石闇町でも旭川堤防が決壊し、市街地一円が浸水している。特に、明治26年の水害では調査地点の北東200m程の岡山市

土層注記



第 70 図 発掘区土層断面 (1/80)

弓之町にあった岡山県知事公舎が濁流に呑み込まれ、県知事が中に取り残されたという^⑮。IV-②層は厚さ20～30cm程度のにぶい黄褐色～オリーブ褐色微砂で、一部にやや土壤化の進行した上層を分層することができるが、造成の単位や生活面を認められない。武家屋敷地の解体や明治十年代の外堀の埋立、土壌の削平などを契機とする造成土とみられる。

近世

第VI層から第XI層は近世の土層である。このうちVII層上面を近世遺構面1、IX層上面を近世遺構面2、XI層上面を近世遺構面3としている。第VI層は第VII層上面から掘り込まれた遺構群である。第VII層上面の近世遺構面1は標高3.3～3.4mの高さであり、おおむね岡山藩藩学が縮小する十八世紀初頭から第V層の形成される明治初期にわたる遺構面ととらえられる。

第VIII層は部分により様々な土層で構成される造成土群であり、厚さは10cm前後と比較的薄いものである。十八世紀初頭以降の様々な契機、様々な範囲に施された比較的小規模な造成、整地の結果形成されたものとみられる。

IX層上面の近世遺構面2は標高3.2～3.3mの遺構面であり、岡山藩藩学の開校する寛文9年(1669)から藩学が縮小する十八世紀初頭に相当するとみられる。IX層上面から掘り込まれている遺構群を第VII層としている。

なお、比較的小規模な造成、整地であるVII層の性格上、VII層中から掘り込まれている遺構なども存在すると考えられる。しかしながら、調査では近世遺構面1、VI層に相当する遺構群と、近世遺構面2、VIII層に相当する遺構群を明確に分離することはできなかった。また、先述のとおり調査区南半部は旧西校舎の基礎掘方及びその解体に伴う搅乱により、IX層より上の土層、近世遺構面1、2はほぼ失われている。しかし、南壁断面の一部にはIX層上面、標高3.2m程度の高さに円礫を多量に含む2～3cm程度の厚さの黄褐色微砂質土層(VIII-⑪層)が残っており、近世遺構面2に対応する藩学開校時の礫敷き面と考えられる。したがって、藩学開校時、調査範囲内においては標高3.2m程度が地表面であったと判断できる。しかしながら、南半部は岡山藩藩学が縮小する十八世紀初頭以降武家屋敷地となる北半部と異なり、1669年以降ほぼ一貫して岡山藩藩学の範囲であった部分にあたり、北半部と同様の造成及び遺構面が形成されているかどうかは不明である。

第IX層は黄褐色細砂や黄褐色～オリーブ褐色微砂質土を主体とする造成土で、厚さ約60cmを測る大規模なものである。上下の遺構の検出状況やその出土遺物の内容からも、岡山藩藩学建設に伴う造成土ととらえられる。岡山城三之外曲輪の造成土とみられる第XI層では平坦な造成を繰り返しているように見えるのに対し、IX層では層が傾斜しているように見える部分が多く、部分毎に敷き均しながら造成されたものとみられる。また、下に大規模な溝(SD320)がある部分では粗い砂を主体に入れており、礫敷き道路の下でも下面を突き固めた後、やはり粗い砂を主体に造成しているなど、地盤の状況や建設計画に応じて造成土を使い分けているように見える。なお第一次調査区の基本層序ではII-13、II-14、II-7、II-10層などが対応するものと思われる。

近世遺構面3はこのIX層の下面にあたり、標高2.5～2.7mを測る。岡山城外堀が掘削され三之外曲輪が整備される十七世紀初頭から岡山藩藩学が建設される十七世紀半ばまでの遺

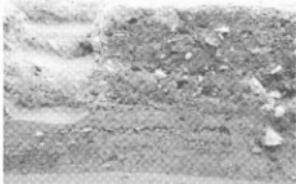


写真7 南壁礫敷き面

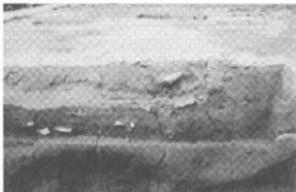


写真8 磚敷き道路下の造成

構面と考えられる。近世遺構面3はこの遺構面に属する遺構群を第X層としている。

第XI層は黄褐色砂質土を主体とする土層群で、25～30cmほどの厚さがある。十七世紀初頭の岡山城三之外曲輪整備に伴う造成土と考えられる。この造成土は5～10cmほどの厚さの土層にさらに分層でき、平坦な造成を繰り返しているようである。第1次調査区の土層ではII-9、II-17、II-11、II-32、II-33などが対応する土層とみられる。

中世以前

第XII層以下は中世以前の土層である。XV層上面とXVI層上面で遺構を検出しており、それぞれ古代遺構面、弥生・古墳遺構面としている。

第XII層は黄褐色細砂を主体とする土層で洪沢砂層とみられる。上面で標高2.3m程度であり、層の厚さは5～8cm程度である。調査区の南西角付近では、くぼみ状の部分にやや厚く堆積しており、その下部(XII-⑤層)では平行に近いラミナ状の構造が見える。出土遺物はなく時期を限定できないが、耕作が放棄されて、岡山城三之外曲輪が造成されるまでの比較的短い期間に堆積したものである可能性もある。

第XIII層は15～20cmの厚さの灰黃～灰黃褐色シルト質土層で、溶脱の進んだ明るい色調、下面に鉄分とマンガンの沈着する状況から水田耕作土とみられる。出土遺物がほとんどないため時期を限定することはできないが、上下の遺構面の遺構や土層との関係から古代末～中世のものと思われる。

第XIV層は古代遺構面を覆う黄褐色～オリーブ褐色細砂層で、やはり洪沢砂層とみられる。

第XV層は暗灰黄色シルト質土を主体とする土層で、水田層(XV-②、XV-③、XV-④、XV-⑦)とその間の洪沢砂層(XV-⑤)である。XV-②層は古代遺構面で検出した水田に相当する水田耕土である。明るい黄褐色～オリーブ褐色の砂質の強い土層であり、洪沢砂層が耕土化したものと思われる。SD471の東側斜面にはXV-②層上に黒褐色シルト質土(XV-①)が、一部SD471に削られながら存在しており、畦畔の盛土とみられる。XV-③層は暗灰黄色砂質シルト、XV-④層はやや明るい暗灰黄色砂質シルト層で、いずれも水田耕土とみられる。XV-⑤層は薄い灰黃～暗灰黄色砂質土で洪沢砂層と考えられる。XV-⑦層は暗灰黄色シルト質土で、やはり水田耕土とみられる。古代遺構面で検出した溝状遺構からは少量ながら九世紀頃とみられる須恵器片、土師質土器片が出土している。また、XV層の下部からは、縞片ではあるが、古墳時代初頭のものとみられる土器片、須恵器片などが出土しており、古墳時代～平安時代の水田層群と考えられる。

第XV層の下面是、調査区の大半で微高地基盤層(第XVII層)となっている。微高地基盤上面は標高1.6～1.2mほどであり、調査区の東側に低くなっている。第XVII層はこの低地部分に堆積している暗灰黄色～灰オリーブ色の粘質の強い土層である。XVII層下のXVIII-⑥層には生痕が顕著に認められ、低湿地環境であったことが窺われる。XVII-⑥層には、微高地基盤下の部分でも生痕が認められるが、生痕内の土質や頻度が大きく異なっている。なお、XVII層上面から溝状遺構、粘土探掘坑とみられる土坑群などを検出している(弥生・古墳遺構面)。XVII層からは少量ながら弥生土器片が出土しており、弥生後期後半頃の堆積層とみられる。

第XVIII層は微高地基盤層であり、弥生時代以前の沖積作用により堆積した自然堤防やそれ以前の干潟、浅海底の堆積物と思われる。



写真9 中世以前の土層

注

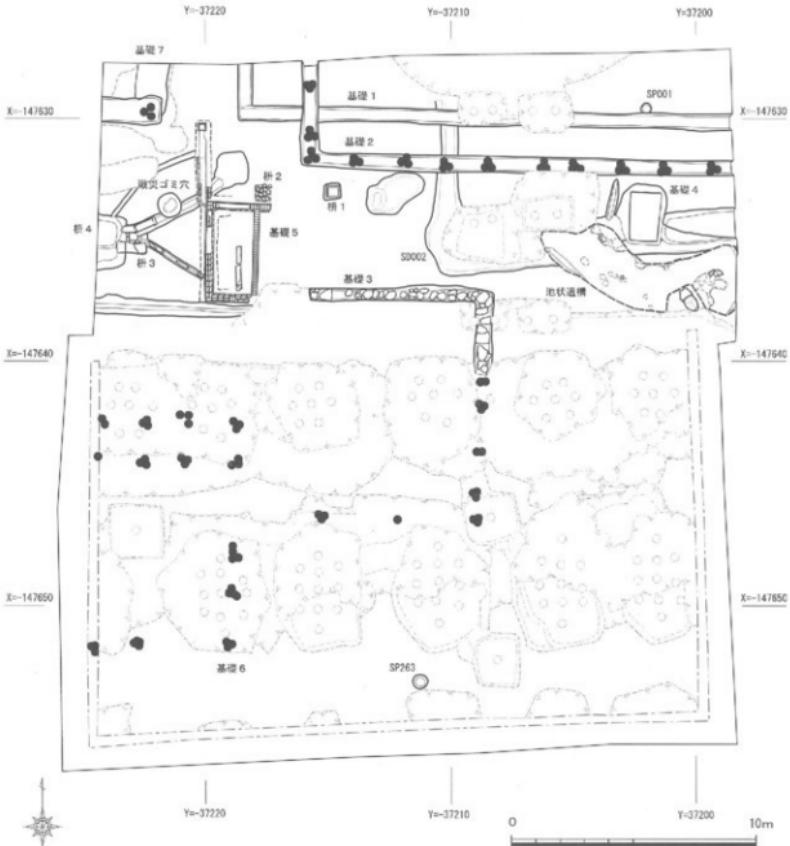
(1) 萩原 嶽 1989『岡山の災害』岡山文庫142 日本文教出版株式会社

2 近代以降

a) 遺構面の概要

近代以降の遺構は、調査区北側では、バックホーによる表土掘削面、標高3.5m程度の面で検出している。ほぼV層(第70図)の上面付近にあたる。調査区南半では、旧西校舎の基礎やその解体に伴う搅乱により近世遺構面2に相当する標高3.2m付近まで破壊されている。そのため、近代以降の遺構は近世の遺構と同一面で検出しているほか、基礎も「松杭」しか残っていない。

近代の遺構面は、大きく分けて昭和20年(1945)の岡山大空襲後の瓦礫整地層である第II層の下面と第V層の上面の二面が存在する。それぞれ、明治44年(1911)開校の岡山県女子師範学校、明治30年頃の岡山県師範学校整備段階の地表面に該当する。第V層は明治十代から明治25年前後の造成土とみ



第71図 近現代の遺構(1/200)

られ、その下面でも、近世の遺構とともにSD002などの明治初期とみられる遺構を検出している。

b) 遺構と遺物

基礎 1

調査範囲の北端付近で検出した布掘り基礎。幅、深さとも60cmほどの断面方形の構造の掘方で、下層に径5cm程度の円礫、上層にそれよりやや小振りな円礫を詰め、その上に厚さ20cmほどのコンクリート基礎を入れている。第V層上面より掘り込まれており、岡山県女子師範学校以前—岡山県師範学校の校舎基礎と見られる。なお、基礎1と同じく第V層上面から掘られた基礎が調査区北東端にわずかにかかっている。岡山県師範学校やそれ以前についてでは当時の建物配置やその変遷を知る資料がほとんどなく、詳細は不明だが、師範学校時代の古写真では旧岡山藩藩学講堂の背後に東西に長い木造二階建ての校舎が数棟見える。基礎1はこれらの校舎に関係するものと見られる。

基礎2、基礎3、基礎6、基礎7

幅60cm、深さ80cmほどの断面方形の掘方に3~10cm大の円礫をつめ、その上にコンクリート基礎を設置する布掘り基礎。基礎1と異なり、基礎底面に直径10~15cmの「松杭」を3~4本一組で打設している。基礎3の南半、基礎6は、旧西校舎基礎などにより「松杭列」しか残っていない。調査区東側の壁面などでは、戦災後の整地層である第II層下面から掘り込まれており、コンクリート基礎より上は第II層により破壊されていることが観察できる。基礎3では円礫とともに30~50cm大の花崗岩割石を多量にいれており、基礎7では東西方向の基礎の掘方が幅、深さとも1.0m程度で、10~30cm大の割石と花崗岩風化土(山土)を交互に入れているなど、構造に違いが認められる。基礎2などではコンクリート基礎の周囲に20×30cm、長さ1mほどの花崗岩石材があり、基礎上に設置されていたものと見られる。戦災整地層で壊されていることや基礎の配置から岡山県女子師範学校(昭和18年以降、岡山師範学校女子部)に伴う建物群とみられる。

基礎4

長2.0m、幅1.2mのコンクリート製基礎で、下に3cm程度の円礫を敷いている。女子師範学校の寄宿舎玄関前であることや、池状遺構がこれを避けていることから、女子師範学校のものと思われるが、平面図には記載がなく性格は不明である。

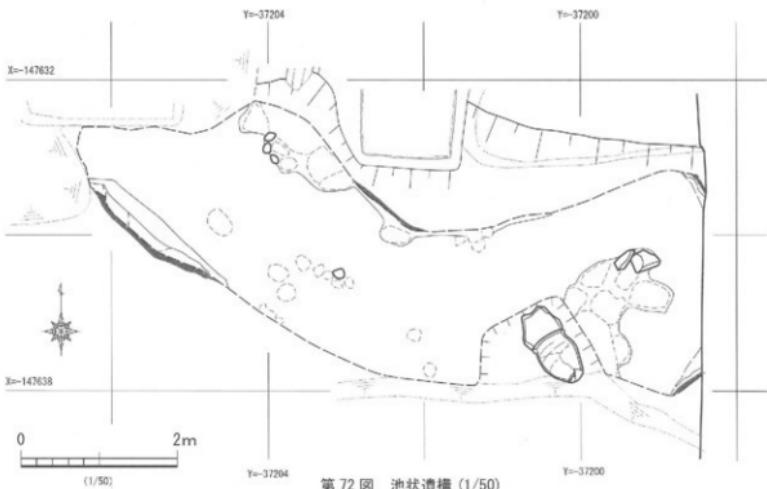
基礎5

煉瓦を積んだ基礎で、南北4.2m×東西2.2mの長方形に配置されている。北辺の一部を除くと東側は全く残っていないが、東西に長い建物の西端部分と見られる。煉瓦は200×100×50mm程度の黒色、きわめて荒い胎土であり、厚さ数cmのモルタル上に残りの良い部分で四段、高さ約30cm程度に積まれている。また、基礎5の北西角付近から北側へ、煉瓦を積んだ後、表面にモルタルを吹き付けた側溝が延びる。橋1、橋2もこの基礎の北辺に沿った位置にあり、この基礎に関係するものである可能性が高い。

この基礎は、掘方に戦災整地層由来の焼土が混じるほか、戦災後の瓦礫が入る集水拵状遺構からのびる排水管を廻している。終戦後の仮校舎などの基礎である可能性が高い。

池状遺構

長さ8m、幅2~3mほどの弧を描く掘り込みで、花崗岩風化土(山土)を突き固めた上に、厚さ2~



第72図 池状構造(1/50)

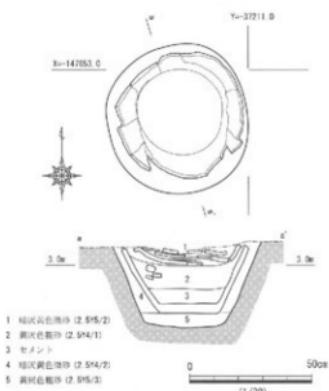
10cmほどのモルタルで舗装している。深さは残りの良い部分で30cm程度で、戦災に伴う瓦礫で埋められている。底のモルタル面には、所々に石を設置していたと思われる痕跡があり、その一部には花崗岩の割石や円礫が残存している。南側には大甕を寝かして、口縁部側をモルタルで固定して設置している。掘り込みの形態や石を配している様子から泉池とみられる。戦災の瓦礫で埋められていることから、女子師範学校の施設と考えられる。

SP263(女子師範学校便槽)

X=147653.1m、Y=37211.3m付近に検出した平面形の掘り込み。上部は西校舎基礎のため失われており、現状で径約60cm、深さ約70cmを測る。底に黄褐色砂を敷いた後、大甕を設置している。甕内から、ガラス瓶や昭和16～17年の十銭ニッケル貨、五銭ニッケル貨などが出土しており女子師範学校の遺構と考えられる。「岡山県女子師範学校平面図」では「便所」の位置にあたっており、出土物や大甕の内壁に炭酸カルシウムと見られる付着物があることから便槽と見られる。

戦災ゴミ穴1

X=147633.6m、Y=37221.4m付近に検出したほぼ円形の土坑である。直径約1m、深さ40～50cmとさほど大きくないものであるが、内部にガラス瓶、電球、溶解した板ガラスなどが大量に廃棄されていた。戦災後の整地層である第II層直下もしくは、第II層が落ち込む形の埋土とみられ、戦災後にゴミ、特にガラス類をまとめて廃棄したものとみられる。



第73図 SP263(女子師範学校便槽)(1/20)

出土遺物には先に挙げたガラス瓶、電球、溶解した板ガラスなどがある。このうち量的には電球が最も多いとみられるが、極薄いガラス片の状態であり、ソケット部分以外は取り上げられる状態ではなかった。溶解した板ガラス(写真10)は、板ガラス同士が多量に重なった状態で融着している。融解した経緯としては第一次に戦災が考えられるが、板ガラスのみが多量に重なり合った状況など、戦災にのみ、その原因を求めるところには疑問がある。

第74図1～7はいわゆる「防衛食容器」である。外面に「防衛食」「大日本防空食料株式会社謹製」「社長タトヲルニハ釘デクボミニ穴ヲアケ」の文字と「防1」の記号が印刷されている。戦中に缶詰の代用品として美濃や有田で生産されたものという。3, 5とそれ以外で胎土や色調、文字の書体などに違いがある。8は磁器の高台部分だが、底面に「岐」を図案化した文字と戦時下の統制番号とみられる「1075」の数字が書かれている。第81図にあげている「国民食器」の破片である可能性が高い。第75図～第77図は化粧品、インク、靴墨、染料、日薬、薬、ウイスキー、ジュースなどの瓶である。25, 26の「花王石鹼」のロゴマークは昭和18年まで使用されていたものであり、先の「防衛食容器」など戦前・戦中に遡るものもあるが、昭和20年創業の田原芳香園(現・明化産業株式会社)のミードー化粧品の瓶(40)、昭和22年発売の「JUJU化粧品」の瓶(21-34)、昭和24年にビオフェルミン製薬株式会社に社名変更したビオフェルミンの瓶(45)と確実に戦後に下るものも含まれている。第78図62は折り畳み式のカミソリである。柄は乳白色の樹脂製(プラスチックか)、刃は鉄製である。63は樹脂製の歯ブラシで、柄に「金クモ」の文字とクモの図案、統制番号の数字が刻されている。64は樹脂製の櫛である。

調査地点が一貫して学校の敷地であったことや、内容がガラス質の遺物、特に化粧品類、インク瓶などに偏っていることからも女子師範学校や第二岡山高等女学校の関連遺物と思われる。経緯などは不明だが最終的に廃棄されたのは戦後数年だった後のことである。

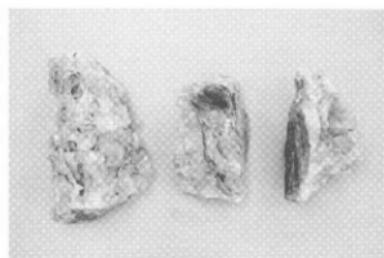


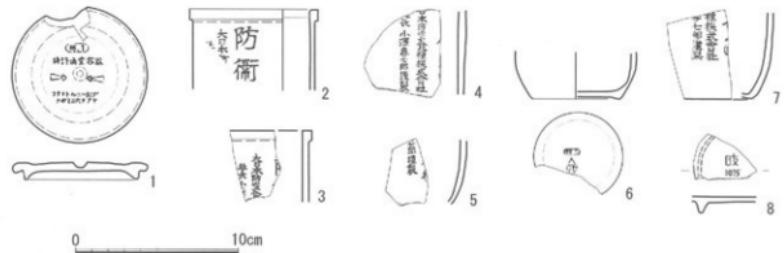
写真10 溶解ガラス

小澤傳七郎謹製、蓋の上面に「特許真空容器」「フタヲルニハ釘デクボミニ穴ヲアケ」の文字と「防1」の記号が印刷されている。戦中に缶詰の代用品として美濃や有田で生産されたものという。

3, 5とそれ以外で胎土や色調、文字の書体などに違いがある。

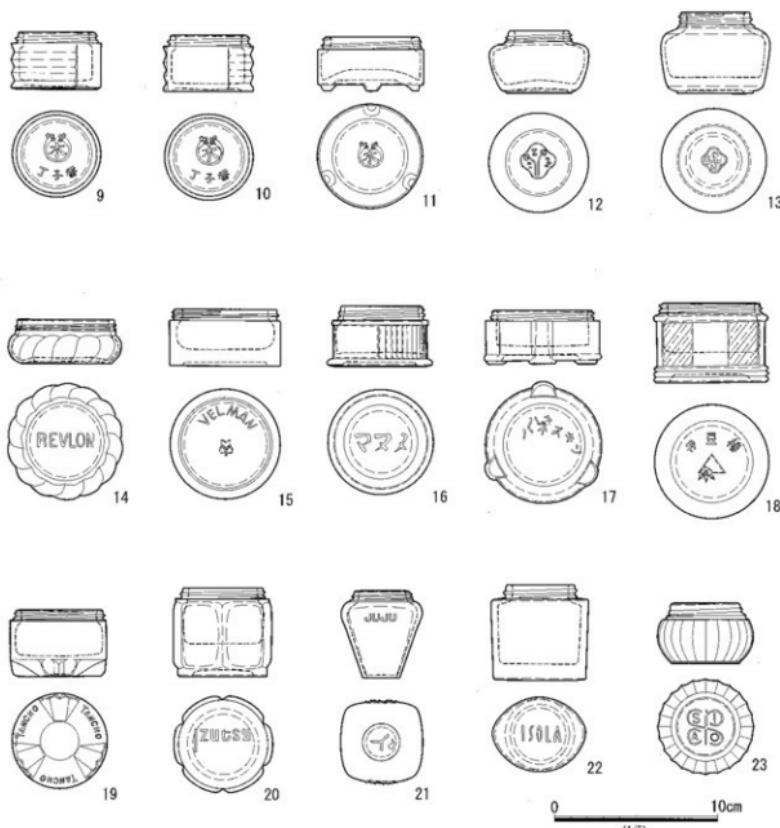
8は磁器の高台部分だが、底面に「岐」を図案化した文字と戦時下の統制番号とみられる「1075」の数字が書かれている。第81図にあげている「国民食器」の破片である可能性が高い。第75図～第77図は化粧品、インク、靴墨、染料、日薬、薬、ウイスキー、ジュースなどの瓶である。25, 26の「花王石鹼」のロゴマークは昭和18年まで使用されていたものであり、先の「防衛食容器」など戦前・戦中に遡るものもあるが、昭和20年創業の田原芳香園(現・明化産業株式会社)のミードー化粧品の瓶(40)、昭和22年発売の「JUJU化粧品」の瓶(21-34)、昭和24年にビオフェルミン製薬株式会社に社名変更したビオフェルミンの瓶(45)と確実に戦後に下るものも含まれている。第78図62は折り畳み式のカミソリである。柄は乳白色の樹脂製(プラスチックか)、刃は鉄製である。63は樹脂製の歯ブラシで、柄に「金クモ」の文字とクモの図案、統制番号の数字が刻されている。64は樹脂製の櫛である。

調査地点が一貫して学校の敷地であったことや、内容がガラス質の遺物、特に化粧品類、インク瓶などに偏っていることからも女子師範学校や第二岡山高等女学校の関連遺物と思われる。経緯などは不明だが最終的に廃棄されたのは戦後数年だった後のことである。



No.	器種	部位	放置 (cm)	特 徴	色 調
1	防衛食容器(昭22)	蓋	堆 8.1	上面に「特許真空容器」、「フタヲルニハ釘デクボミニ穴ヲアケ」の文字と「防1」の記号、内部を印網、文字等は緑色。	緑色(1075/印網)
2	防衛食容器(昭22)	身(口端部)	口径 6.0	内面に放電線の黒熱部分、制御内面に「防衛」、「大日本防空」、「社長?」の文字を有。文字色は緑色。	緑色(1075/印網)
3	防衛食容器(昭22)	身(口端部)	—	内面に放電線の黒熱部分、制御外面に「防衛」、「大日本防空」、「社長?」の文字を有。文字色は緑色。	緑色(1075/印網)
4	防衛食容器(昭22)	身(胴部)	—	外壁に「二二日本防空食料会社」、「社長? 小野善(印網裏)」の文字を有網。文字色は緑色。	緑色(1075/印網)
5	防衛食容器(昭22)	身(胴部)	—	外壁に「二二日本防空食料会社」の文字を有網。文字色は緑色。	緑色(1075/印網)
6	防衛食容器(昭22)	身(胴部)	底深 5.1	底面に「防」、蓋形に「岐」の記号を有網。文字色は緑色。	緑色(1075/印網)
7	防衛食容器(昭22)	身(胴部)	—	制御外面に「防衛」、「岐(許諾)」の文字を有網。文字色は緑色。	緑色(1075/印網)
8	国民食器	蓋	—	底面に「岐」を変更したもとと、1075の文字を有。光沢多め。	緑色(1075/印網)

第74図 戦災ゴミ出土遺物 1(1/3)



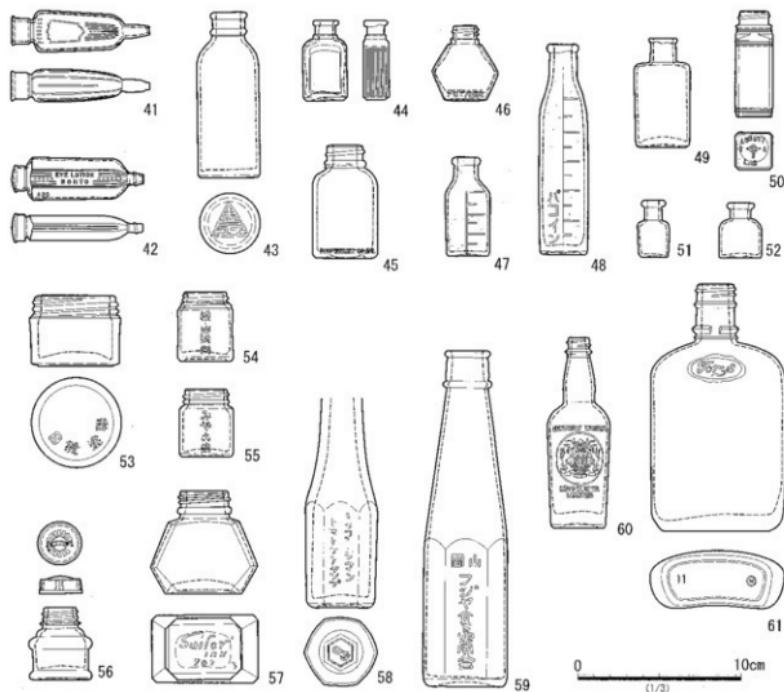
No.	種類	部位	直徑 (cm)	特徴	色調
9	ガラス瓶	身	幅 6.1 高さ 2.8	底面に「木」の字を変形化した面標(?)と「丁子屋」の文字。丁子屋(1777年創設)の丁子番ボーマード、垂曲などの模様。	白色半透明
10	ガラス瓶	身	幅 6.0 高さ 2.8	底面に「木」の字を変形化した面標(?)と「丁子屋」の文字。丁子屋(1777年創設)の丁子番ボーマード、垂曲などの模様。	白色半透明
11	ガラス瓶	身	幅 6.0 高さ 2.8	底面に「木」の字を変形化した面標(?)と「丁子屋」の文字。丁子屋(1777年創設)の丁子番ボーマードなどの瓶。	白色半透明
12	ガラス瓶	身	幅 6.2 高さ 2.8	底面に「木」の字を変形化した面標(?)と「丁子屋」の文字。丁子屋(1777年創設)の丁子番ボーマードなどの瓶。	白色半透明
13	ガラス瓶	身	幅 6.5 高さ 5.0	底面に面標、背景堂萬利(1872年創設)の化粧品。	白色半透明
14	ガラス瓶	身	幅 7.0 高さ 5.5	底面に「REVOL」の文字、レフロニン製品(ホー・1882年創設)の化粧品。	白色半透明
15	ガラス瓶	身	幅 6.8 高さ 3.5	底面に「REVOL」の文字。ウルストン社研究室(1819年創設)の化粧品。	白色半透明
16	ガラス瓶	身	幅 6.5 高さ 3.1	底面に「メイズ(岩から)」の文字、丹波家(1691年創設)のハシレシンドクターム、バーバードなどの模様。	白色半透明
17	ガラス瓶	身	幅 6.2 高さ 3.5	底面に「メイズ(岩から)」の文字、ハオヌキシンジンクタームなどの模様。	白色半透明
18	ガラス瓶	身	幅 7.0 高さ 5.5	底面に面標(?)と「リヤモ」の文字、横須賀の模様。	白色半透明
19	ガラス瓶	身	幅 6.8 高さ 3.5	底面に「リヤモ」の文字、金穂番茶(1872年創設)のボーマード(1877年創設)、クリーム(1892年創設)など。	白色半透明
20	ガラス瓶	身	幅 6.5 高さ 3.1	底面に「リヤモ」の文字、丹波家(1691年創設)の香草などの模様。	白色半透明
21	ガラス瓶	身	幅 6.5 高さ 3.1	底面に「リヤモ」の文字、丹波家(1691年創設)のジュエルクリーム(1897年創設)の模様。	白色半透明
22	ガラス瓶	身	幅 6.0 高さ 5.0	底面に「ISOLA」の文字、イゾラ化粧品本舗(1887年創設)の化粧品。	白色半透明
23	ガラス瓶	身	幅 6.8 高さ 3.7	底面に變形した文字(ISOLO)。	黑色不透明

第75図 戦災ゴミ穴出土遺物 2(1/3)

0 10cm
(1/3)

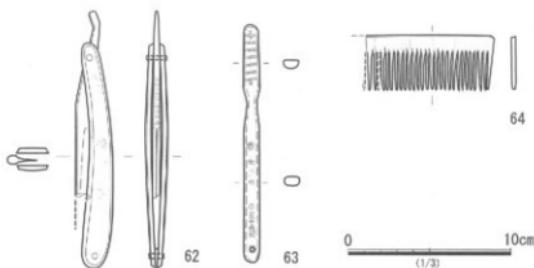
No.	圖 像	體 量	特 質	色 諺
21	ガラス瓶	身 底径 8.0 高さ 1.6	前面にケルブ付形のくぼみ、底対側の側面下部に「Ricer」の文字。	白色不透明
25	ガラス瓶	身 底径 8.0 高さ 1.6	前面に丸のマーク。花王石鹼が1925～1933年に使用したマークとみられる。	無名透明
26	調剤瓶	身 底径 6.5 高さ 1.3	前面に月のマーク。石工石鹼が1925～1933年に使用したマークとみられる。	灰白(7.01W)程度
27	ガラス瓶	身 底径 2.7 高さ 1.0	前面に8、10に刻まれた数字、丁子木屋の番号等の底。	黒色不透明
28	ガラス瓶	身 底径 5.8 高さ 1.0	表面に「K」の文字。	透明鏡子透明
29	調剤瓶	身 底径 4.4 高さ 1.0	前面丸み方型の瓶。側面に同様化した「P」の文字。文字は青色。	灰白(7.91W)程度
30	調剤瓶	身 底径 4.0 高さ 1.2	側面に丸のマークと「P」。海舟キヨシの文字。文字色はオーロラ灰色。	灰白(7.91W)程度
31	ガラス瓶	身 底径 2.4 高さ 1.0	瓶底に開脚十字脚。底状の底。	緑がかった透明
32	ガラス瓶	身 底径 3.2 高さ 1.0	瓶底青色の瓶。底面「KAKI TOKYO」の文字。側面に金井20年保満の「K」文字を十字に記述。	青色透明
33	ガラス瓶	身 底径 5.9 高さ 1.0	新嘉八馬糸、側面「TANCHO HAIR LOTION」の文字。金井香水(1927創業、原・マンダム)の瓶。	黒色透明
34	ガラス瓶	身 底径 4.6 高さ 0.9	「P」に「K」の文字。底部以外は磨りガラス処理。赤化粧品会社(1910創業、原・ジュジュ化粧品)の瓶。	黑色透明
35	ガラス瓶	身 底径 3.8 高さ 1.9	樹脂接着剤の瓶。化粧水等の瓶。	非褐色透明
36	ガラス瓶	身 底径 6.2 高さ 1.0	瓶底下部に「伊藤忠桑樽醸造工業株式会社」、裏に「367」の文字。	黑色透明
37	ガラス瓶	身 底径 6.7 高さ 1.5	前面にケルブ付形のくぼみ。	黑色透明
38	ガラス瓶	身 底径 5.5 高さ 1.5	前面下部に「ローガン」の文字。萬葉モーガン(1917年創業)の香油などの瓶。	無色透明
39	ガラス瓶	身 底径 6.0 高さ 0.6	樹脂瓶口側に「NPF(L10 CL)」の文字。伊藤忠櫻園(1917年創業)の化粧品。	無色透明
40	ガラス瓶	身 底径 4.8 高さ 1.8	前面下部に「KIKO」の文字。同医者薬(1945創業、秋田化粧品株式会社)の化粧品。	黑色透明

第76図 戰災ゴミ穴出土遺物 3(1/3)



品種	形	法量(cc)	特徴	色調
41 ガラス瓶	栓	高さ3.5 幅3.0	スリット状の口製瓶。	青白色透明
42 ガラス瓶	栓	高さ3.9 幅3.0	スリット状の口製瓶。表面に「EST. 1871 LTD 100% RIBBON」の文字。昭和6年以降使用されている「うさぎの脚印」か。	青色透明
43 ガラス瓶	栓	高さ3.6 幅3.4	圓筒口に蓋をした丸瓶(?)の文字。丸井会社金庫室(1930年半盤面)のロゴンカンの裏か。	綠色透明
44 ガラス瓶	栓	高さ3.5 幅3.0	圓筒下部に「THE DUNLOP CO. LTD.」の文字。ビオフェルミン製剤会社(1909年社名変更)の底。	赤褐色透明
45 ガラス瓶	栓	高さ4.1 幅3.6	側面下部に「Tetra」の文字。裏瓶か。	青白色透明
46 ガラス瓶	栓	高さ3.9 幅3.4	側面に片葉、葉筋多い。まとみ葉形瓶。	褐色・青色透明
47 ガラス瓶	栓	高さ2.9 幅2.5	表面に「ハイシキシラボン」として目録、下部に「ハイシン」の文字。実葉多い。葉上の葉の底。	褐色・青色透明
48 ガラス瓶	栓	高さ3.1 幅3.0	瓶根下部にインク次付容器があり。インク瓶の可能性もある。	綠色透明
49 ガラス瓶	栓	高さ3.0 幅3.0	表面に「(無小文字)」、表面に「D」の文字。昭和初期 Laboratories(E)の裏瓶とみられる。	赤褐色透明
50 ガラス瓶	栓	高さ2.9 幅2.5	裏瓶か。裏面に文字らしいものが見えるが判別できない。	青白色透明
51 ガラス瓶	栓	高さ3.1 幅3.0	瓶根か。	青白色透明
52 ガラス瓶	栓	高さ3.1 幅3.0	表面に「ロッテルダムハマチ」の文字。粒状の底。	青白色透明
53 ガラス瓶	栓	高さ3.0 幅3.0	側面に「(無小文字)」、表面に「D」の文字。染料の底。	綠色透明
54 ガラス瓶	栓	高さ3.0 幅3.0	表面に「(無小文字)」、表面に「S」の文字。染料の底。	綠色透明
55 ガラス瓶	栓	高さ3.0 幅3.0	表面に「(無小文字)」、表面に「S」の文字。染料の底。	綠色透明
56 ガラス瓶	栓	高さ3.0 幅3.0	表面に「(無小文字)」、表面に「S」の文字。染料の底。	綠色透明
57 ガラス瓶	栓	高さ3.5 幅3.0	インク瓶と判断される。底面に「12」、蓋に「ヨウ」。	褐色・青色透明
58 ガラス瓶	栓	高さ3.5 幅3.0	インク瓶。底面に「(無小文字)」の文字。	青绿色透明
59 ガラス瓶	栓	高さ3.5 幅3.0	インク瓶。底面に「(無小文字)」の文字。	青绿色透明
60 ガラス瓶	栓	高さ3.5 幅3.0	表面六角形の瓶。表面に「(無小文字)」の文字。	青白色透明
61 ガラス瓶	栓	高さ3.5 幅3.0	表面六角形の瓶。表面に「(無小文字)」の文字。	青白色透明

第77図 戦災ゴミ穴出土遺物 4(1/3)

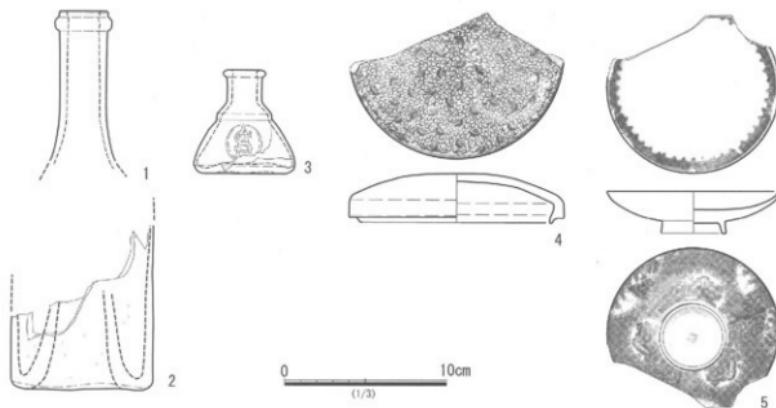


第78図 戦災ゴミ穴出土遺物5(1/3)

SD002

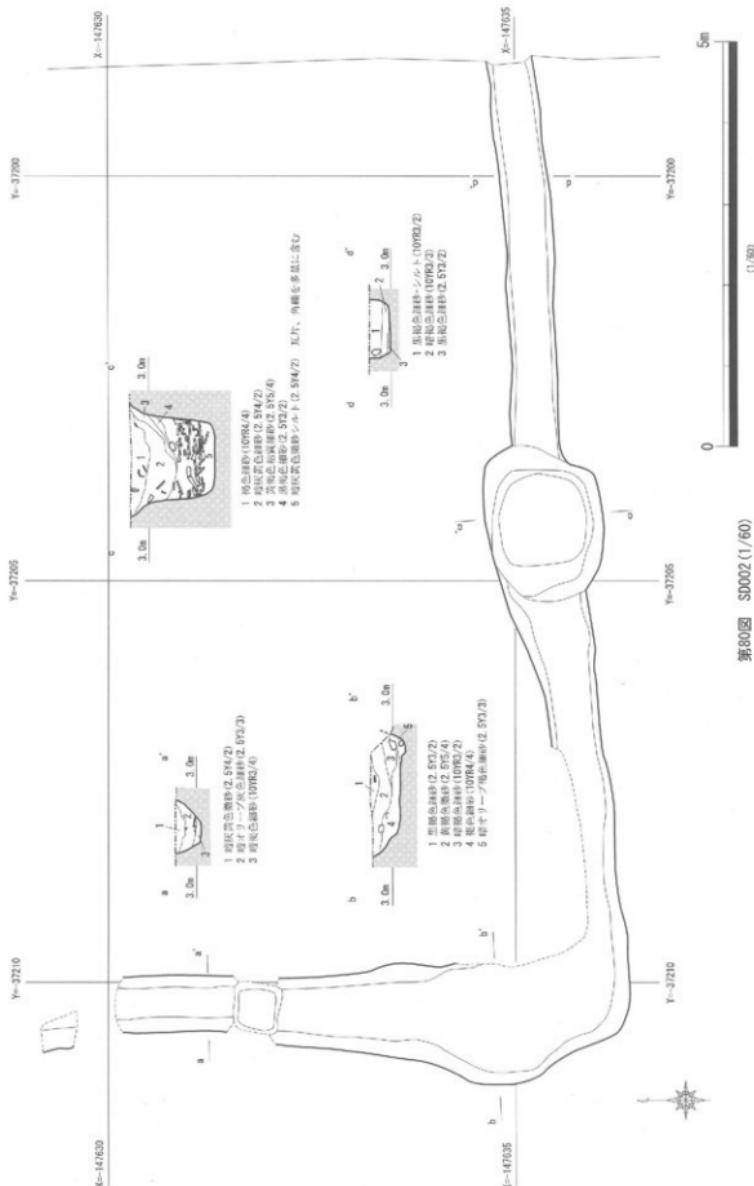
X=147635.0m、Y=-37210.0m付近ではほぼ直角に曲がる「L」字状の溝状遺構で、一部に深い掘り込みをもつ。近世遺構面1で検出しているが、包含層1掘削時に、境界は不明瞭だがSD002部分のみ軟弱なシルト質砂が広がっていたほか、ガラス瓶などを含んでおり、より上層から掘り込まれた遺構と見られる。基礎1、基礎2などに切られており、明治30年以前の遺構と見られるが、性格などは不明である。

第79図には出土物の内近代のものをあげている。1、2は同一個体とみられるガラス瓶である。底部が漏斗状に大きく開いており、実験器具のようなものかもしれない。4、5は染付磁器で、染付文様は酸化コバルトとみられる鮮やかな藍色で型紙摺り、もしくは銅板転写されている。5では器の1/3周程度の版が若干重なりながら剥離されている様子が観察できる。4、5とも細かい「c」字状の文様に扇をあしらった共通する地紋であり、一描いのものの一部と思われる。



No.	器種	形 性	測量[cm]	特 性	色 調
1	ガラス瓶?	L字-OB27	口径 2.0 底径 2.0 2と同一個体か。		透明
2	ガラス瓶?	底深	底径 8.5 底高 5.5 底径 8.5 底高 5.5	底面が漏斗状に貫通。底部が日本式。表盤海村か。1と同一個体と云われる。	透明
3	ガラス瓶	-	直径 9.2 底径 8.5	底面アーチ型。側面に「J」と「W」を回転化したマーク。	透明
4	染付磁	-	径 15.5 底径 15.5	上面に鮮やかな藍色の染付文様を型紙摺り、もしくは銅版転写。縁部が。	淡青(約8%鉛白)
5	染付磁	-	径 18.5 底径 18.5	口縁部内側に標準紙文様。外側に扇をあしらった地紋に食付?、海?、帆船?を型紙摺り。もしくは銅版転写。縁部が。	淡青(約8%鉛白)

第79図 SD002 出土遺物(1/3)



第80図 SD002(1/50)

その他の遺構

橋3、橋4は排水管の伴う枠状遺構である。橋3は内法30cm四方ほどの煉瓦を組んだ枠で、南東方に備前焼風の排水管が伴う。橋4取り付く排水管により一部壊されている。橋4は南北2.2mほどの掘り込みで、北西側、北辺の西よりに排水管が取り付く。どちらも排水管が基礎5で壊されているほか、橋4は戦災に伴う瓦礫で埋められており、女子師範学校などに伴うものと見られる。

SP001は長径50cm、短径35cmほどの浅い掘り込みで、周囲に瓦状の土器片を配置しており、埋土は多量の木炭、焼土を含んでいる。検出面から明治30年以降の師範学校、女子師範学校に伴うものと見られるが、性格は不明である。

その他の出土遺物

近現代の遺物は大半が旧西校舎などの基礎や基礎解体揮方、戦災整地層からの出土である。

第81図1～4は、「国民食器」と呼ばれる戦時下の統制陶器である。緑色の二本線が口縁部付近にあるのが特徴である。卒業生の証言から、女子師範学校食堂で使われていたことがわかっている。

5～9は磁器の皿、湯飲みであるが、同じ意匠のものが多数出土しており、女子師範学校などで使われていたものとみられる。

10は文鏡とみられる磁器製の軍艦の置物である。あまり実用的ではないものの、砲、櫂橋、マスト、三本煙突などが表現されている。11、12は薬瓶で、12には側面に「ヘルバス液」と書かれている。13は中空の筒状のガラス製品で、薬瓶の栓のようなものか、スポットなどの先端部分とみられる。

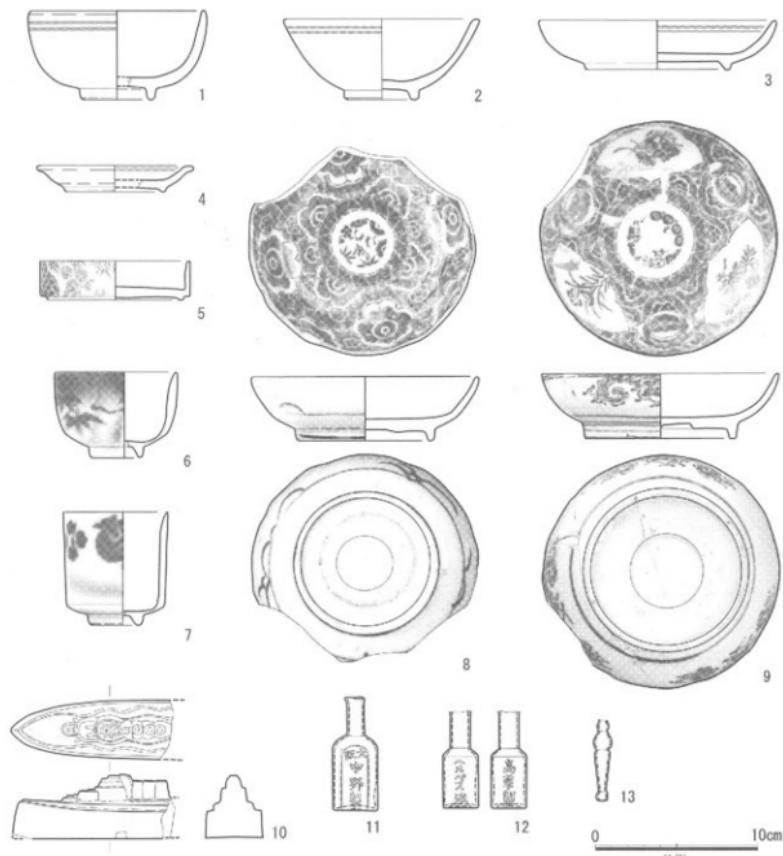
第82図1、2は石版、3～8は蠅石、昭和初期頃まで使われていたという筆記具である。蠅石には3、4のような板状のもの、5、6のような断面方形のもの、7、8のような断面円形で先端が丸くなった使用状況を示すものがあり、使用者が蠅石を切り取りながら使用していた可能性がある。石版は厚さ5mm程度の天然スレート(粘板岩)である。

9はセルロイド製の分度器、10はセルロイド製規格でもとは15cmほどのものとみられる。変色変形しているが、片面に「ババヒサミ」と名前が彫り込まれている。なお、このものさしは現地説明会をきっかけに、持ち主が判明した。「ババヒサミ」さんは昭和22年から24年の間、第二岡山高等女学校(県立岡山朝日高校)に通学していたという。11は骨製のブラシである。12は赤褐色の備前焼風の磚で、一辺約17cm、厚さ約1.7cmを測る。女子師範学校寄宿舎の床材であったらしい。13は鉄製の秤であり、池状遺構から出土している。泉池に隣接して建っていた女子師範食堂・炊事場で使用されていたものと可能性がある。

c) 小結－検出遺構と近現代の学校施設－

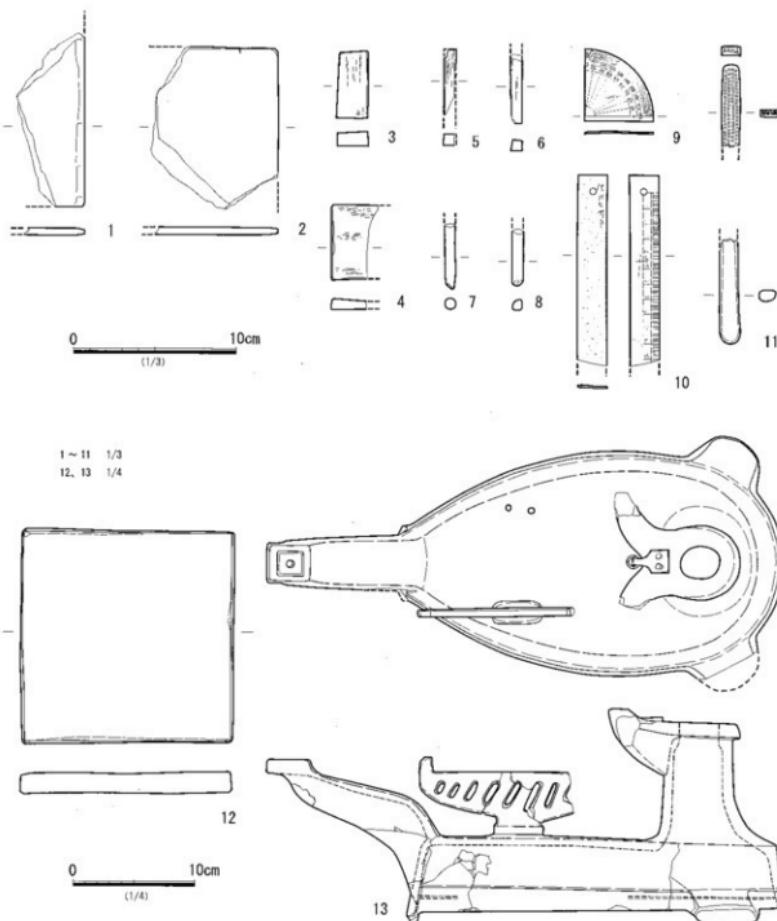
調査区の範囲は、旧岡山藩学洋池との位置関係や「岡山県女子師範学校平面図」(昭和7年)、昭和11年頃の都市計画図、戦災復興の区画整理関係図面などから、女子師範学校寄宿舎玄関周辺にあたると考えられる。昭和7年(1932)発行の女子師範学校の『記念誌』に掲載されている「岡山県女子師範学校平面図」の建物配置や基礎の形態・構造から、検出された遺構は、基礎2が「食堂」、基礎3が「寄宿玄関」、基礎6が物理教室などのある「教室棟」、基礎7が寄宿舎「梅舎」にあたる。SP263の部分には「便所」が記載されている。池状遺構に関しては、「岡山県女子師範学校平面図」に記載がないが、女子師範学校(師範学校女子部)の卒業生の証言から、玄関前に泉池があったことが判明している。

女子師範学校は明治44年(1911)に師範学校の移転に伴い当地に開校しており、建物も大半がその際に新築されている。「岡山県女子師範学校平面図」や古写真によると、食堂は木造平屋、桟瓦葺き棟梁造、



No.	種類	部 位	直 径(cm)	物	寸	物	色 調
1	陶食器(碗)	—	口径11.0 高さ3.3	口縁外側に緑色の二本線、口縁内側の瓶底より後元。			白色
2	陶食器(碗)	—	口径12.5 高さ3.5	口縁外側に緑色の二本線、口縁内側の瓶底より後元。			白色
3	陶食器(碗)	—	口径11.6 高さ3.6	口縁外側に緑色の二本線、口縁内側の瓶底より後元。			白色
4	陶食器(碗)	—	口径9.8 高さ3.6	口縁外側に緑色の二本線、口縁内側の瓶底より後元。			白色
5	瓶	—	口径 9.2 高さ 2.4	外側に緑、緑色の粒、竹、楕円の幾何文様を斜め配し、斜め内。			瓶身(D10mm)緑度
6	漆器底飾み	—	口径 7.5 高さ 2.5	外側に緑、緑色の幾何文様を斜め配し、斜め内。			白色
7	漆器底飾み	—	口径 6.4 高さ 2.6	外側に緑、緑色の幾何文様を斜め配し、斜め内。			白色
8	漆器底	—	口径14.2 高さ4.0	内部に緑、竹、楕円の幾何文様を斜め配し、斜め内。			瓶身(D10mm)緑度
9	漆器底	—	口径14.6 高さ4.5	内部に緑、竹、楕円の幾何文様を斜め配し、斜め内。			瓶身(D10mm)緑度
10	漆器蓋(木製)	—	直径 3.9 高さ 1.0	底部が漆器底、緑色、マスト、二本脚、竹の模様。			瓶身(D10mm)緑度
11	ガラス瓶	—	直径 7.0 高さ 2.8	黒瓶、瓶底に「大國」、半井製の文字、気泡あり。			黒色透明
12	ガラス瓶	—	直径 6.0 高さ 2.7	黒瓶、瓶底に「ハルベス」、「新泰製」の文字、気泡あり。			黒色透明
13	ガラス片	—	直径 1.2	黒瓶の残片、もししくはスコットなどの黒瓶か、基盤質が火炎。			黒色透明

第 81 図 現代機器・包含層出土遺物 1(1/3)



第 82 図 現代機器・包含層出土遺物 2 (1/3-1/4)

下見板張りの建物。一方、寄宿舎玄関は木造平屋、切妻造で、腰板、下見板張り、妻部は漆喰かモルタルを塗っている。また、寄宿舎や教室棟は木造二階建てとなっている。一方、基礎 1 は女子師範学校の基礎群と異なり「松杭」を伴わないほか、基礎 2 に切られており、女子師範学校の建物群に先行する岡山県師範学校の建物基礎とみられる。岡山県師範学校やそれ以前については当時の建物配置やその変遷を知る資料がほとんどない。詳細は不明だが、師範学校時代の古写真では旧岡山藩学講堂の背後に東西に長い木造二階建ての校舎が数棟見える。基礎 1 はこれらの校舎に関係するものである可能性が高い。女子師範学校の『記念誌』の施設一覧では、女子師範開校前後に建てられている建物以外、すなわち、師範学校から引き継いだ建物は多くが明治30年前後に建設されており、そのころ造成を伴

のような大規模な整備がなされた可能性が高い。そのことは発掘調査で、第IV層下に明治25年(1892)もしくは明治26年(1893)のものとみられる洪水砂が存在することとも矛盾しない。

また、基礎5は掘方に戦災整地層由來の焼土が混じるほか、戦災後の瓦礫が入る集木枠状遺構からのびる排水管を確認している。機械による表土掘削のためより東側の状況や女子師範学校の基礎群との直接の切り合い関係は不明だが、終戦後の基礎であると考えられる。戦後、第二岡山高等女学校は昭和22年に木造平屋建ての校舎2棟を復興、岡山市立旭中学校も昭和23年には木造二階建て校舎を新築し、一部移転してきている。基礎5はこれらの校舎の基礎である可能性が高い。第二岡山高等女学校では、授業の合間に戦災の瓦礫の片付けをさせられていたという。戦災ゴミ穴1などもこうした復興のなかで廃棄されたものであるとみられる。

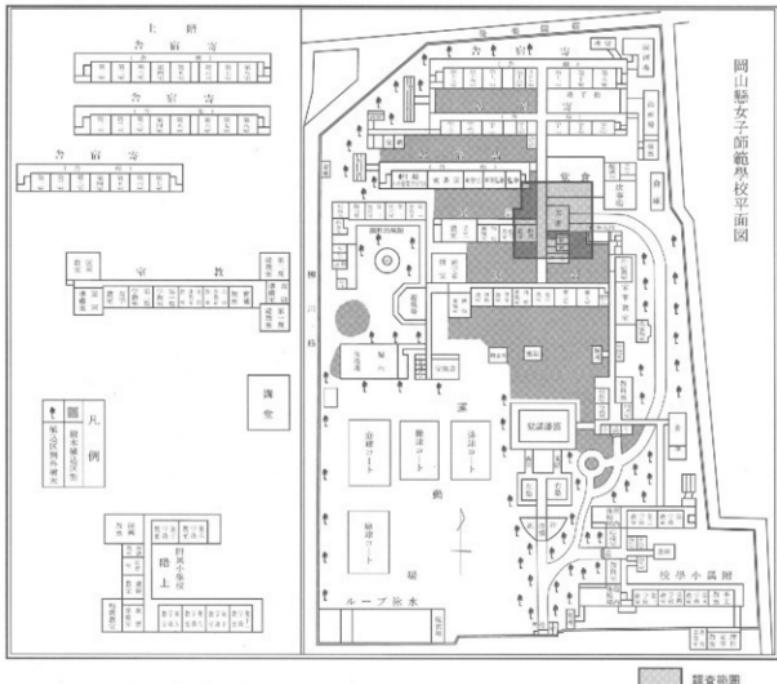
なお、第二岡山高等女学校は昭和25年に県立岡山朝日高校として岡山城内に移転、昭和26年に旧制第六高等学校跡地である現校地(岡山市古京町)に移転している。

参考文献

岡山県女子師範学校編 1932『記念誌』

岡山県立岡山朝日高等学校河原資料室編 1979『岡山第二女子高等学校についての二つの記録』『岡山朝日高等学校教育史資料』第6集

岡山市史編集委員会編 1968『岡山市史』宗教・教育編 岡山市



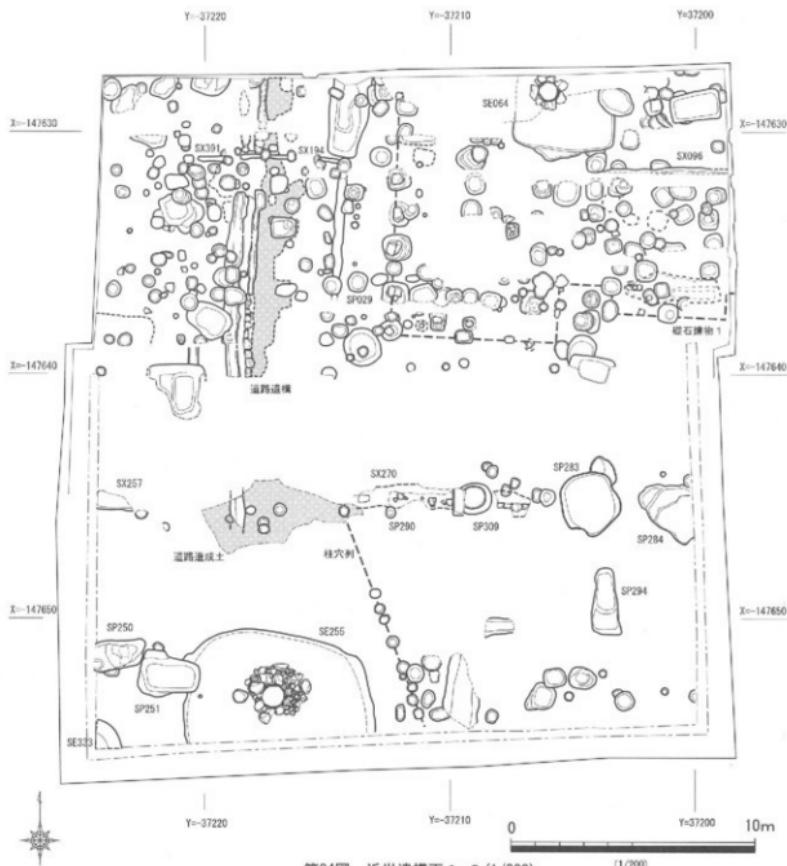
第83図 岡山県女子師範学校建物配置図(岡山県女子師範学校発行『記念誌』1932より)

3 近世遺構面 1・2

a) 遺構面の概要

近世遺構面1・2は、旧岡山藩藩学の造成土とみられる第IX層と明治以降の造成土とみられる第V層の間の遺構面である。したがって、岡山藩藩学が開校する寛文9年(1669)以降の遺構面ととらえられる。

近世造構面1は第VII層の上面にあたり調査区北半では東側が標高3.3m付近、西側が標高3.4m付近となっている。近世造構面2は第IX層の上面にあたり、同じく東側が標高3.2m程度、西側では標高3.3m程度の高さとなっている。おおむね、近世造構面2は藩学開校時から縮小する十八世紀初頭まで、近世造構面1はそれ以降の造構面ととらえられる。第VII層は厚さ10cm程度の造成土であり、部分によ



第84図 近世遺構面 1・2 (1/200)

り非常に多様な土質である。こうした特徴から、第VII層は武家屋敷地の区画の変更や建物の立て替え等に伴い、その都度部分的に造成が繰り返されてきた結果形成されたものとみられる。また、調査区南半では旧西校舎の基礎やその解体に伴う掘方によって、大部分が標高3.2m程度よりも深く掘削されている。調査区南壁面にわずかに残った土層に、標高3.2m付近に小礫を敷いた面が観察でき、近世遺構面1・2に対応する遺構面ととらえられるが、北半と同様の遺構面が存在するか否かも含め検討することはできなかった(第4章第1節参照)。

検出遺構は、調査区北半では、建物礎石の抜き取り跡、もしくは礎石の基礎地行掘方、道路遺構およびその側溝、瓦だまり、井戸(SE064)など、南半ではSP250やSP284といった廃棄土坑、井戸(SE255)などがある。調査区の北半は岡山藩藩学開校以降、何度も区画を変えながらも武家屋敷地であった部分にあたる。検出遺構の大半が礎石の抜き取り跡などであり、廃棄土坑などはほとんどない。これは、主に建物が建っていた部分にあたるためであろうか。それに対し、調査区南半はおおむね一貫して藩学内部の空間であった。とはいっても、中核建物の背後の空間にあたり、建物がほとんど建てられていない部分である。調査区南半では、井戸、廃棄土坑など比較的大形で深い遺構が多いことは、旧西校舎基礎等のため残りが良いだけでなく、こうした空間であったことも関連するものと思われる。

b) 調査区北半の遺構と出土遺物

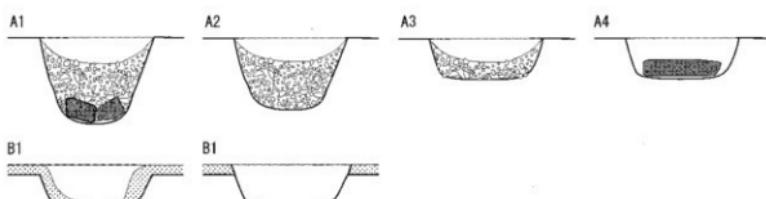
調査区の北半は前に述べたとおり、一貫して武家屋敷地であった部分であり、礎石跡や礎石、束石のほか、柱穴、杭跡、瓦だまり、井戸、道路遺構とその側溝、区画に伴うとみられる石列などを検出している。遺構が掘られている面から近世遺構面1、2の上下2層の遺構面に分けられるが、造成土の薄さや遺構面自体の比高差、造成土の多様さに伴う遺構検出のしにくさも加わり、厳密に遺構面1と2の遺構を分離することは困難な状況であった。

調査区北半の礎石・礎石跡・柱穴群

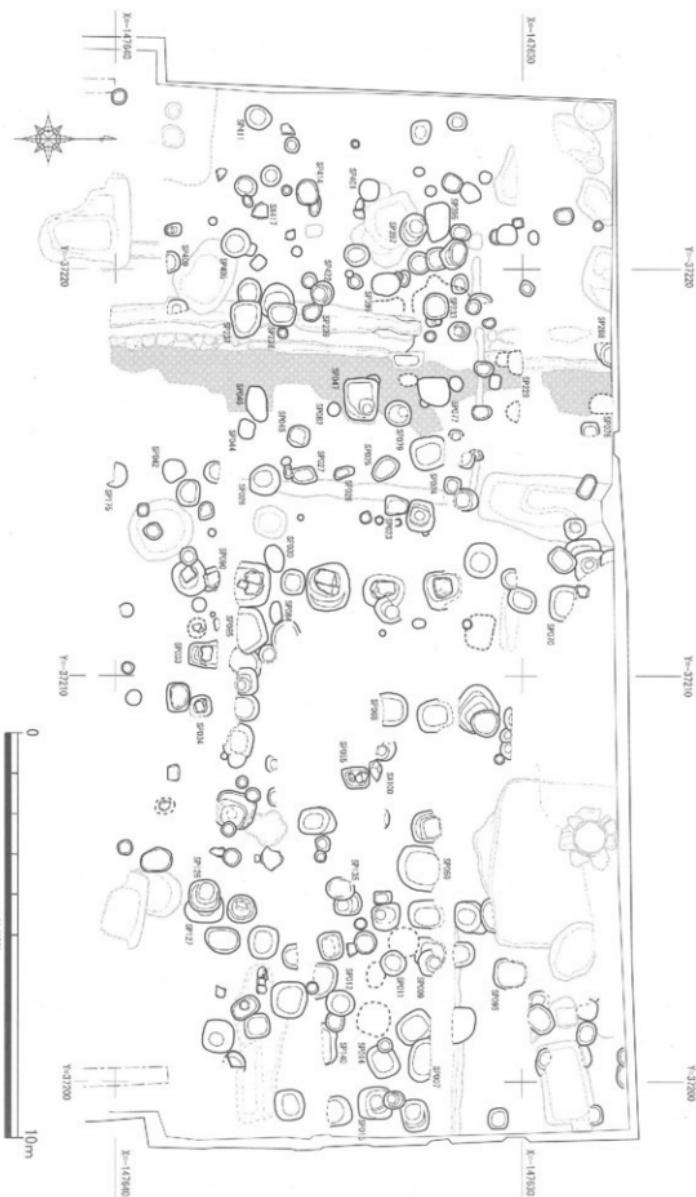
調査区北半の遺構は大半が礎石、礎石跡、礎石の基礎地行掘方である。絵図などでは調査区北半の武家屋敷地は何度も区画を変えており、その都度建物も建て替えられたようで、こうした遺構も非常に多くが重なり、切り合いながら存在している。

礎石跡、礎石の基礎地行掘方にはその埋土などから、次の7類型に分類できる。

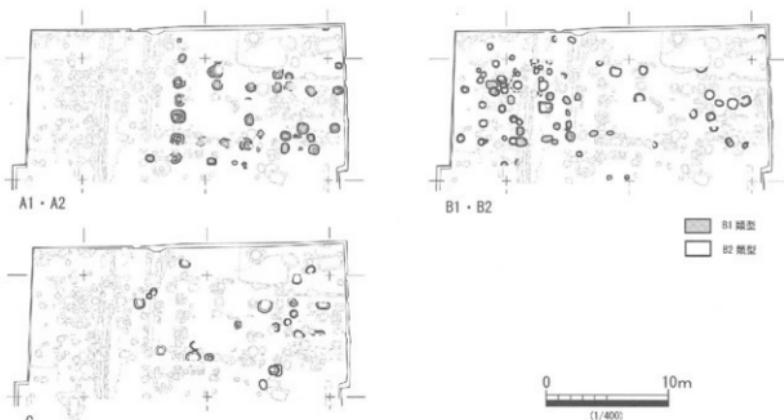
- A1 磂石の基礎地行掘方で、深さ50cm程度、底に大型の花崗岩割石を置き3~5cm大の円礫を充填するもの。
- A2 磈石の基礎地行掘方で、深さ40~50cm程度。割石を伴わず、3~5cm大の円礫を充填するもの。
- A3 磈石の基礎地行掘方で、深さ20cm程度、1~5cm大の円礫を充填するもの。



第85図 磈石跡、礎石基礎地行の類型



第86図 碳石跡・碳石基礎地行掘方・柱穴群(1/120)



第87図 碓石跡等の分布(1/400)

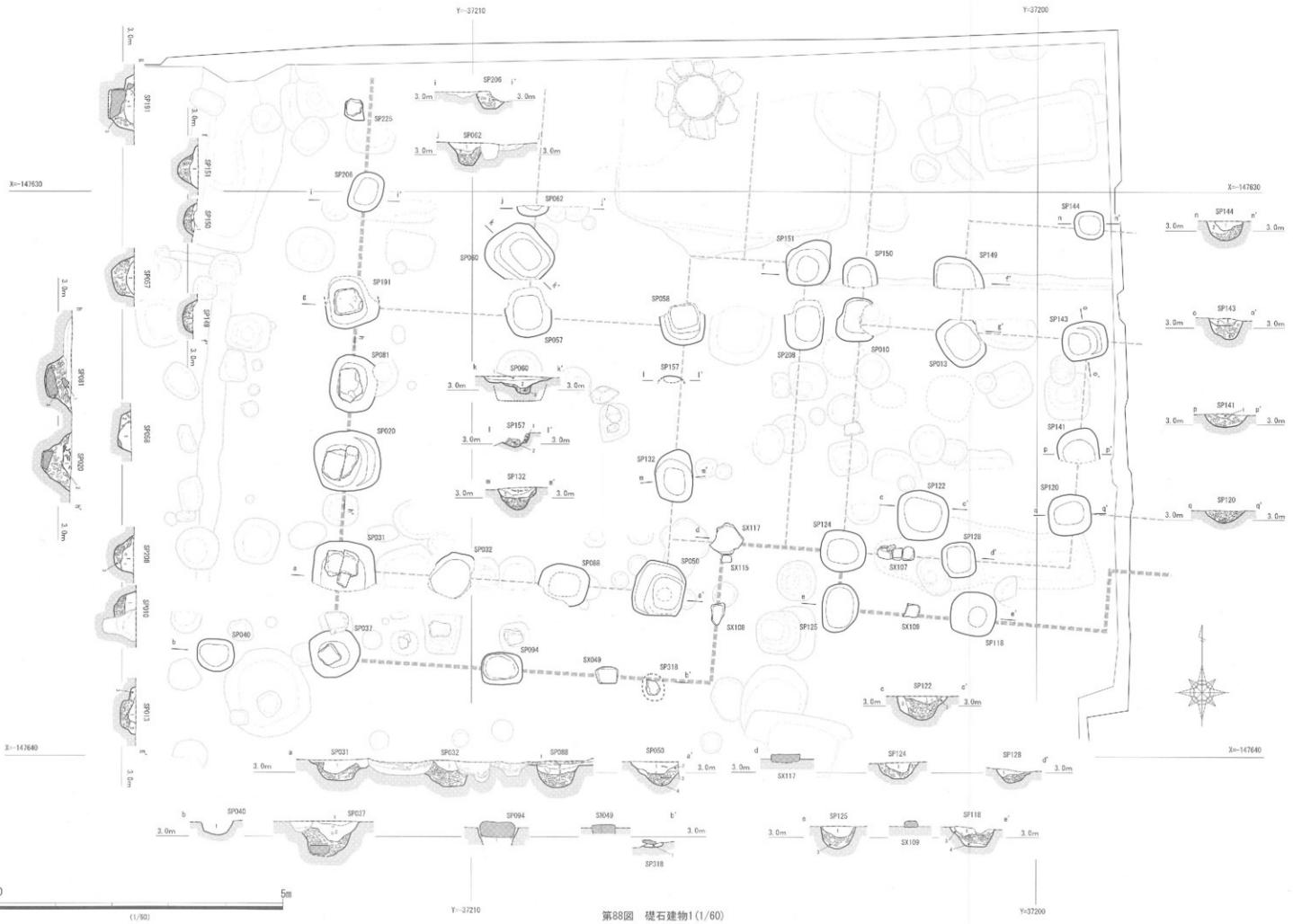
- A4 碓石の基礎地行掘方で、深さは20cm程度。下面に割石を置くが、円礫を伴わないもの。
- B1 碓石跡で、深さは10～20cm程度、周辺の土層(第VII層)を押し下げる設置されているもの。
- B2 碓石跡で、深さは10～20cm程度、周辺の土層(第VII層)を掘り込んで設置されているもの。
- C 碓石の基礎跡もしくは基礎地行掘方とみられるもので、比較的深く、円礫層を伴わないもの。

A1、A2は特に特徴的であり、A1類型のSP020などが南北方向に一間間隔で並ぶほか、これに直行してA2類型のSP032などが並んでおり、一棟の建物に伴うものである可能性が高い。なお、この建物を礎石建物1とし、後に詳しく述べることとする。

A3、A4はごく少なく、A3はSP087、SP090など数基、A4はSP033があげられるにすぎない。何らかの基礎地行を伴うことで共通するが、組み合わせなどは不明である。また、SP035のような石材を配置しただけのもの、SP175のような円礫を配置したものもあるが、いずれも組み合わせなどはわからない。

B1、B2は基礎地行を伴わない礎石跡である。第VII層を押し下げているか、掘り込んでいるかで分類したものである。第VII層が1cm程度の円礫を含む粗砂層である調査区西側では区別しやすいものの、ほかでは実質区別することはできない。SX100、SX417などは礎石と思われる石材だが、明確な掘方を伴わないことから、B1、B2類型に分類される礎石跡との関連も考えられる。また、礎石の撤去後ほとんど痕跡を残していないもの、検出面の関係で検出できなかったものも想定されるほか、ごく小規模な造成など、ほかの性格のものも含んでいる可能性もある。ただし、B1類型はSP237、SP046、SP028、SP030、SP084が東西に、SP025、SP026、SP027が南北にほぼ直行して並んでおり、建物の一部である可能性が高い。出土遺物はほとんどなく、時期決定の根拠に欠けるが、第VII層を押し下げるか掘り込む関係にあることから、藩学が縮小する十八世紀初頭以降のものとみられる。

Cはその他のものである。形態や礎石抜き取り後の埋土とみられる土層を伴うものもあることから、礎石跡もしくは基礎地行掘方ととらえられる。配置に規則性を認めるることは困難だが、調査区北東部のSP007、SP009、SP011、SP095など若干集中するものもある。ほかの類型に分類している礎石跡なども含めて建物を構成している可能性もあり、また、小規模な廐棄土坑、礎石や柱の撤去時の掘方などほかの性格のものを含んでいる可能性が高い。後述するSP029も形態や埋土からはほかと区別できないものの、地鎮的なものである可能性もある。

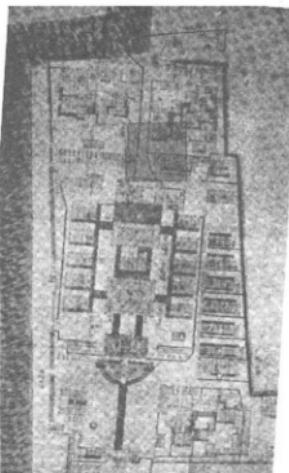


第88図 碓石建物1(1/60)

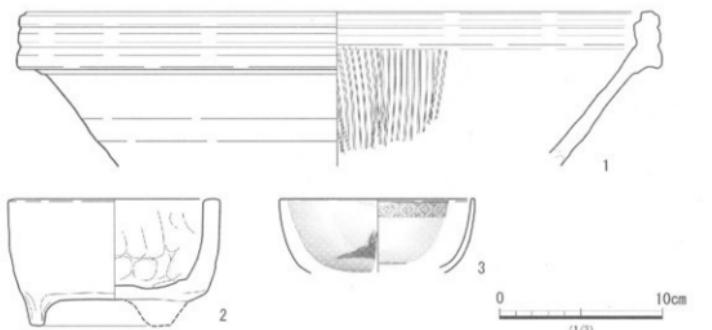
礎石建物 1

A1、A2類型とした礎石基礎群である。34基の礎石基礎がこれに分類される。礎石基礎はA1類型が長径0.8～1.2m、深さ0.5mほどで、大振りな割石を入れ3～5cmの大円礎を詰める。A2類型は長径0.5～0.8m、深さ0.4～0.5mを測り、3～5cmの大円礎を詰める。石材を置くだけの礎石も多い中、かなり強固なつくりの一群といえる。礎石自体が残るものはほとんどなく、SP094があるにすぎない。なお、このSP094の礎石は赤変、剥離しており、強い熱をうけたようである。これらの礎石基礎は、ほかの礎石跡や土坑と切り合う部分では必ず切られている関係にあり、SP088などでは第VII層対応層下から掘り込まれていることも観察できる。近世遺構面1及び2の遺構群の中では古い一群ととらえられる。礎石基礎の配置は、A1類型としたSP020、SP031、SP037、SP081、SP191などが南北方向に並ぶほか、A2類型としたSP032、SP088、SP050がこれに直行して、SP050、SP058、SP132、SP157が南北方向に、SP037、SP094、SP318やSP057、SP058、SP191などもこれらに直行あるいは平行しつつ並んでいる状況が看取できる。これらは1.5～1.9m間隔のものと2.8～3.0m間隔のものがあるようで、それぞれ一間、一間に相当するものとみられる。ほかもそれぞれ何らかの規則性を感じさせる配置ではあるが、複雑であり建物の構造や間取りを想定することは難しい。

出土遺物はわずかに陶磁器片、土師質土器片などがあるが、ごく小さな破片であり、かつ大半は礎石撤去後の流入土から出土したものである。第90図にSP122出土のものを挙げる。これらも礎石撤去後

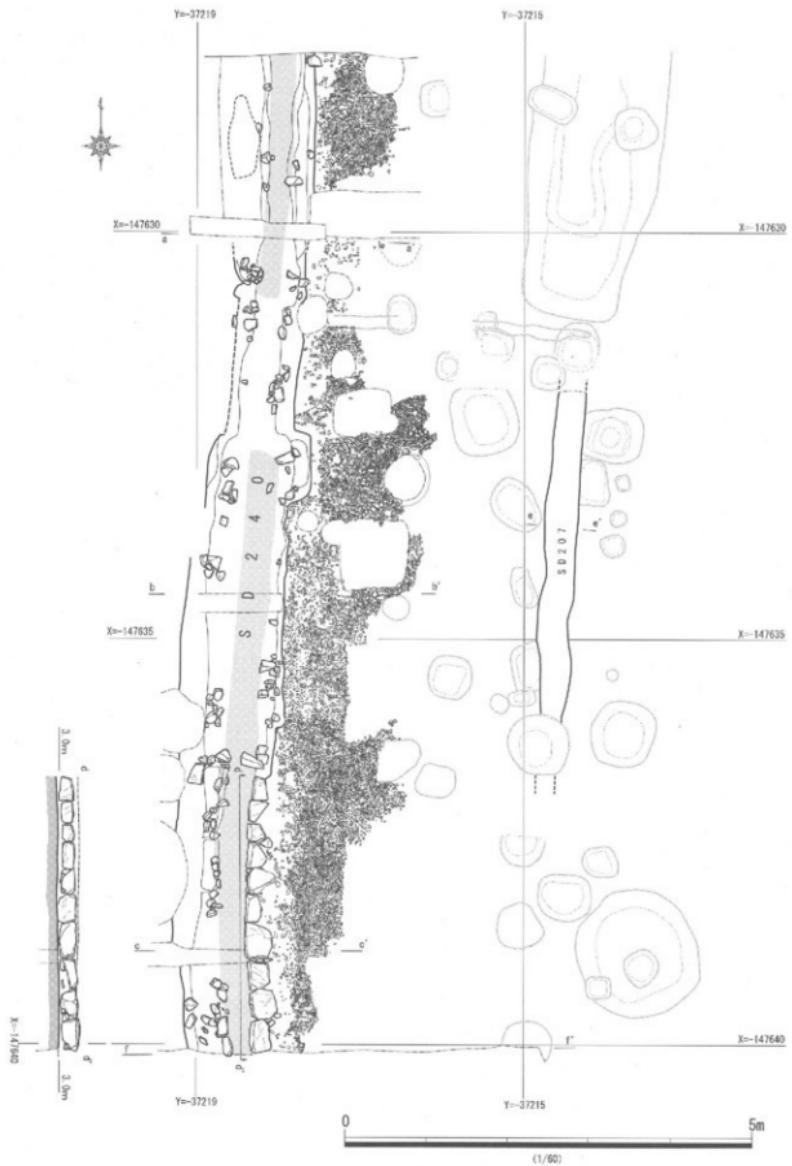


第89図 岡山藩蒲学絵図と調査範囲
『岡山市史 宗教教育編』から



No.	種類	部位・部位	深さ(cm)	形状・性状等の特徴	出土等の特徴	色・模
1	陶質瓦	屋根・口縁～体部	口縁: 35.0	口縁高さの軸部。(外縁) 口縁部カット面、側面右側内面のハラタケリ、(内縁) 1段目ヨココトナギ。体部は斜鉛工具跡。(内縁) 9番にによる削取跡の沿目。	出土: 5cm以下の白色砂粒を多く含む。 (外縁) 表面(10cm)/ (内縁) 1段目(10cm)/ (内縁) 2段目(10cm)	(外縁) 表面(10cm)/ (内縁) 1段目(10cm)/ (内縁) 2段目(10cm)
2	土師質土器	火照・香炉?	口縁: 33.0 高さ: 7.8	口縁部/底部、瓶身部/火照底部。(外縁) ナツ。底辺に窪口(1.5cm)と火照の底部。(内縁) ハガオコ。	出土: 5cm以下の中白色砂粒。 (外縁) 5cm以下の中白色砂粒。 (内縁) 1段目(10cm)/ (内縁) 2段目(10cm)	(外縁) 表面(10cm)/ (内縁) 1段目(10cm)/ (内縁) 2段目(10cm)
3	焼成済付銀鏡	鏡・口縁～体部	口縁: 31.0	方鏡形状の軸部。(外縁) 孔充満。(内縁) 口縁内面に凹(1.5mm)と火照の底部。(内縁) ハガオコ。	出土: 5cm以下の白色砂粒。 (外縁) 表面(10cm)/ (内縁) 1段目(10cm)	(外縁) 表面(10cm)/ (内縁) 1段目(10cm)

第90図 磂石建物1(SP122) 出土遺物(1/3)



第91図 道路遺構(1/60)

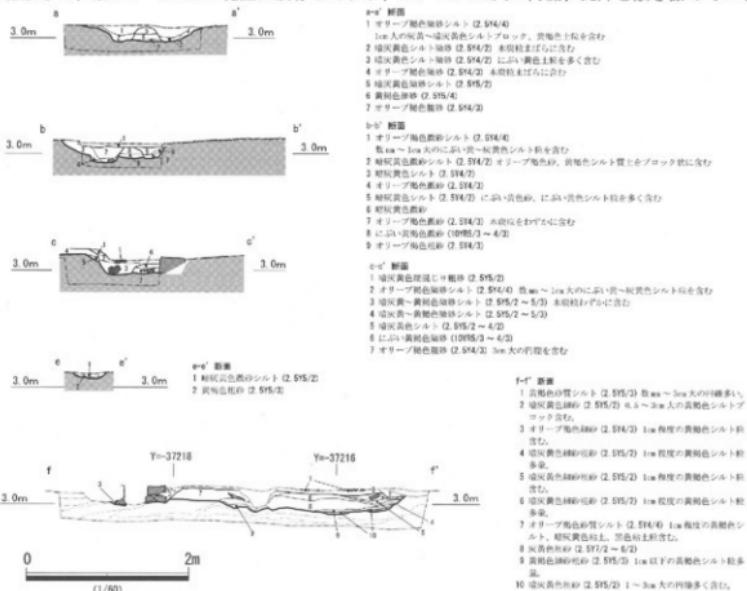
の流入土からの出土である。1は関西系で、体部外面には右方向のヘラケズリを施し、器面も赤褐色で焼きもやや甘く明石産の可能性がある⁽¹⁾。3は肥前染付磁器の碗である。口縁部内面に四方櫛文を廻らせていることから、1710年代以降の製品とみられる⁽²⁾。いずれも礎石建物1廃絶時以降に混入したものとみられる。

なお、『岡山市史 宗教教育編』⁽³⁾に寛文期のものとして掲載されている岡山藩藩学の絵図⁽⁴⁾には、礎石建物1の部分に藩学関係者の屋敷とみられる建物が描かれている。この絵図は岡山大学所蔵の池田家文庫の中には見えず、現在行方不明である。そのため、写真から間取りや柱の配置を読み取ることは難しいが、建物西側、南側の形態や位置、規模などが検出した礎石建物1とほぼ一致する。相互の関係が不明瞭だった礎石基礎も、間取りの境界に一致するようである。また、SX049、SX107、SX108、SX109、SX117など所属不明の東石、石列状の遺構も建物の外郭線や間取りの境界に一致しており、礎石建物1に伴うものである可能性が高い。絵図との一致、次に述べる道路遺構と軸線が一致すること、遺構どうしの前後関係などから、礎石建物1は岡山藩藩学の開校する寛文9年(1669)から藩学が縮小する十八世紀初頭の間のものと考えられる。

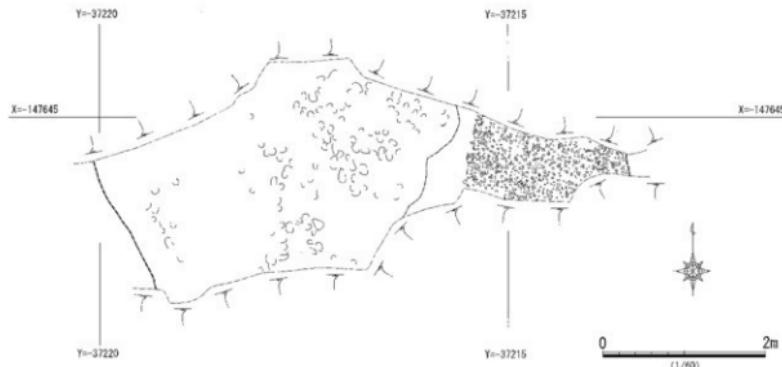
道路遺構

Y=37217ライン付近に南北約12mにわたって第VII層の下から礎敷きの面を検出しており、道路遺構と考えられる。西側には道路側溝(SD240)を伴う。東側は礎敷き面の残りも悪く、側溝はないようでは判然としないが、側溝や礎敷き面と平行してごく浅い溝(SD207)があり、これが道路の東辺をなすものとみられる。SD240からSD207の間はおよそ3.6m(二問)を測る。

礎敷きは、幅0.8~1.6mの範囲に残存しており、0.5~3.0cmの大円礎、瓦片を敷き詰めている。



第92図 道路遺構・道路側溝(SD240) 土層断面図(1/60)



第93図 道路造成土堀方(1/60)

高さは標高3.25mから3.15m、SD240側にわずかに傾斜している。礫敷きはごく薄く1層分敷かれているのみであるが、堅く締まっている。

SD240は両側に石列(護岸)を伴う道路側溝であり、道路側溝と石材の掘方、及びその破却時の掘方からなる。石材の大半は抜き取られてしまっており、道路側の一部を除くと間詰め石とみられる石材が散乱している状況であった。道路側では、南側の3.5mほどの範囲に石列が残っていた。石列は長辺が30~40cm、幅20~35cm、高さ15~25cmほどの花崗岩割石を内側に面をそろえて並べている。深さは道路面から20cm程度で標高3.0m付近が下面となる。幅は破却時の掘方も含めて1.2mほどを測るが、もとは石材の内法で30cm程度、石材設置の掘方で0.8~1mほどの幅とみられる。東西両側の破却時の掘方の間に特徴的な黄褐色～にぶい黄褐色の砂層(第92図アミ部分、第92図a-a'断面6層、b-b'断面8層、c-c'断面6層)が認められるが、これが道路側溝内の埋土とみられる。なお、X=147631からX=147633付近の間はこの砂層が途切れており、門などの道路側溝がとぎれるような構造物があった可能性がある。また、調査区南半のY=37218.6ライン付近、X=147645から147646付近に南北方向の溝状造構を検出している。SD240の延長線上にあたることや下面の高さも標高3.0m付近とほぼ一致することから、SD240の續きとみられる。

SD207は幅約40cm、深さ5~8cmほどの浅い溝状造構で、Y=37214.6mライン付近にX=147632からX=147636付近の約4mにわたって検出した。道路の縁石、土壌の基礎石材などの痕跡とみられ、埋土の黄褐色粗砂を主体とする土層は石材撤去後に流入したものと被察される。

なお、道路造構南端の断面(f-f'断面)では、道路部分の造成が岡山藩藩学の造成土とは別に、溝状に掘られた掘方内に行われていることが観察できる。道路造成上は一部に1~3cm大的円礫を敷き、かなり広い範囲に灰黄色粗砂を入れるもので、調査区南半でもこの道路造構十が一部認められる。調査区南半の道路造成土部分は、東西の幅が北側の道路部分やf-f'断面の造成土部分よりも東へ約3m広くなっている。また、f-f'断面より黄灰色粗砂が広い範囲に厚く入れられている。下面には、東側に円礫を入れ、中央から西側は檐や足などで叩き締めたとみられる細かい凹凸が認められた(第93図)。

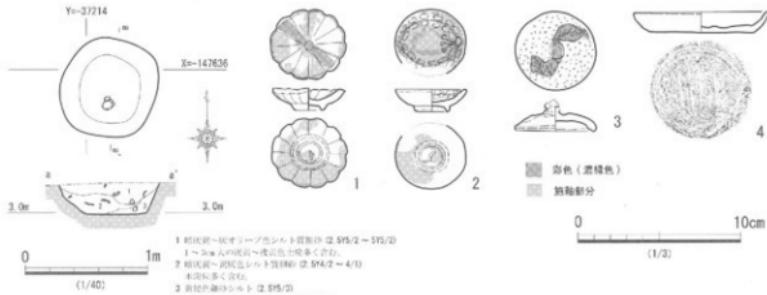
この道路造構は、先に挙げた岡山藩藩学絵図の主要建物の背後に描かれた通路に相当するとみられる。絵図では、調査範囲の中央付近から通路が東に拡がっており、調査区南半の道路造成土部分が、検出した道路幅より東に拡がっているのはこれを反映したものと思われる。絵図の状況、第VII層下から検出していること、礎石建物1と軸線が一致するとみられることなどから、道路造構は礎石建物1と同時に存在したものであり、岡山藩藩学の開校する寛文9年(1669)から藩学が縮小する十八世紀初頭

の間のものと考えられる。

SP029

SP029は、X=147636、Y=37214付近の直径80cm程度、深さ約25cmの土坑である。検出面の高さは標高3.2m程度だが、第VII層に対応するとみられる明黄褐色粘土シルト層を切っており、近世遺構面1に属する十八世紀初頭以降の遺構と考えられる。形態や埋土に際だった特徴はなく、ほかの礎石基礎などと区別することはできない。この土坑底面付近からは、京焼系のミニチュア陶器3点、土師質土器小皿1点が出土した。

これらの土器類は完形であり、ミニチュア土器3点を並べた上に土師質土器小皿をのせるように置かれていた。土師質土器小皿は煤などの付着していない、儀式用の使い捨ての壺とみられ、地鎮的な埋納遺構の可能性が高い。



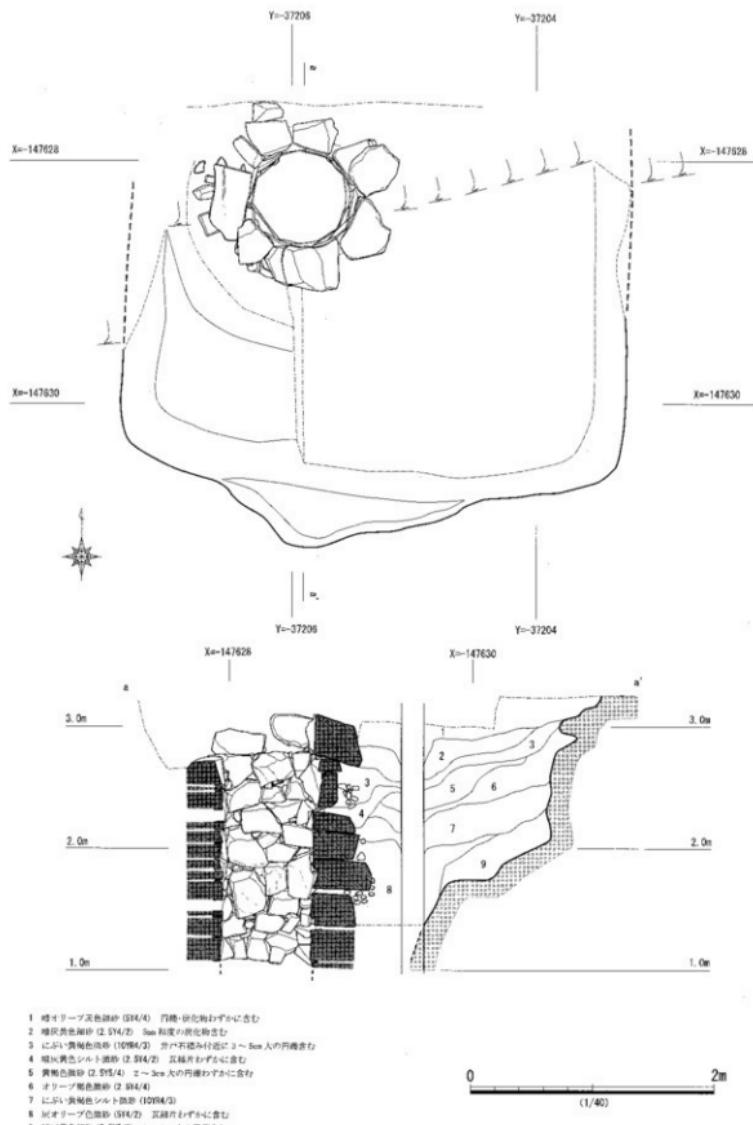
No.	種類	形態・部位	測定値	解説・技術等の特徴	出土土の特徴	色調
1	京焼系手	ミニチュア小皿	径幅 4.1 高さ 1.1	型通りのミニチュア小皿。表面に濃い緑色の色付。内面に薄い緑色の色付。表面内面にて薄い緑色の釉薬を施す。表面内面にて薄い緑色の釉薬を施す。(動) 青緑 (透) 良好	(透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214)	(透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214)
2	京焼系手	ミニチュア小皿	径幅 3.2 高さ 1.2	型通りのミニチュア小皿。内面に薄い緑色の色付。内面に薄い緑色の色付。表面内面にて薄い緑色の釉薬を施す。(動) 青緑 (透) 良好	(透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214)	(透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214)
3	京焼系手	ミニチュア小皿	径幅 3.8 高さ 1.8	型通りのミニチュア小皿。内面に薄い緑色の色付。内面に薄い緑色の色付。表面内面にて薄い緑色の釉薬を施す。(動) 青緑 (透) 良好	(透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214)	(透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214)
4	土師質土器	小皿	口径 8.2 高さ 1.3	外縁にリム。底面。外縁に厚い土被り。表面に砂目。表面と内面にて薄い緑色の釉薬を施す。(透) 青緑 (透) 良好	(透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214)	(透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214) (透) 青緑 (147636, 37214)

第94図 SP029(1/40)と出土遺物(1/3)

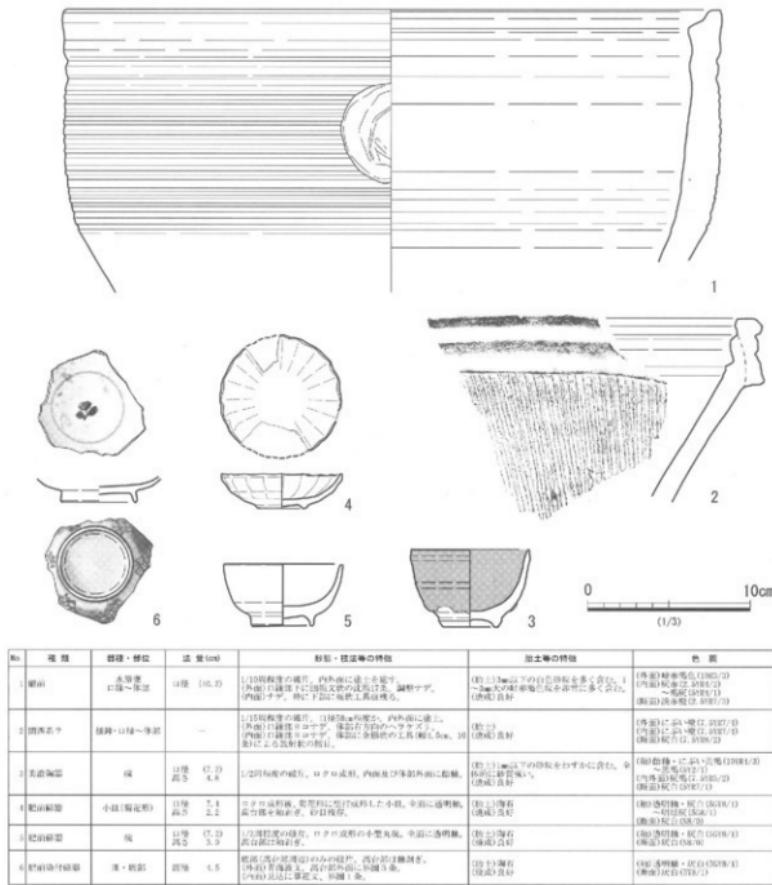
SE064

調査区の北端付近で検出した石組みの井戸である。掘方は東西約4mの隅丸方形で、第VII層上面から掘り込まれている。掘方の北側は調査区外であり、旧円筒校舎の基礎掘方により大半が失われている。掘方のやや西よりに石組みの井戸枠が設けられている。石組みは15~40cm大の花崗岩削石を積んだもので、内法の直径約75cmを測る。石材には欠穴は観察できない。石組みには特に作業単位などは認め難いが、掘方断面の土層から3~4段石材を積むごとに掘方を埋めていったものとみられる。また、石材背後に3~5cm大の円錐を詰める部分もあるが少なく、ほとんどは裏込めの施設はない。井戸内には多量の石組み上部の石材とみられる花崗岩削石が転落していた。

出土遺物は多くなく、特に井戸内からはほとんど出土していない。第96図は掘方からの出土品である。1は備前焼とみられる壺、2は関西系の擂鉢である。2は底部や見込の特徴はわからないが、よく焼き締まった暗色の器面で、堀座の可能性がある。3は瀬戸・美濃系とみられる丸碗で内外面に胎糸を施している。4は肥前焼器で、花形の小皿。高台部に砂目が残存し、十七世紀前半の初期の肥前焼器とみられ



第 95 図 SE064 (1/40)



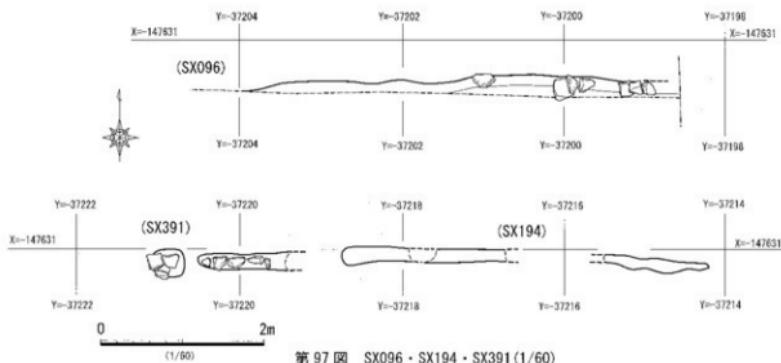
第96図 SE064(掘方)出土遺物(1/3)

る。いずれも混入品でSE064の時期を直接示すものではない。

なお、標高1.2m付近まで掘削した時点で、北側の旧円筒倉庫方堀方埋土が崩落するなどしたため、それ以下の調査を断念した。

SX096-SX194-SX391

SX096、SX194、SX391は第VII層上面、X=-147631ライン付近に検出した遺構である。検出された部分ごとに別の遺構番号を付けたが、同一、もしくは同様の性格の遺構とみられる。これらは底の高さが、SX096で標高3.1～3.15m、SX194で標高3.15～3.2m、SX391で標高3.2m程度と検出面から5～10cmのごく浅い溝状遺構である。SX096、SX391では一部に10～20cmの大花崗岩割石を伴っている。これらの石材は、残存状況は良くないものの、北側に面をそろえているように見える。本来はこうし



第97図 SX096・SX194・SX391(1/60)

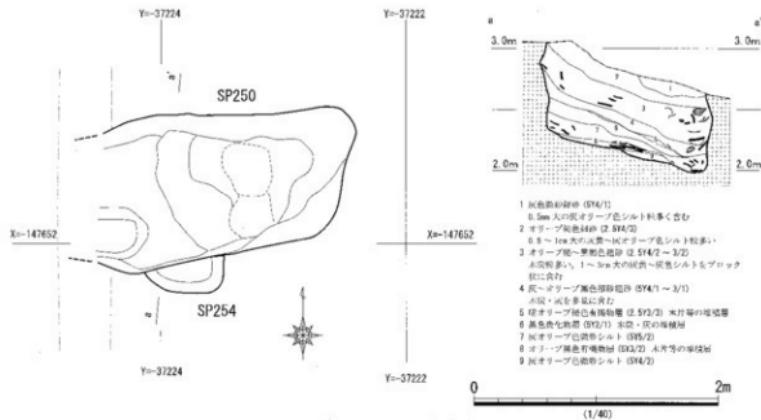
た石材が並んでいたものと思われ、溝状遺構は石材の設置痕又は設置のための掘方と考えられる。建物の縁石や垣敷境の何らかの構造物と思われる。

c) 調査区南半の遺構と出土遺物

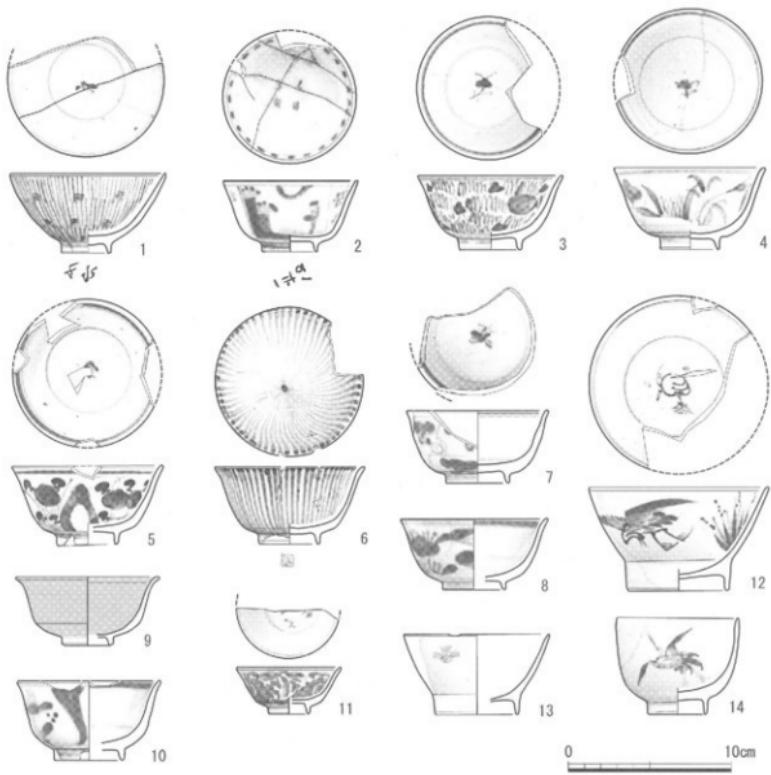
調査区の南半は旧西校舎の基礎やその解体に伴う掘方によって、大部分が標高3.2m程度よりも深く掘削されている。北側の壁面の一部では標高3.2m付近に小円窓を敷いた面が観察でき、調査区北半の近世遺構面2に相当すると考えられるが、複数の遺構面が存在するか否かは検討できない状況であった。

SP250

X=-147651.5, Y=-37224.0付近に検出した不定形の土坑である。東西に長い形態をしており、南北約130cm、東西は220cm以上、西側は調査区外に続いている。ほぼ垂直に掘り込まれており、最も深い部



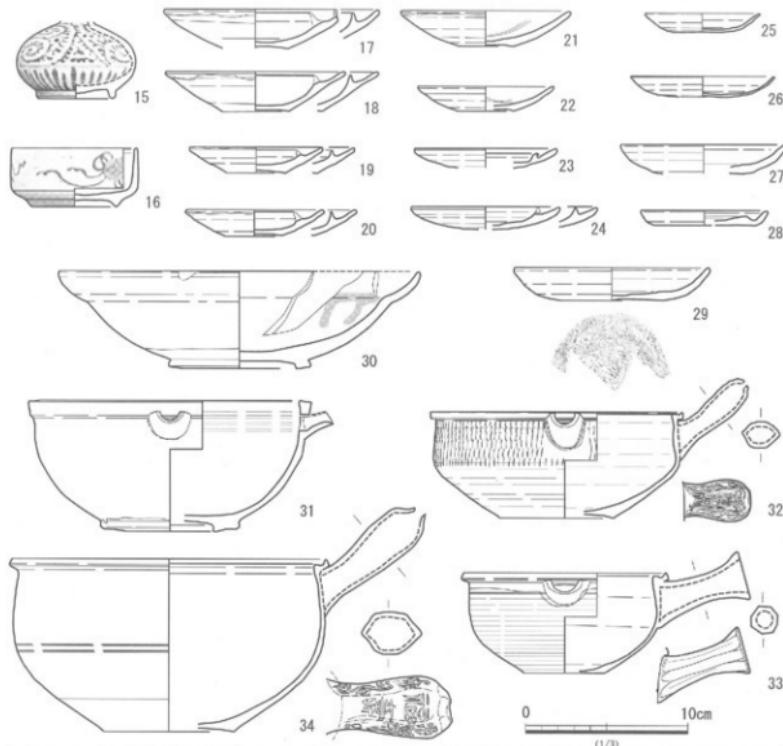
第98図 SP250(1/40)



(1/3)

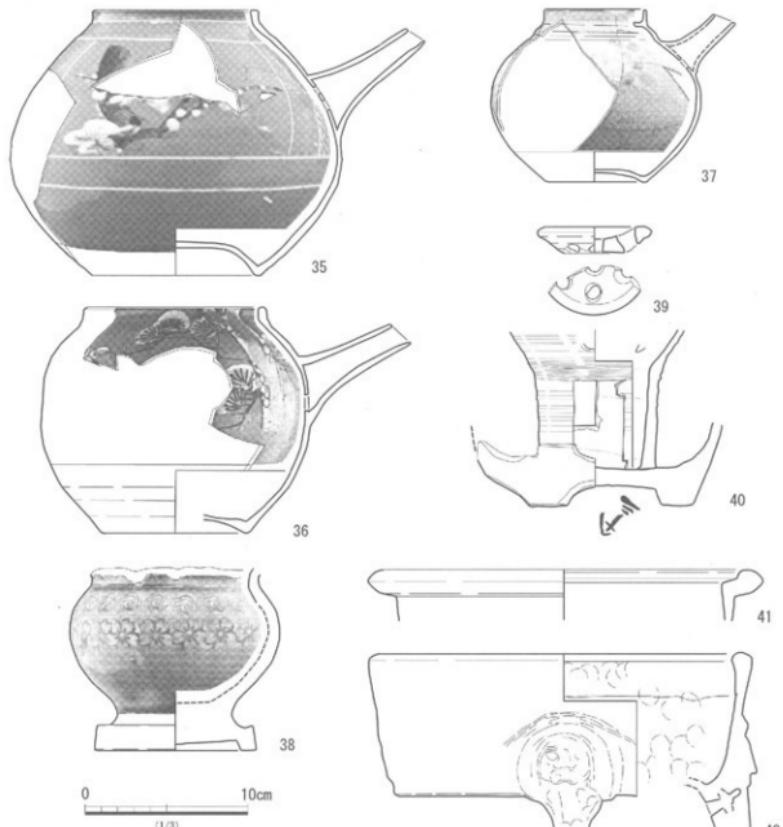
No.	種類	基材・製法	重量(g)	技術・複雑性の特徴	断土等の特徴	計量
1	器底付碗器	陶	9.9 高さ 2.5	丸底的に矧く楕、内面有施釉。施釉なし。内面に火休焼跡。外底は4枚で割り、其の内3枚は施釉なし。外底は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)~2.30) (底) 断面(明治末(1890年))
2	器底付碗器	陶	8.2 高さ 1.5	器底付碗器。高台装飾例。赤みあり。内面に火休焼跡。外底は3枚で内面は「器底付碗器」。(文人、「江戸」)と記す(月形)の文字。内面は2枚で内面は施釉なし。底辺に「大吉」の刻印。	(切) 断面 (底) 断面(明治末(1890年)) (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
3	器底付碗器	陶	9.0 高さ 2.0	器底付碗器。内面に火休焼跡。内面は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
4	器底付碗器	陶	9.0 高さ 3.1	器底付碗器。高台装飾例。赤みあり。内面は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
5	器底付碗器	陶	9.2 高さ 2.0	器底付碗器。高台装飾例。赤みあり。内面は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
6	器底付碗器	陶	9.2 高さ 1.5	器底付碗器。高台装飾例。内外面ともに施釉なし。高台内に火休焼跡。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
7	器底付碗器	陶	8.5 高さ 2.0	器底付碗器。高台装飾例。赤みあり。内面は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
8	器底付碗器	陶	8.9 高さ 2.0	1/3周程度の火休焼。赤反側。高台装飾例。赤みあり。内面は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
9	器底付碗器	陶	9.2 高さ 3.5	1/3周程度の火休焼。赤反側。高台装飾例。赤みあり。内面は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
10	器底付碗器	陶	9.5 高さ 1.5	1/3周程度の火休焼。赤反側。高台装飾例。赤みあり。内面は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
11	器底付碗器	小砾	6.5 高さ 2.0	1/3周程度の火休焼。赤反側。高台装飾例。赤みあり。内面は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
12	器底付碗器	陶	11.9 高さ 2.5	火休焼。高台装飾例。赤反側。内面は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
13	器底付碗器	陶	9.0 高さ 2.0	1/3周程度の火休焼。赤反側。高台装飾例。赤反側。内面は2枚で内面は施釉なし。見出に「吉」文。	(切) 断面 (底) 断面 (底) 直径	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))
14	器底付碗器	陶	7.5 高さ 6.9	深めの火休焼。高台装飾例。赤反側。	(切) 断面 (底) 断面	(横) 断面(明治末(1890年)) (底) 断面(明治末(1890年))

第99図 SP250出土遺物 1(1/3)



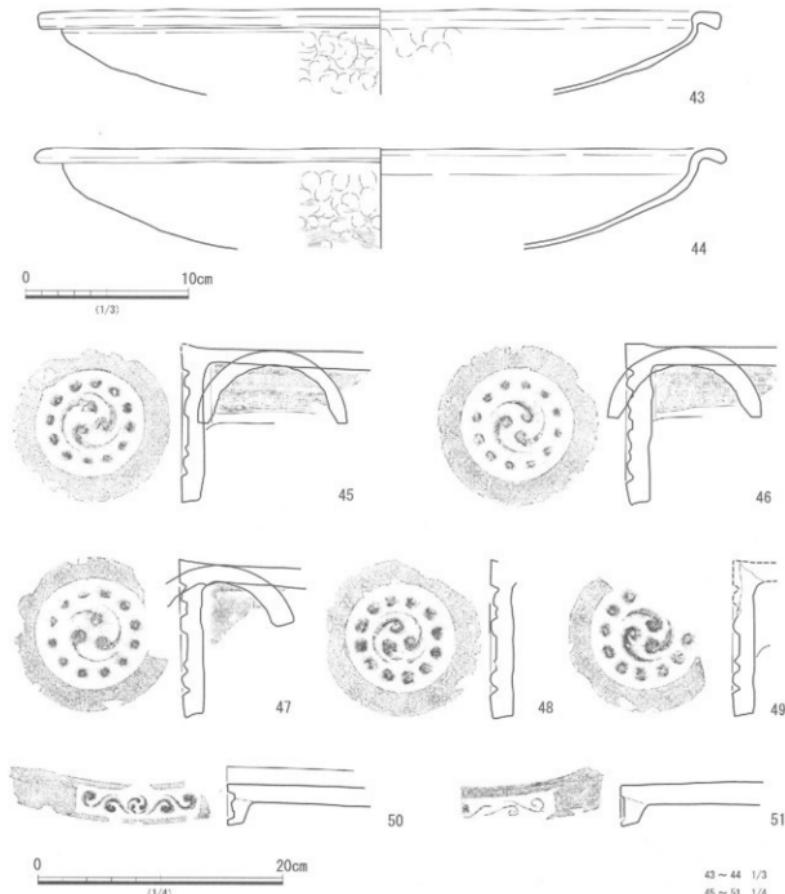
號	種類	器種・形狀	法量 (cm)	剖面・柱底等の特徴	底土等の特徴	色調
15	更衣器付磁器	鉢形・外側	径25.0	口縁は丸頭、高脚の形状。外側に手付留模。下平に切削状。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13) (鉢身)灰白(1006/13)
16	更衣染付器	高脚・舟形	径25.0	口縁は丸頭、高脚の形状。外側に染付模。底付留模。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13) (鉢身)灰白(1006/13)
17	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
18	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
19	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
20	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
21	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
22	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
23	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
24	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
25	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
26	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
27	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
28	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
29	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
30	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
31	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
32	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
33	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
34	灰釉	直筒形	径25.0	直筒形の外側に切削びち矢張。模付留。	黒點青磁	(鉢底)青磁(1006/13)
					0	10cm (1/3)

第 100 図 SP250 土出土遺物 2 (1/3)



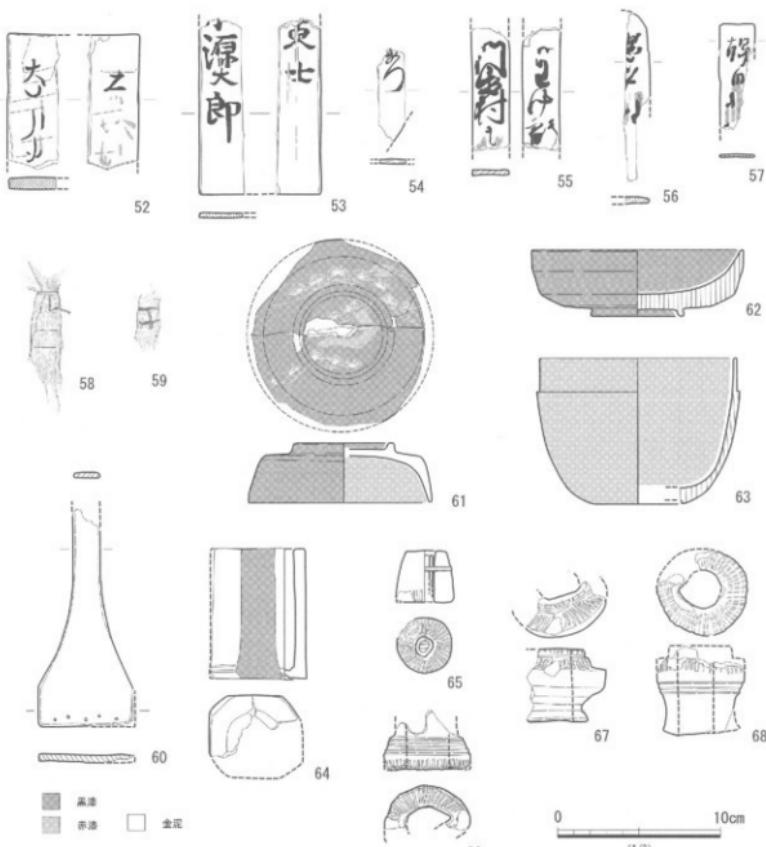
No.	種類・形	基準・部位	度(量)	形状・性状等の特徴	出土等の特徴	内 説
35	罐形系	土瓶	口径 29.0 高さ 29.0 底径 10.1	内面、外側全体に古く火薙跡。調査外露に倒伏した白い陶片で覆はれていた。	(新)土瓶 (陶)土瓶 (陶)火薙	(新)火薙陶・垂耳瓶(口) (新)火薙 (新)火薙(口) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底)
36	罐形系	土瓶	口径 10.8 底径 10.6 高さ 23.0	上部表面に火薙跡。口部周囲と火薙は複合しない。内部、外側全体に古く火薙跡。内面全体に火薙跡。外側全体下半は右方向のラテラリタ。全体上半に火薙跡。	(新)土瓶 (陶)土瓶 (陶)火薙	(新)火薙陶・火薙(口) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底)
37	罐形系	土瓶	口径 12.1 底径 10.9 高さ 10.7	口部周囲と火薙は複合しない。内部、外側全体に古く火薙跡。内面全体に火薙跡。外側全体下部に複合的な火薙跡。白色。底面は軽く火薙が付いていた。	(新)土瓶 (陶)土瓶 (陶)火薙	(新)火薙陶・垂耳瓶(口) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底) (新)火薙(底)
38	瓦器類(?)系罐	16	最大径 12.9 高さ 9.6	輪打けの鉢。内面火薙が生じて斜面には火薙が付る。底部内面、脚付部分に火薙が付いている。	(新)瓦器(?)系罐 (陶)瓦器(?)系罐	(新)瓦器(?)系罐(口) (新)瓦器(?)系罐(底) (新)瓦器(?)系罐(底) (新)瓦器(?)系罐(底) (新)瓦器(?)系罐(底) (新)瓦器(?)系罐(底)
39	土瓶實土器	厚	7.0	1/2切頭形の瓶。底面に凸起があり、頂部から吹き抜き孔がある。瓶の内部に火薙が付いている。	(新)土瓶 (陶)土瓶 (陶)火薙	(新)土瓶 (陶)土瓶 (陶)火薙
40	土瓶實土器	窓口・凹頭	底径 10.9 窓口径 9.5	底面と側面の手造り感。窓口に窓口、凹頭に凹頭を施している。火薙は付いていない。	(新)土瓶 (陶)土瓶 (陶)火薙	(新)土瓶 (陶)土瓶 (陶)火薙
41	瓦器土器	瓦片・瓦縫片	口径 11.0	2/3切頭形の瓶。底面内面にコナギ。C縫隙内面へ火薙が付いている。	(新)瓦器(?)系罐 (陶)瓦器(?)系罐	(新)瓦器(?)系罐(口) (新)瓦器(?)系罐(底) (新)瓦器(?)系罐(底) (新)瓦器(?)系罐(底)
42	瓦器土器	瓦片	口径 12.0 窓口径 11.5	2/3切頭形の瓶。底面内面にコナギ。C縫隙内面へ火薙が付いている。	(新)瓦器(?)系罐 (陶)瓦器(?)系罐	(新)瓦器(?)系罐(口) (新)瓦器(?)系罐(底) (新)瓦器(?)系罐(底) (新)瓦器(?)系罐(底)

第101図 SP250出土遺物3(1/3)



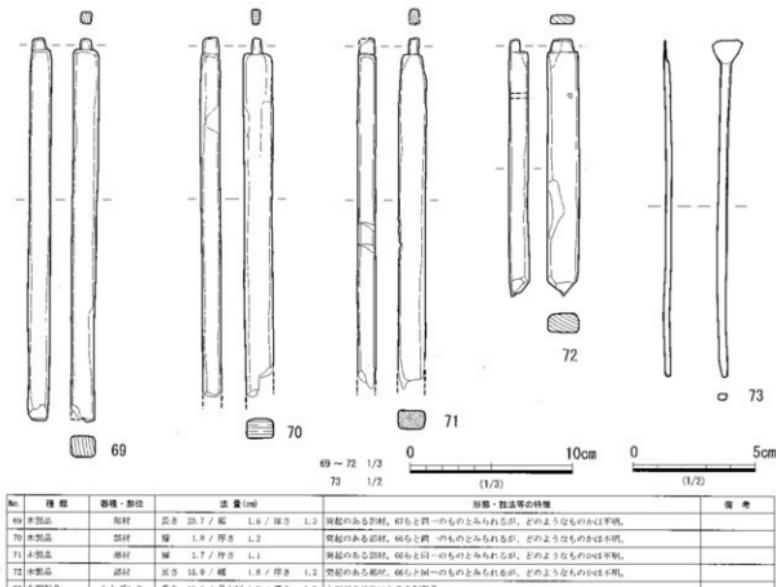
No.	種類	基様・特征	測定値	形態・法線の特徴	断面等の特徴	色・形
43	上部瓦上鉢	輪形	口徑 15.8cm	口縁部付近、底部付近にアーチ状の内縫合。口縁部付近に乳突状の出目がある。	(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。	淡褐色～黄褐色(5.5E/5.5F)
44	上部瓦上鉢	輪形	口徑 15.8cm	口縁部付近、底部付近にアーチ状の内縫合。口縁部付近に乳突状の出目がある。	(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。	淡褐色～黄褐色(5.5E/5.5F)
45	X	輪形	13.5cm 文鏡模様 6.5cm	口縁部付近にアーチ状の内縫合。底部付近にアーチ状の内縫合と乳突状の出目がある。	(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。	淡褐色～黄褐色(5.5E/5.5F)
46	X	輪形	13.5cm 文鏡模様 6.5cm	口縁部付近にアーチ状の内縫合。底部付近にアーチ状の内縫合と乳突状の出目がある。	(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。	淡褐色～黄褐色(5.5E/5.5F)
47	X	輪形	13.5cm 文鏡模様 6.5cm	口縁部付近にアーチ状の内縫合。底部付近にアーチ状の内縫合と乳突状の出目がある。	(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。	淡褐色～黄褐色(5.5E/5.5F)
48	X	輪形	13.5cm 文鏡模様 6.5cm	口縁部付近にアーチ状の内縫合。底部付近にアーチ状の内縫合と乳突状の出目がある。	(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。	淡褐色～黄褐色(5.5E/5.5F)
49	X	輪形	13.5cm 文鏡模様 6.5cm	口縁部付近にアーチ状の内縫合。底部付近にアーチ状の内縫合と乳突状の出目がある。	(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。	淡褐色～黄褐色(5.5E/5.5F)
50	X	輪形	20.0cm 文鏡模様 10.0cm	口縁部付近にアーチ状の内縫合。底部付近にアーチ状の内縫合と乳突状の出目がある。	(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。	淡褐色～黄褐色(5.5E/5.5F)
51	X	輪形	20.0cm 文鏡模様 10.0cm	口縁部付近にアーチ状の内縫合。底部付近にアーチ状の内縫合と乳突状の出目がある。	(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。(断) 1.1km付下の砂利を多く含む。	淡褐色～黄褐色(5.5E/5.5F)

第102図 SP250出土遺物4(1/3-1/4)



No.	種類	基準・部位	寸法(cm)	特徴・推測的特徴		参考
				寸法	推測的特徴	
52	木製品	木丸	厚さ 0.9	30cmのある板幅。表面に「人ロロロ」裏に「トロトロ」との凹凸。		
53	木製品	木丸	厚さ 0.1	表面に「人ロロロ」裏に「トロトロ」との凹凸。		
54	木製品	木丸	厚さ 0.3	表面に「馬」の凹凸。		
55	木製品	木丸	幅 2.3 / 厚さ 0.3	表面に「門」の凹凸。裏に「手」の凹凸。		
56	木製品	木丸	厚さ 0.1	表面に凹凸。		
57	木製品	木丸	幅 2.3 / 厚さ 0.2	表面に凹凸。		
58	漆器・型器	刷毛?		漆付で刷毛。		
59	漆器・型器	刷毛?		漆付で刷毛。		
60	木製品	刷毛?		刷毛付に小孔5。		
61	木製品(漆器)	糊蓋	口径 6.2 / 高さ 3.6	内部に漆液、表面に漆膜を有する。外面には漆液と合流で「粒」を構く。		
62	木製品(漆器)	糊?	口径 (13.0) / 高さ 1.1	内部に漆液を有する。表面、表面内に又漆とかられる漆膜を有。		
63	木製品(漆器)	合?	口径 (12.0) / 高さ 9.0	内部に漆液を有する。表面に又漆と合流で「粒」を構く。		
64	竹製品(漆器)	漆入れ?	径 3.5 / 高さ 3.2	側面丸みの竹筒の漆容器。側面内方に縦取り施設を有。		
65	木製品	糊器皿	径 6.2 / 高さ 3.0	側面アラカ。表面に織込み目多孔。木質の目剥。柄とみられる骨質存在。		
66	木製品	糊器皿	径 (3.0)	側面アラカ。表面に織込み目多孔。		
67	木製品	糊器皿	-	手すりアラカ。上面に織込み目多孔。		
68	木製品	糊器皿	径 (5.0)	手すりアラカ。上面に織込み目多孔。		

第103図 SP250出土遺物 5(1/3)



第104図 SP250出土遺物 6(1/2・1/3)

分は標高1.7mほどとなっている。埋土は瓦片、陶磁器類を多く含む砂層と木片などの植物質が堆積した層からなり、ゴミなどを廃棄した土坑と考えられる。

出土遺物は陶磁器類から木製品、金属製品と多岐にわたる。第99図1～第100図16は肥前産とみられる磁器類である。直線的に開く碗(1)、蝶反形碗(2～11)、広東形碗(12-13)を含んでおり、焼継のあるもの(1-2)も目立つ。第100図17～26は灯明皿である。17～22は信楽窯、23～26は備前窯であり、いずれも「受け」を持つものと、もたないものがある。27～29は土師質土器の小皿で、破片中には煤などの付着は認められないが、やはり灯明皿とみられる。第100図31～第101図37は片口鉢、行平鍋および土瓶である。図示していない破片も含めるとこれらは大変目立つ存在となっている。第101図38は瀬戸美濃系陶器の鉢で、中には灰、炭が詰まった状態で廃棄されていた。39、40は土師質土器の焜炉、41、42は瓦質の火鉢、第102図43、44は炮烙鍋である。45～51は瓦類である。いずれも瓦当面に「キラコ」を塗布するもので、巴や唐草の表現が太く、腹が鋭く、珠文も大きい。第103図52～57は木札である。52、53は「・源太郎」など名前が書かれたもので、やや厚手で、かなりしっかりした字で書かれている。54～57は読みないものが多いが、「門山村」と読めるものなどがあり、ごく薄手で付け札などとみられる。なお、「門山村」は和気郡門山村(現・備前市)であると見られる。58～60は一連のものかどうかは不明だが、刷毛の部材などとみられる。二枚の60のような部材の間に58、59のような結束した棕櫚などはをさんだものとみられる。65～68は和傘の部品とみられる。残存状態が良くないが、片側にきざみ目のある断面円形の製品で中央に孔が抜けており、65ではその中に竹とそれを止める木製の目釘が確認できる。刻み日のある面が平坦なもの(65-66)と、突出しているもの(67-68)があり、それぞれ頭ロクロ、手元ロクロと呼ばれる部品にあたるとみられる。第104図73は金銅製とみられる金属製品で、上端がサジ状に、下端が丸く先端になっている。

SP250は肥前磁器に直線的に開く碗、1820年代以降上流となる端反形碗、1780年代頃出現する広東形碗を含んでおり⁽⁵⁾、瓦類も「キラコ」を伴う特徴から十九世紀前半ごろのものと思われる⁽⁶⁾。

SP251

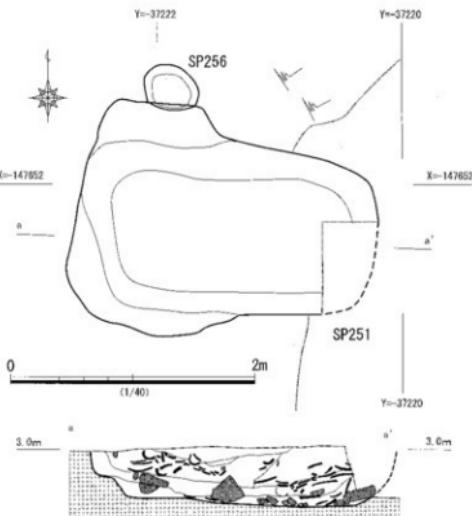
X=-147652.5、Y=-37221.5付近に検出した不定形の土坑である。SE255の掘方埋土を切って掘り込まれており、東西約260cm、南北約180cmを測る。底は最深部で標高2.5m程度であり、埋土に瓦片や花崗岩石材を多量に含んでいる。やはり、ゴミなどを廃棄した土坑と考えられる。

出土遺物は瓦片が大半で、陶磁器類などを含む。第106図1は頁岩製の長方窯である。幅6.5cm、残存長12.4cm、最も厚い部分で厚さ1.5cmを測る。かなり使い込まれた状況で、壁面の部分は大きくくぼんでいる。池の部分、窓縁は欠損している。第107図2～9は肥前産の染付磁器である。2～5は皿、6、7は筒形碗、8、9は丸碗で、見込に五弁花文をあしらった皿、碗が目立つ。10～15は備前焼の灯明皿、第108図16は備前焼の小型の水注である。18は瀬戸・美濃系とみられる筒状の陶器で、火入とみられる。19、20は京焼系の徳利で、20には底面に「上之町 小松屋」の墨書きがある。ある。22～26は土師質土器の小皿である。22は底部に脚台状の突起を3カ所のもつ。いずれも煤などの付着はない。27、28は軒丸瓦である。いずれも外面の色調は灰色～暗灰色で、キラコも用いられていない。キラコの使用され始める十八世紀後半以前のものとみられる。

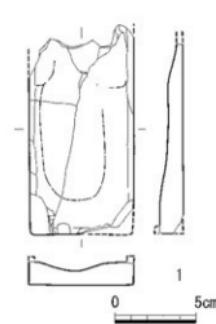
肥前磁器の五弁花文の多用、筒形碗の存在、瓦の特徴などの出土遺物の特徴から十八世紀後半頃に位置づけられる。

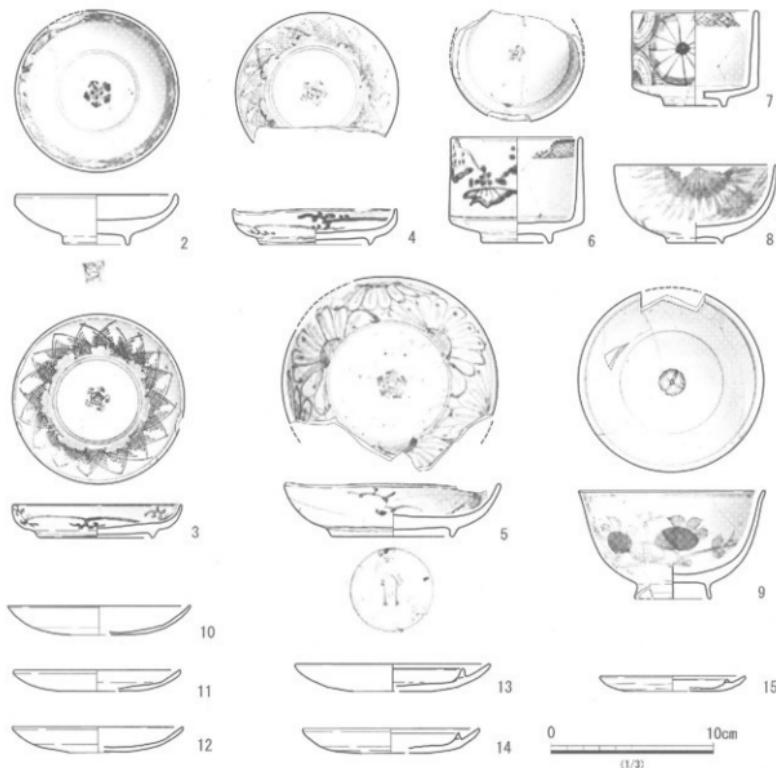
SE255

SE255は東西はY=-37213付近から-37221付近、南北はX=-147650.5付近以南にわたる大型の石組み井戸である。直径約8mのほぼ円形の掘方で、南側は調査区外に及んでいる。掘方は標高-2m付近まで及んでおり、掘方のほぼ中央に木製の井戸枠、及び石組みが設けられている。木製の井戸枠は厚さ約5cm、幅10～12cm、長さ1.88～1.97mの板材を28枚組み合わせ、竹製のたがで止めたものである。



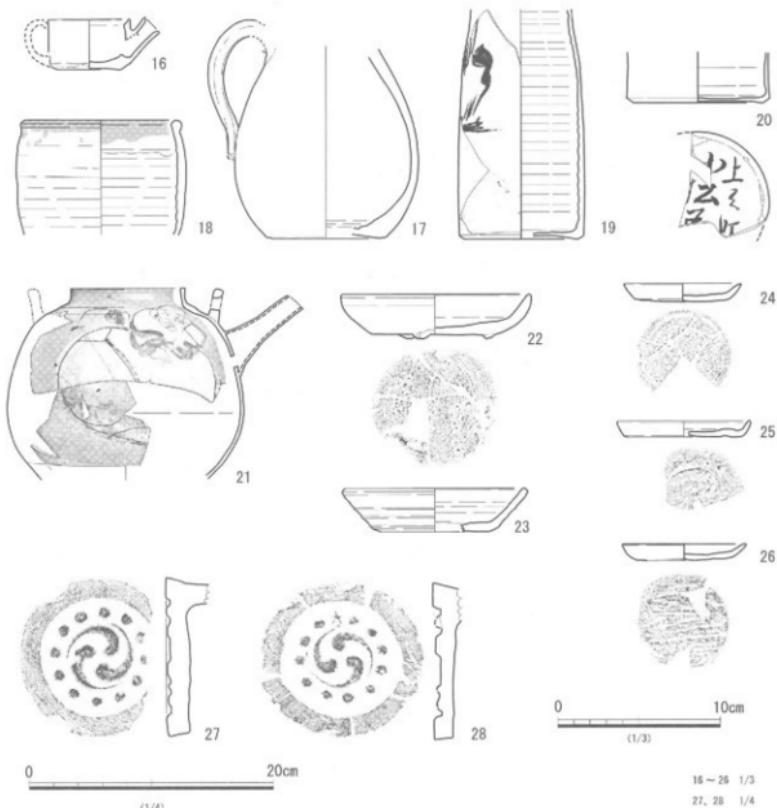
第105図 SP251(1/40)

第106図 SP251出土遺物 I
(1/3)



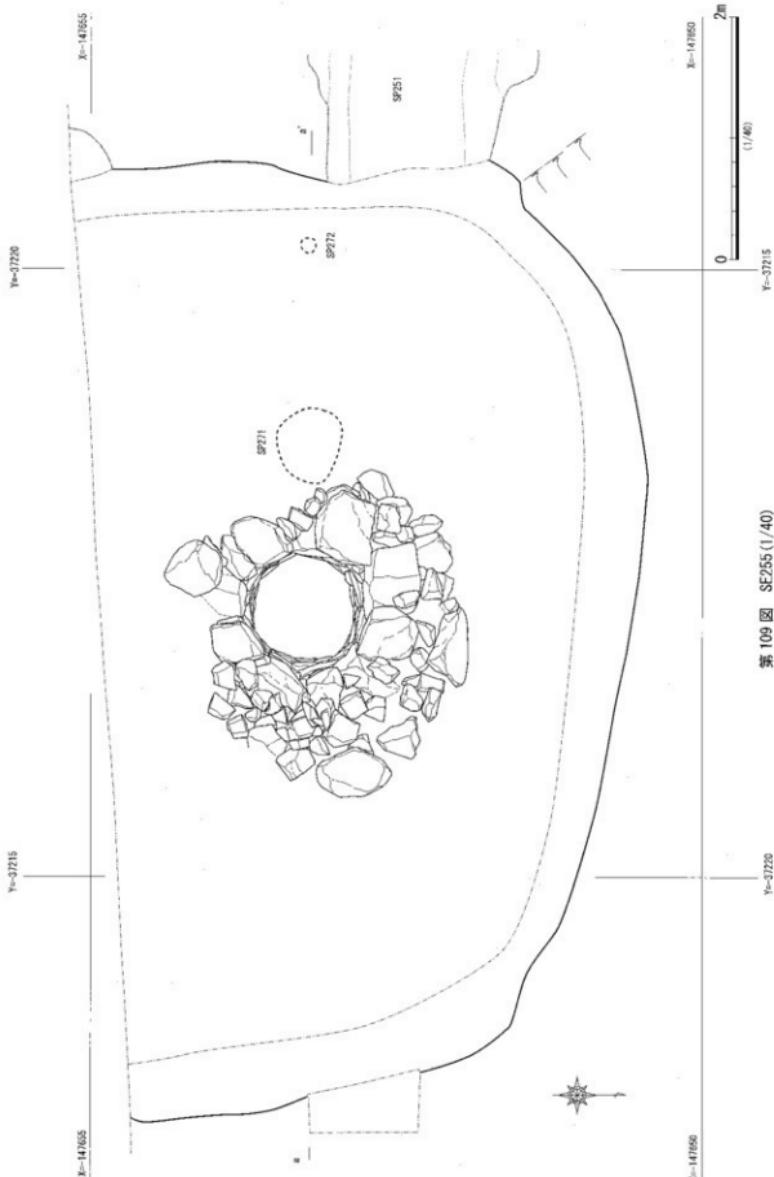
No.	種類	基材・胎体	測量 (mm)	断面・復法器の特徴		胎土等の特徴	色調
				外側	内側		
2. 青磁束付碗器	素	白泥 高さ 底径	16.9 3.1	青磁陶器。斜面有。右内に落款記の支那字。内面は口縁内面に四瓣花、足部に落款有。外腹有花。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(2, 3038-1-7/1) (白)青磁(白)白泥(1)	
3. 青磁束付碗器	素	白泥 高さ 底径	16.4 2.1	青磁陶器。外面は斜面。内面は蘭字文。見込に五瓣花文。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/1) (白)青磁(白)白泥(3)	
4. 青磁束付碗器	素	白泥 高さ 底径	16.1 2.2	青磁陶器。外面は斜面。内面は蘭字文。見込に五瓣花文。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/2) (白)青磁(白)白泥(2)	
5. 青磁束付碗器	素	白泥 高さ 底径	16.3 3.1	青磁陶器。外面は斜面。内面は蘭字文。足部に五瓣花文。内面は丸窓。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/3) (白)青磁(白)白泥(2)	
6. 青磁束付碗器	素	白泥 高さ 底径	16.0 2.0	青磁陶器。斜面有。外腹有花。内面は口縁内面に四瓣花。足部に落款有。外腹有花。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/4) (白)青磁(白)白泥(3)	
7. 青磁束付碗器	素	白泥 高さ 底径	15.9 2.0	青磁陶器。斜面有。外腹有花。内面は口縁内面に四瓣花。足部に落款有。外腹有花。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/5) (白)青磁(白)白泥(4)	
8. 青磁束付碗器	素	白泥 高さ 底径	15.8 1.8	青磁陶器。外面は蘭字文。内面は口縁内面に四瓣花。足部に落款有。外腹有花。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/6) (白)青磁(白)白泥(5)	
9. 青磁束付碗器	素	白泥 高さ 底径	15.8 6.7	青磁陶器。表面部剥離有。外腹に走模様。内面は口縁内面に2条。見込に1条の横模様。見込に1条の深模様。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/7) (白)青磁(白)白泥(6)	
10. 磁碗	小鉢(青磁直)	白泥 高さ 底径	15.9 1.8	1/3周程度の横片。内底平。外腹ハラクズ。施落葉柄有。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/8) (白)青磁(白)白泥(7)	
11. 磁碗	小鉢(青磁直)	白泥 高さ 底径	16.0 1.3	1/3周程度の横片。内底平。外腹ハラクズ。各面ハラクズ。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/9) (白)青磁(白)白泥(8)	
12. 磁碗	小鉢(青磁直)	白泥 高さ 底径	16.0 0.9	1/3周程度の横片。内底平。外腹ハラクズ。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/10) (白)青磁(白)白泥(9)	
13. 磁碗	大鉢(青磁直)	白泥 高さ 底径	17.0 3.0	1/3周程度の横片。受け付。内底平。外腹ハラクズ。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/11) (白)青磁(白)白泥(10)	
14. 磁碗	大鉢(青磁直)	白泥 高さ 底径	16.9 1.9	1/3周程度の横片。受け付。内底平。外腹ハラクズ。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/12) (白)青磁(白)白泥(11)	
15. 磁碗	大鉢(青磁直)	白泥 高さ 底径	16.9 1.5	1/3周程度の横片。受け付。内底平。外腹ハラクズ。	(外)白泥(内)白泥	(白)青磁(白)白泥(3038/13) (白)青磁(白)白泥(12)	

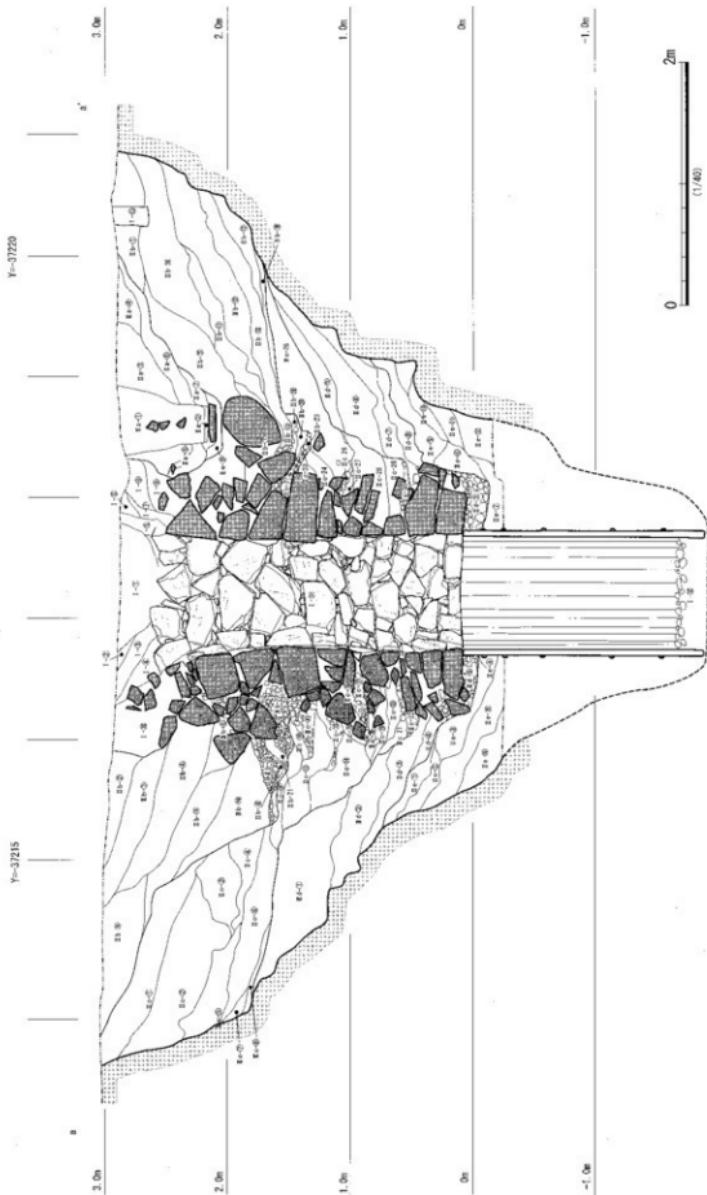
第107図 SP251出土物2(1/3)



No.	種類	器種・剖面	直 径(cm)	断面・接合部の特徴	施工等の特徴	名 調
16	陶器	小水汎 口徑 8.0 高さ 3.1		外底へ鍵目内面に施す。内底表面に強いца。	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を含む。 (施) B部	(外底) 鍵目内面へ(1002-2~4/3) (内底) 鍵目外(1002-3)
17	陶器	本体・底盤付 底盤径13.0 高さ1.0		底盤底へ底盤内面の縁付。外的に底上。	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を多く含む。 (施) C部	(外底) 底(1002-3/2)・(内底) 底(1002-3) (底盤) 底(1002-3)
18	陶器・瓦器系	大入 口徑へ側面 側面へ側面	8.8	口縁部に斜線、外底内面に斜線 側面へ側面	(断) 1.0~3.0cm以下の跡を含む。 (施) C部	(外底) 斜面斜立(1002-1)・斜面に高い斜面一帯 (側面) 1~10段(1002-1)・側面斜立(1002-1)
19	陶器底	底盤 底盤	6.0	1/2程度の窓方、底底。内底堅膜。外底外側に斜線 底底	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を含む。 (施) C部	(外底) 透明斜立(1002-2)・(底) 堅膜・底(1002-2) (底盤) 1~10段(1002-1)・底斜立(1002-1)
20	瓦器底	底盤 底盤	6.0	1/2程度の窓方、底底。内底堅膜。直前に「上2時 小切妻」の跡がある。	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を含む。 (施) C部	(外底) 透明斜立(1002-2)・(底) 堅膜・底(1002-2)
21	陶器底	上端 口徑 11.0 高さ 11.0		底底へ斜面、底底。口縁よりしたるの面無 縁縁へ斜面	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を含む。 (施) C部	(外底) 窓・矢張リーフへ(1002-2~3, 4/2) (底) 斜面・底(1002-2)
22	土師質土器	小葉	口徑 11.7 高さ 8.9	口部に高留り、群花の突起3ヶ所。	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を多く含む。 (施) C部	(外底) 窓口に・群花・突起(1002-2~3, 4/2) (窓) 窓
23	土師質土器	小葉	口徑 11.0 高さ 2.7	1/2程度の窓方。EC間に切妻1段。	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を含む。 (施) C部	(外底) 窓口に・群花(1002-2~3/2) (窓) 窓
24	土師質土器	小葉(口切妻)	口徑 17.2 高さ 1.1	1/2程度の窓方。切妻。外縁を削痕ナシ。	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を含む。 (施) C部	(外底) 窓口に・群花(1002-2~3/2) (窓) 窓
25	土師質土器	小葉(口切妻)	口徑 16.2 高さ 1.1	1/2程度の窓方。底底に削痕ナシ。	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を多く含む。 (施) C部	(外底) 窓口(1002-2)
26	土師質土器	手盤(灯籠形)	口徑 12.1 高さ 1.1	1/2程度の窓方。斜面に底底。	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を多く含む。 (施) C部	(外底) 窓口(1002-2)
27	E.	軽瓦	本体 軽瓦	本体三三文、薄瓦は、瓦ら内面ナシ。	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を含む。 (施) C部	(外底) 窓口へ(1002-2~3/2) (窓) 窓
28	E.	軽瓦	本体 軽瓦	本体三三文、薄瓦は、瓦ら内面ナシ。	(断) 1.0~2.0cm以下の跡を多く含む。 (施) C部	(外底) 窓口(1002-2~3/2) (窓) 窓

第108図 SP251出土遺物3(1/3・1/4)





第110圖 SE255 土層斷面圖 (1/40)

